

5. 両生類・爬虫類・哺乳類調査結果

5. 両生類・爬虫類・哺乳類調査

5.1 両生類・爬虫類・哺乳類調査結果の概要

(1) 確認種

今回とりまとめを行った4水系4河川（直轄管理区間4河川）で確認された両生類は2目6科14種、爬虫類は2目8科15種、哺乳類は8目17科24種でした。それぞれの確認種数が最も多かった河川は、両生類では九州地方の筑後川で11種、爬虫類では中部地方の豊川で12種、哺乳類では九州地方の筑後川で18種でした。

(2) 重要種

今回とりまとめを行った4河川で確認された重要種^{注1)}は、両生類がアカハライモリ、トノサマガエル、ナゴヤダルマガエルの3種、爬虫類がニホンイシガメ、ニホンスッポンの2種、合計で5種でした。哺乳類の重要種は確認されませんでした。重要種の確認種数が最も多かった河川は、両生類は4河川でそれぞれ2種、爬虫類は中部地方の豊川、九州地方の肝属川でそれぞれ2種でした。

注1) 重要種について

本資料においては、次の文献のいずれかに該当する種や亜種を重要種としました。

- ・「文化財保護法」の特別天然記念物及び天然記念物。
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の国内希少野生動植物種及び緊急指定種。
- ・「環境省版レッドリスト（絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト）」（環境省レッドリスト 2020：令和2年3月27日報道発表資料）

絶滅 : 我が国では既に絶滅したと考えられる種。

野生絶滅 : 飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ継続している種。

絶滅危惧Ⅰ類 : 絶滅の危機に瀕している種。

絶滅危惧ⅠA類 : ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。

絶滅危惧ⅠB類 : ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。

（注：底生動物、陸上昆虫類等ではⅠA類とⅠB類を併せて「絶滅危惧Ⅰ類：絶滅の危機に瀕している種」としている。）

絶滅危惧Ⅱ類 : 絶滅の危険が増大している種。

準絶滅危惧 : 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種。

情報不足 : 評価するだけの情報が不足している種。

絶滅のおそれのある地域個体群 : 地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。

(3) 国外外来種

1) 国外外来種の確認状況

今回とりまとめを行った4河川で確認された国外外来種^{注2)}は、両生類がウシガエルの1種、爬虫類がミシシippアカミミガメの1種、哺乳類がハツカネズミ、アライグマ、ハクビシン等の6種、合計で8種でした。国外外来種の確認河川数が多かった種は、両生類ではウシガエルの3河川、爬虫類ではミシシippアカミミガメの3河川、哺乳類ではハツカネズミ、アライグマがそれぞれ3河川でした。

2) 特定外来生物等の確認状況

上記の国外外来種のうち、外来生物法が定めるところの特定外来生物は、両生類ではウシガエルの1種、哺乳類ではヌートリア、アライグマの2種、条件付特定外来生物は、爬虫類ではミシシippアカミミガメの1種でした。生態系被害防止外来種リスト掲載種は、両生類のウシガエルの1種、爬虫類のミシシippアカミミガメの1種、哺乳類はハツカネズミ、ハクビシン、ノネコ等の5種でした。

注 2) 国外外来種の選定基準について

- 1) 外来種とは、本来その生物が生息していない地域に貿易や人の移動等を介して意図的・非意図的に導入された種をいいます。外来種のうち、日本国外から持ち込まれた種を「国外外来種」といい、日本国内の種であっても本来その生物が生息していない地域に、他の場所から持ち込まれた種は「国内外来種」といいます。本資料における国外外来種とは、おおむね明治以降に人為的影響により侵入したと考えられる国外由来の動植物すべてを指し、侵入以後に国内に定着した種であるか否かの判断は、選定の際に考慮していません。
- 2) 特定外来生物とは、『特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律(最終改正および施行令和 7 年 6 月)』により、輸入や飼養等が規制される生物(生きているものに限られ、個体だけではなく、卵、種子、器官なども含まれる)です。おおむね明治以降に国外から導入された国外外来種のうち、生態系、人の生命・身体及び農林水産業へ被害を及ぼすもの、または及ぼすおそれがある生物が指定されています。なお、特定外来生物のうちアメリカザリガニとアカミミガメの 2 種については、通常の特定外来生物の規制の一部を適用除外とする「条件付特定外来生物(通称)」に指定されています。
- 3) 生態系被害防止外来種リスト(我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト)とは、侵略性が高く、我が国の生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼす又はそのおそれがあるものを生態的特性及び我が国に導入される社会的状況も踏まえて選定した外来種のリストです。特定外来生物以外は外来生物法に基づく規制の対象にはなりません。今後の外来種対策の基礎的情報として、様々な主体へ適切な行動を呼びかけるものです。各主体における対策の検討・実施に資するよう、対策の方向性から以下のカテゴリに分類します。

(i) 定着を予防する外来種(定着予防外来種)

定着予防外来種は、「国内に未定着のもの。定着した場合に生態系等への被害のおそれがあるため、導入の予防や水際での監視、野外への逸出・定着の防止、発見した場合の早期防除が必要な外来種」として選定されています。以下の 2 つに細分化されています。

- 侵入予防外来種
国内に未侵入の種。特に導入の予防、水際での監視、バラスト水対策等で国内への侵入を未然に防ぐ必要がある。
- 重点対策外来種
侵入の情報はあるが、定着は確認されていない種。

(ii) 総合的に対策が必要な外来種(総合対策外来種)

総合対策外来種は、「国内に定着が確認されているもの。生態系等への被害のおそれがあるため、国、地方公共団体、国民など各主体がそれぞれの役割において、防除(野外での取り除き、分布拡大の防止等)、遺棄・導入・逸出防止等のための普及啓発など総合的に対策が必要な外来種」として選定されています。以下の 3 つに細分化されています。

- 緊急対策外来種
「外来種被害防止行動計画」における対策の優先度の考え方にに基づき、被害の深刻度に関する基準*1として①～④のいずれかに該当することに加え、対策の実効性、実行可能性として⑤に該当する種。特に緊急性が高く、特に、各主体がそれぞれの役割において、積極的に防除を行う必要がある。
- 重点対策外来種
「外来種被害防止行動計画」における対策の優先度の考え方にに基づき、被害の深刻度に関する基準*1として①～④のいずれかに該当する種。甚大な被害が予想されるため、特に、各主体のそれぞれの役割における対策の必要性が高い。
- その他の総合対策外来種

(iii) 適切な管理が必要な産業上重要な外来種(産業管理外来種)

産業管理外来種は、「産業又は公益的役割において重要で、代替性がなく、その利用にあたっては適切な管理を行うことが必要な外来種」として選定されています。

*1 緊急対策外来種、重点対策外来種における対策の優先度の考え方

(被害の深刻度に関する基準)

- ① 生態系に係る潜在的な影響・被害が特に甚大
- ② 生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高い
- ③ 絶滅危惧種等の生息・生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高い
- ④ 人の生命・身体や農林水産業等社会経済に対して甚大な被害を及ぼす(対策の実効性、実行可能性)
- ⑤ 防除手法が開発されている、又は開発される見込みがある等、一定程度の知見があり、対策の目標を立て得る

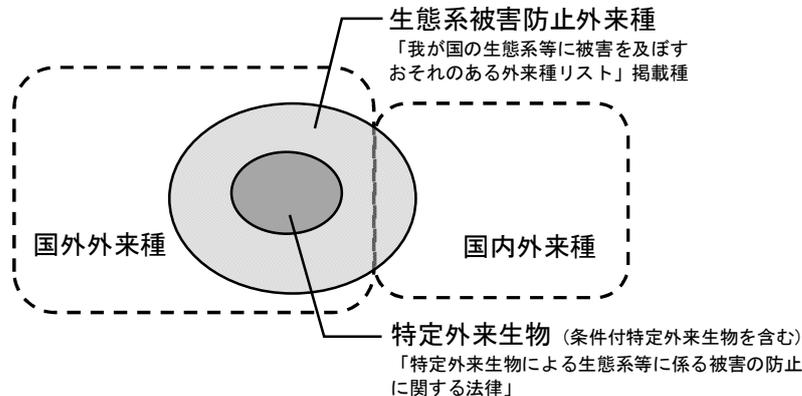


図 5-1 (参考) 国外外来種、国内外来種、生態系被害防止外来種、特定外来生物の関係

表 5-1 確認種一覧(両生類・爬虫類・哺乳類)(1/2)

No.	目名	科名	種和名	学名	中部		九州		確認
					豊川	近畿 由良川	筑後川	肝属川	
1	有尾目	イモリ科	アカハライモリ	<i>Cynops pyrrhogaster</i>	●	●	●	●	3
2	無尾目	ヒキガエル科	ニホンヒキガエル	<i>Bufo japonicus</i>			●		1
3		アマガエル科	ニホンアマガエル	<i>Dryophytes japonicus</i>	●		●		2
4			ヒガシニホンアマガエル	<i>Dryophytes leopardus</i>		●			2
5		アカガエル科	タゴガエル	<i>Rana tagoi</i>			●		2
6			ニホンアカガエル	<i>Rana japonica</i>			●		1
7			ヤマアカガエル	<i>Rana ornativentris</i>			●		2
—			アカガエル属	<i>Rana sp.</i>			●		1
8			トノサマガエル	<i>Pelophylax nigromaculatus</i>	●		●		4
9			ナゴヤダルマガエル	<i>Pelophylax porosus brevipodus</i>	●				1
10			ウシガエル	<i>Lithobates catesbeianus</i>		●			3
11			ツチガエル	<i>Glandirana rugosa</i>	●		●		3
12		スマガエル科	スマガエル	<i>Fejervarya kawamurai</i>	●		●		4
13		アオガエル科	シユレーダルアオガエル	<i>Zhangixalus schlegelii</i>	●		●		3
14			カジカガエル	<i>Buergeria buergeri</i>	●		●		3
					水系別確認種数	8	5	11	10
					地方別確認種数	8	5	12	
1	カメ目	イシガメ科	ニホンイシガメ	<i>Mauremys japonica</i>	●			●	3
2			クサガメ	<i>Mauremys reevesii</i>	●				2
3		ヌマガメ科	ミシシビアカミミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>	●		●		2
4		スッポン科	ニホンスッポン	<i>Pelodiscus japonicus</i>	●			●	3
—			スッポン属	<i>Pelodiscus sp.</i>			●		1
—		—	カメ目	<i>Testudines</i>			●		1
5	有鱗目	ヤモリ科	ニホンヤモリ	<i>Gekko japonicus</i>	●		●		2
—			ヤモリ属	<i>Gekko sp.</i>			●		2
6		トカゲ科	ニホントカゲ	<i>Plestiodon japonicus</i>			●		2
7			ヒガシニホントカゲ	<i>Plestiodon finitimus</i>	●				1
8		カナヘビ科	ニホンカナヘビ	<i>Takydromus tachydromoides</i>	●		●		4
9		ナミヘビ科	シマヘビ	<i>Elaphe climacophora</i>	●		●		4
10			アオダレイシヨウ	<i>Elaphe quadrivirgata</i>	●		●		4
11			ジムグリ	<i>Euprepiophis conspicillatus</i>			●		1
12			シロマダラ	<i>Lycodon orientalis</i>			●		2
13			ヒバカリ	<i>Hebius vibakari vibakari</i>	●		●		4
14			ヤマカガシ	<i>Rhabdophis tigrinus</i>	●		●		2
15		クサリヘビ科	ニホンマムシ	<i>Gloydius blomhoffii</i>	●		●		3
					水系別確認種数	12	8	11	10
					地方別確認種数	12	8	13	

表 5-1 確認種一覧(両生類・爬虫類・哺乳類)(2/2)

No.	目名	科名	種和名	学名	中部		近畿	九州		確認
					豊川	由良川	筑後川	肝属川		
1	モグラ目(食虫目)	トガリネズミ科 モグラ科	ジネズミ コバモグラ	<i>Crocitara dsinezumi</i> <i>Mogera wogura</i>	●			●	●	3
—			モグラ属	<i>Mogera sp.</i>	●		●	●		3
3	コウモリ目(翼手目)	キクガシラコウモリ科	コキクガシラコウモリ(ニホンコキクガシラコウモリ)	<i>Rhinolophus cornutus (R. c. cornutus)</i>					●	2
4			キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i>	●		●		●	3
5			アブラコウモリ	<i>Pipistrellus abramus</i>	●					1
—			ヒナコウモリ科	Vespertilionidae	●		●	●	●	4
—			コウモリ目(翼手目)	Chiroptera				●		1
6	サル目(霊長目)	オナガザル科	ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i>					●	1
7	ウサギ目	ウサギ科	ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i>	●			●	●	3
8	ネズミ目(齧歯目)	ネズミ科	ハタネズミ	<i>Alexandromys montebelli</i>				●		1
9			アカネズミ	<i>Apodemus speciosus</i>	●		●	●	●	4
10			カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i>	●		●	●	●	4
11			ハツカネズミ	<i>Mus musculus</i>	●		●	●	●	3
—			ネズミ科	Muridae	●			●	●	3
12			ヌートリア	<i>Myocastor coypus</i>	●		●			2
13	ネコ目(食肉目)	クマ科	ツキノワグマ	<i>Ursus thibetanus</i>			●			1
14			アライグマ	<i>Procyon lotor</i>	●		●	◎		3
15			イヌ科	タヌキ	●		●	●	●	4
16			キツネ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>	●		●	●	●	4
17			テン(ホンドテン)	<i>Vulpes vulpes</i>	●		●	●	●	3
18			イタチ科	<i>Martes melampus (M. m. melampus)</i>			●	●	●	3
—			シベリアイタチ	<i>Mustela sibirica</i>				●		1
—			イタチ属	<i>Mustela sp.</i>			●	●	●	4
19			アナグマ	<i>Meles anakuma</i>	●			●	●	3
—			イタチ科	Mustelidae				●		1
20			ジャコウネコ科	<i>Paguma larvata</i>	●		●			2
21			ネコ科	<i>Felis catus</i>	●			●		2
22	ウシ目(偶蹄目)	イノシシ科	イノシシ	<i>Sus scrofa</i>			●	●	●	3
23			シカ科	<i>Cervus nippon</i>	●		●	●	●	3
—			ウシ目(偶蹄目)	Artiodactyla	●			●		2
24	クジラ目(鯨)	ネズミイルカ科	スナメリ	<i>Neophocaena asiaorientalis</i>				●		1
					水系別確認種数	17	15	18	15	
					地方別確認種数	17	15	18	21	

注1) 種数の計数は「平成28年度版河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアル(河川版) (平成28年1月改訂)」に準拠して行った。
 注2) ◎は、確認(うち◎は、P5-51~P5-56)に示す分析対象種のうち当該河川の直轄管理区間で今回初確認)を示す。

表 5-2 重要種一覧(両生類・爬虫類・哺乳類)

No.	目名	科名	種名	学名	重要種			中部	近畿	九州		確認
					文化財保護法	種の保存法	環境省版レッドリスト			豊川	由良川	
1	有尾目	イモリ科	アカハライモリ	<i>Cynops pyrrhogaster</i>				●	●	●	●	3
2	無尾目	アカガエル科	トナサマガエル	<i>Pelophylax nigromaculatus</i>			●	●	●	●	●	4
3			ナニヤダルマガエル	<i>Pelophylax porosus brevipodus</i>			●	●				1
							2	2	2	2	2	
							水系別確認種数					
							地方別確認種数					
1	カメ目	インガメ科	ニホンインガメ	<i>Mauremys japonica</i>			●	●				3
2		スツボシ科	ニホンスツボシ	<i>Pelodiscus japonicus</i>			●	●				2
							2	1	0	2		
							水系別確認種数					
							地方別確認種数					
							2	1	1	2		

注1) 種数の計数は「平成28年度版河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアル〔河川版〕（平成28年1月改訂）」に準拠して行った。
 注2) ●◎は、確認（うち◎は、P5-51～P5-56に示す分析対象種のうち当該河川の直轄管理区間で今回初確認）を示す。

凡例)

文化財保護法

国指定特別天然記念物、天然記念物

特天：特別天然記念物、天：天然記念物

種の保存法：絶滅のおそれのある野生動物種の種の保存に関する法律

国内希少野生動物種および緊急指定種

環境省版レッドリスト（絶滅のおそれのある野生動物種のリスト）環境省、令和2年3月27日報道発表資料

絶滅(EX)：我が国ですでに絶滅したと考えられる種

野生絶滅(EW)：飼育・栽培下でのみ存続している種

絶滅危惧ⅠA類(CR)：ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種

絶滅危惧ⅠB類(EN)：ⅠA類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種

絶滅危惧Ⅱ類(VU)：絶滅の危険が増大している種

準絶滅危惧(NT)：現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

情報不足(DD)：評価するだけの情報が不足している種

地域個体群(LP)：地域的に孤立しており、地域レベルでの絶滅のおそれが高い個体群

表 5-3 国外外来種一覧(両生類・爬虫類・哺乳類)

No.	目名	科名	種和名	学名	国外外来種			九州		確認
					中部	近畿	九州	筑後川	肝属川	
1	無尾目	アカガエル科	ウシガエル	<i>Lithobates catesbeianus</i>	●	●	●	●	●	3
				水系別確認種数	1	1	1	1	0	
				地方別確認種数	1	1	1	1	1	
1	カメ目	ヌマガメ科	ミシシippieアカミミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>	●	●	●	●	●	3
				水系別確認種数	1	1	1	1	0	
				地方別確認種数	1	1	1	1	1	
1	ネズミ目(齧歯目)	ネズミ科	ハツカネズミ	<i>Mus musculus</i>	●			●	●	3
2		ヌートリア科	ヌートリア	<i>Myocastor coypus</i>	●		●			2
3	ネコ目(食肉目)	アライグマ科	アライグマ	<i>Procyon lotor</i>	●		●	◎		3
4		イタチ科	シベリアイタチ	<i>Mustela sibirica</i>				●		1
5		ジャコウネコ科	ハクビシン	<i>Paguma larvata</i>	●		●			2
6		ネコ科	ノネコ	<i>Felis catus</i>	●		●			2
				水系別確認種数	5	3	3	4	1	
				地方別確認種数	5	3	3	4	4	

注1) 種数の計数は「平成28年度版河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアル[河川版] (平成28年1月改訂)」に準拠して行った。

注2) ●◎は、確認 (うち◎は、P5-51～P5-56に示す分析対象種のうち当該河川の直轄管理区間で今回確認) を示す。

凡例)

「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律 (以下「外来生物法」) 」指定種

特定: 「特定外来生物法」における特定外来生物

条件付: 特定外来生物のうち条件付特定外来生物

我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト (以下「生態系被害防止外来種リスト」) 掲載種

定着 (侵入予防): 国内に未侵入・未定着であり、定着した場合に生態系等への被害のおそれがあるため、特に国内への侵入を未然に防ぐ必要がある外来種。

定着 (その他): 侵入の情報はあるが、国内に未定着であり、定着した場合に生態系等への被害のおそれがあるため、早期防除が必要な外来種。

総合 (緊急): 国内に定着が確認されており、生態系等への被害のおそれがあるため、総合的に対策が必要な外来種のうち、緊急性が高く、積極的に防除が必要な外来種。

総合 (重点): 国内に定着が確認されており、生態系等への被害のおそれがあるため、総合的に対策が必要な外来種のうち、甚大な被害が予想される重点的に対策が必要な外来種。

総合 (その他): 国内に定着が確認されており、生態系等への被害のおそれがあるため、総合的に対策が必要な外来種のうち、緊急、重点に該当しない種。

産業: 産業又は公益的役割において重要であり、利用において逸出等の防止のための適切な管理に重点を置いた対策が必要な外来種。

5.2 河川管理との関わり（河川の自然度・健全度）

ここでは、河川の自然度・健全度や河川管理との関わりが考えられるカヤネズミ、カジカガエル、ニホンイシガメなどの確認状況を整理しました。

【川らしいハビタット由来の種の確認状況】

（哺乳類調査）

• カヤネズミは自然分布域の4河川で確認

高茎のイネ科やカヤツリグサ科草地に営巣するカヤネズミは、高水敷の植生変化の影響を受ける可能性があります。そこで、カヤネズミの確認状況の変化について整理しました。

今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）では、4河川が自然分布域内であり、カヤネズミは、そのうちの4河川で確認されました。

分析対象とした河川数（自然分布域内の調査河川数）に占めるカヤネズミが確認された河川数の割合からみると、5巡目の途中ではありますが、1巡目から3巡目にかけて増加傾向にあり、3巡目から4巡目ではほぼ横ばいです。調査地区数の割合でも、3巡目から4巡目は、ほぼ横ばいの傾向がみられました。

北海道にのみ生息するヒメヤチネズミ（ミカドネズミ）、ハントウアカネズミ（カラフトアカネズミ）は、今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）に自然分布域内の河川は含まれず、いずれの種も確認されませんでした。

（資料掲載：5-11～16 ページ、5-51～5-52 ページ）

表 5-4 1～5 巡目調査の確認河川数の比較

種類	1 巡目調査 〈74 河川〉 (59 河川)	2 巡目調査 〈118 河川〉 (97 河川)	3 巡目調査 〈122 河川〉 (99 河川)	4 巡目調査 〈122 河川〉 (99 河川)	5 巡目調査 〈113 河川〉 (92 河川)
カヤネズミ	42 河川 〔71.2〕	76 河川 〔78.4〕	86 河川 〔86.9〕	86 河川 〔86.9〕	81 河川 〔88.0〕

表 5-5 1～5 巡目調査の確認河川数の比較

種類	1 巡目調査 〈74 河川〉 (8 河川)	2 巡目調査 〈118 河川〉 (12 河川)	3 巡目調査 〈122 河川〉 (13 河川)	4 巡目調査 〈122 河川〉 (13 河川)	5 巡目調査 〈113 河川〉 (13 河川)
ヒメヤチネズミ (ミカドネズミ)	1 河川 〔12.5〕	1 河川 〔8.3〕	3 河川 〔23.1〕	2 河川 〔15.4〕	2 河川 〔15.4〕
ハントウアカネズミ (カラフトアカネズミ)	7 河川 〔87.5〕	7 河川 〔58.3〕	8 河川 〔61.5〕	7 河川 〔53.8〕	4 河川 〔30.8〕

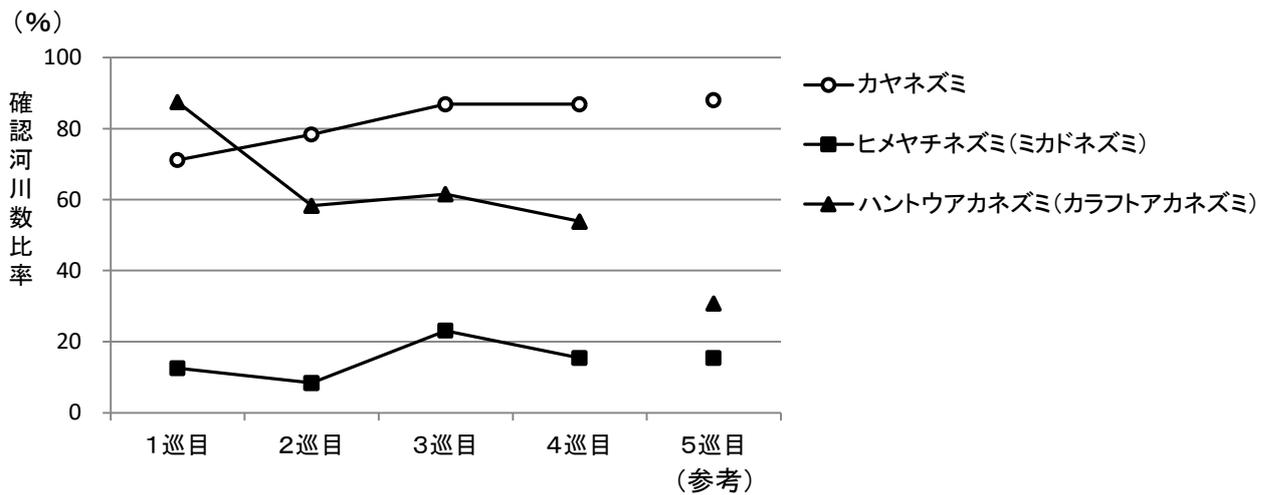


図 5-2 確認河川数比率の変化

- ※ 確認河川数の比較は、直轄管理区間のデータを対象とした。
- ※ 1～4 巡目調査のデータは、調査実施全河川のうち、種名等についてスクリーニングされ、河川環境データベースに格納されている調査データを対象にした。
- ※ 〈 〉内は調査対象河川数を示す。
- ※ ()内は分析対象とした河川数（自然分布域内の調査河川数）を示す。
- ※ []内は分析対象河川数に対する確認河川数の割合（%）を示す。
- ※ 分析対象河川は自然分布域内の調査実施河川を対象とした。
- ※ カヤネズミは、亜種ホンシュウカヤネズミとシコクカヤネズミを含む。
- ※ 5 巡目調査は実施途中であり、掲載しているデータは平成 28～令和 6 年度(2016～2024 年度)の調査結果を示す。

表 5-6 1～5 巡目調査の確認地区数の比較

種類	1 巡目調査 (545 地区) (420 地区)	2 巡目調査 (831 地区) (674 地区)	3 巡目調査 (874 地区) (691 地区)	4 巡目調査 (783 地区) (612 地区)	5 巡目調査 (708 地区) (571 地区)
カヤネズミ	133 地区 [31.7]	264 地区 [39.2]	347 地区 [50.2]	334 地区 [54.6]	328 地区 [57.4]

表 5-7 1～5 巡目調査の確認地区数の比較

種類	1 巡目調査 (545 地区) (52 地区)	2 巡目調査 (831 地区) (70 地区)	3 巡目調査 (874 地区) (82 地区)	4 巡目調査 (783 地区) (86 地区)	5 巡目調査 (708 地区) (82 地区)
ヒメヤチネズミ (ミカドネズミ)	2 地区 [3.8]	2 地区 [2.9]	6 地区 [7.3]	3 地区 [3.5]	5 地区 [6.1]
ハントウアカネズミ (カラフトアカネズミ)	11 地区 [21.2]	18 地区 [25.7]	19 地区 [23.2]	15 地区 [17.4]	6 地区 [7.3]

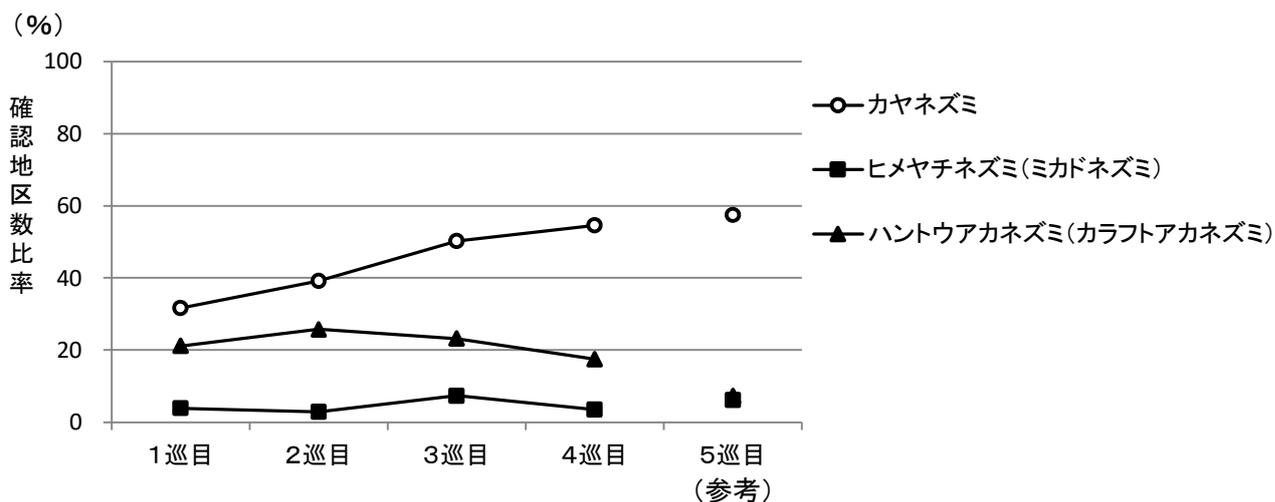


図 5-3 確認地区数比率の変化

- ※ 確認地区数の比較は、直轄管理区間のデータを対象とした。
- ※ 1～4 巡目調査のデータは、調査実施全地区のうち、種名等についてスクリーニングされ、河川環境データベースに格納されている調査データを対象にした。
- ※ 〈 〉内は調査対象地区数を示す。
- ※ ()内は分析対象とした地区数（自然分布域内の調査地区数）を示す。
- ※ []内は分析対象地区数に対する確認地区数の割合（%）を示す。
- ※ 分析対象地区は自然分布域内の調査実施河川を対象とした。
- ※ カヤネズミは、亜種ホンシュウカヤネズミとシコクカヤネズミを含む。
- ※ 5 巡目調査は実施途中であり、掲載しているデータは平成 28～令和 6 年度(2016～2024 年度)の調査結果を示す。

カヤネズミは、高茎のイネ科やカヤツリグサ科草地に営巣するため、高水敷の河川環境の変化に影響を受ける可能性があります。カヤネズミは、北部を除く本州、四国、九州、隠岐諸島（島後、西ノ島、中ノ島）、淡路島、豊島、因島、大崎上島、対馬、天草諸島（下島）、五島列島（福江島）、大隅諸島（口永良部島）に主に分布します^{注1)}。1巡目調査から今までの河川水辺の国勢調査では、太平洋側では宮城県名取川以北、日本海側では新潟県の阿賀野川以北で確認された河川はありません。

調査実施河川のうち分析対象とした河川数に占める確認された河川数の割合からみると、5巡目の途中ではありますが、1巡目調査から3巡目調査にかけて増加傾向にあり、3巡目から4巡目調査では横ばい傾向です。確認された調査地区数の割合からみると、1巡目調査から3巡目調査までは増加傾向ですが、3巡目から4巡目調査では、ほぼ横ばい傾向です。

このように、カヤネズミの確認結果から、カヤネズミの営巣環境である高茎の草地環境は1巡目調査から3巡目調査にかけて増加した後、現在まで維持されているものと推測されます。

カヤネズミが生息しない北海道については、森林、植林地、低木地帯、腐植土が密集した草原に生息し、特に樹冠が密閉した針葉樹林や、砂丘を伴う比較的乾燥した生息地でしばしば優占するヒメヤチネズミ（ミカドネズミ）、および、主に低木地、草地、二次植生（植林地や農地を含む）のほか、森林の縁や耕作地・防風林などの人工地にも生息するハントウアカネズミ（カラフトアカネズミ）に着目して整理しました。

ヒメヤチネズミ（ミカドネズミ）、ハントウアカネズミ（カラフトアカネズミ）ともに北海道本島に分布します^{注1)}。今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）では自然分布域内の河川はありませんでした。

ヒメヤチネズミ（ミカドネズミ）は、北海道地方における1～5巡目調査では、天塩川、十勝川、釧路川の各河川の数地区で確認されました。

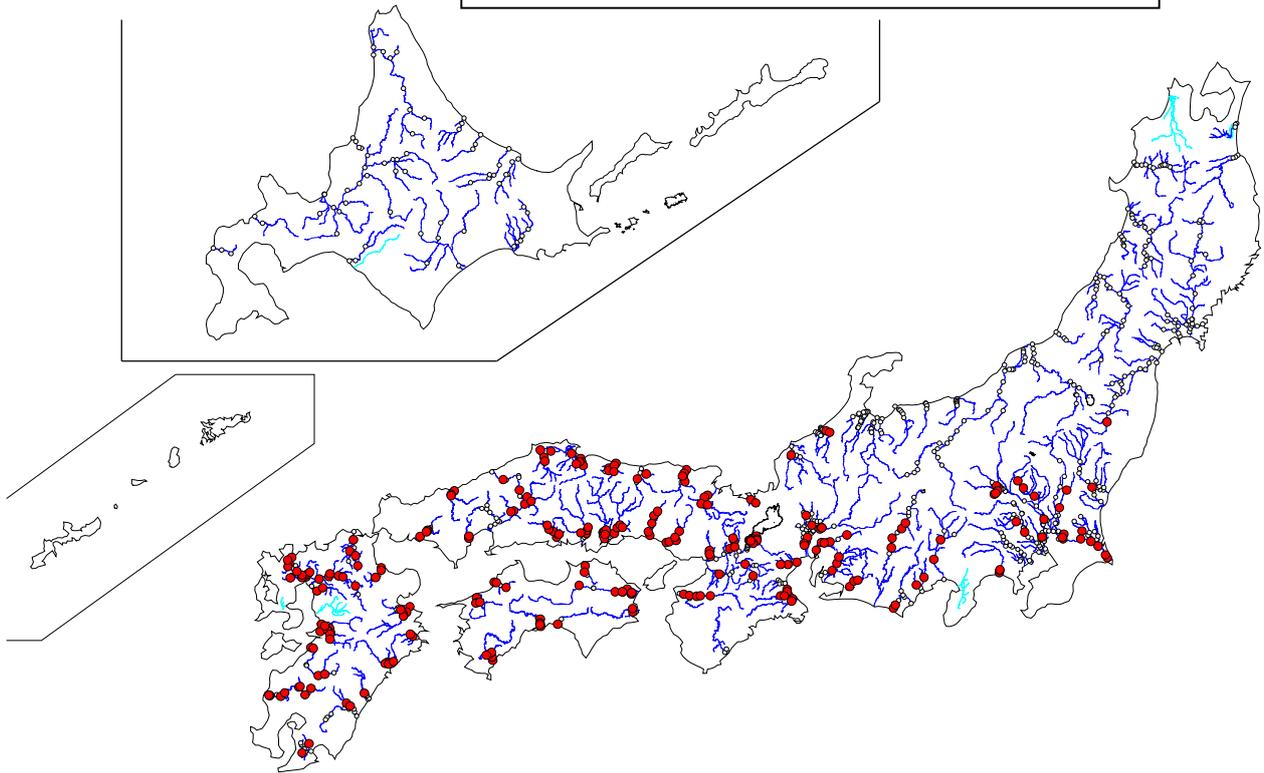
ハントウアカネズミ（カラフトアカネズミ）は、北海道地方における1～5巡目調査では、鶴川、沙流川、十勝川、釧路川、常呂川等の広い範囲において各河川の数地区で確認されました。

これら2種ともに、確認地区数の割合は、5巡目の途中ではありますが、ほぼ横ばいの傾向がみられました。

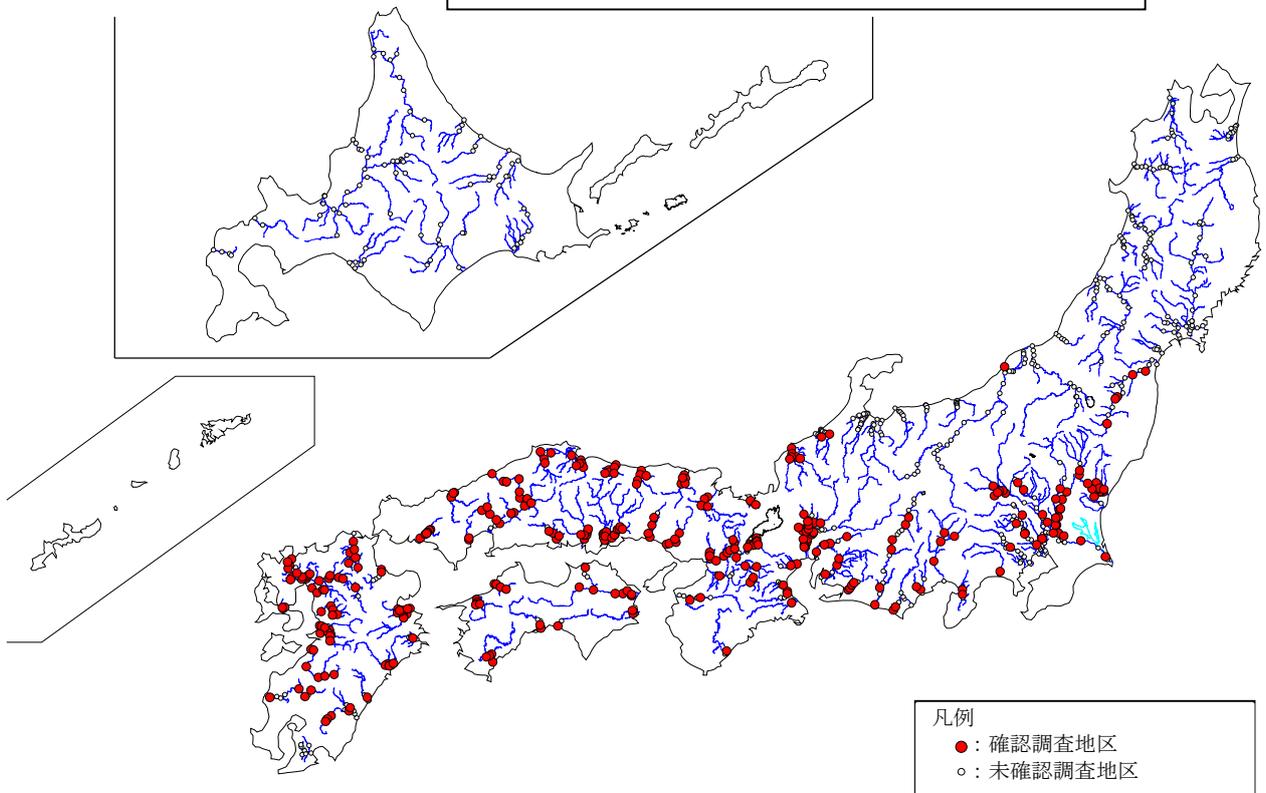
注1) 出典：The Wild Mammals of Japan、Second Edition、2015. 松香堂書店.



2 巡目調査 (平成 8~12 年度 (1996~2000 年度))



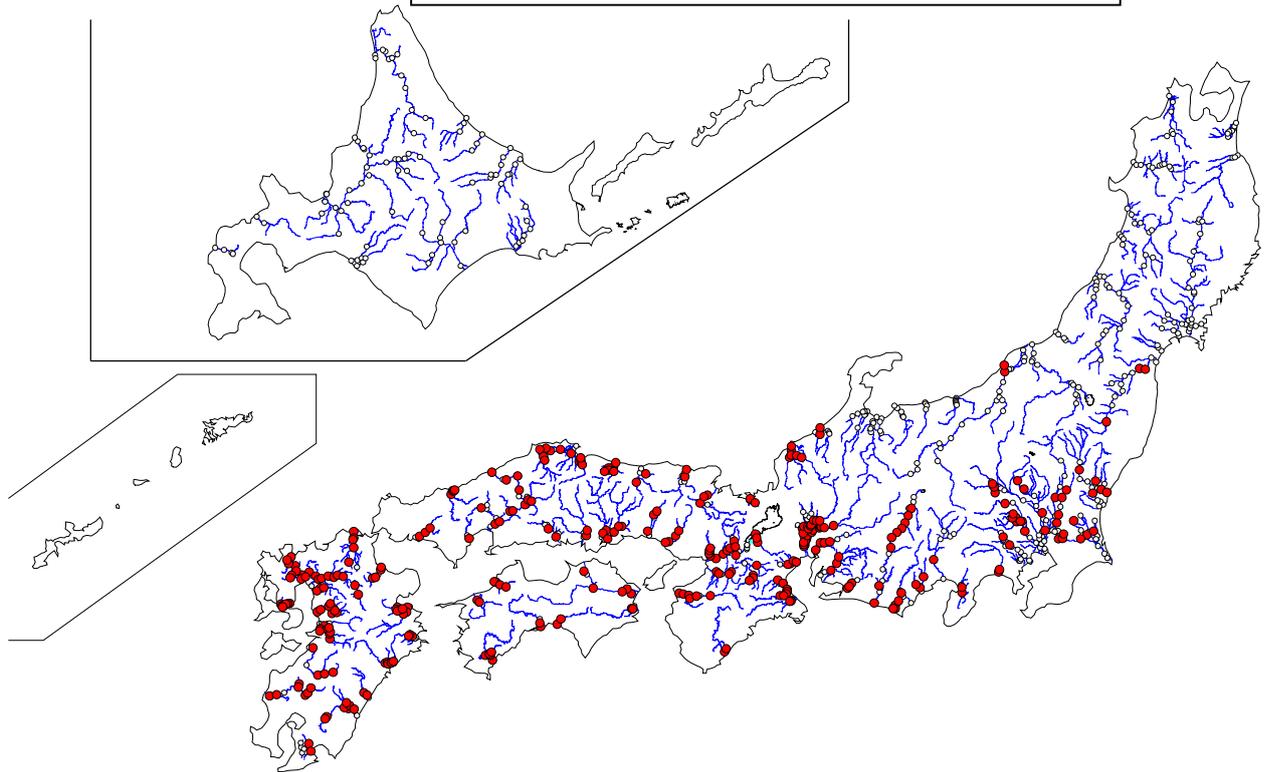
3 巡目調査 (平成 13~17 年度 (2001~2005 年度))



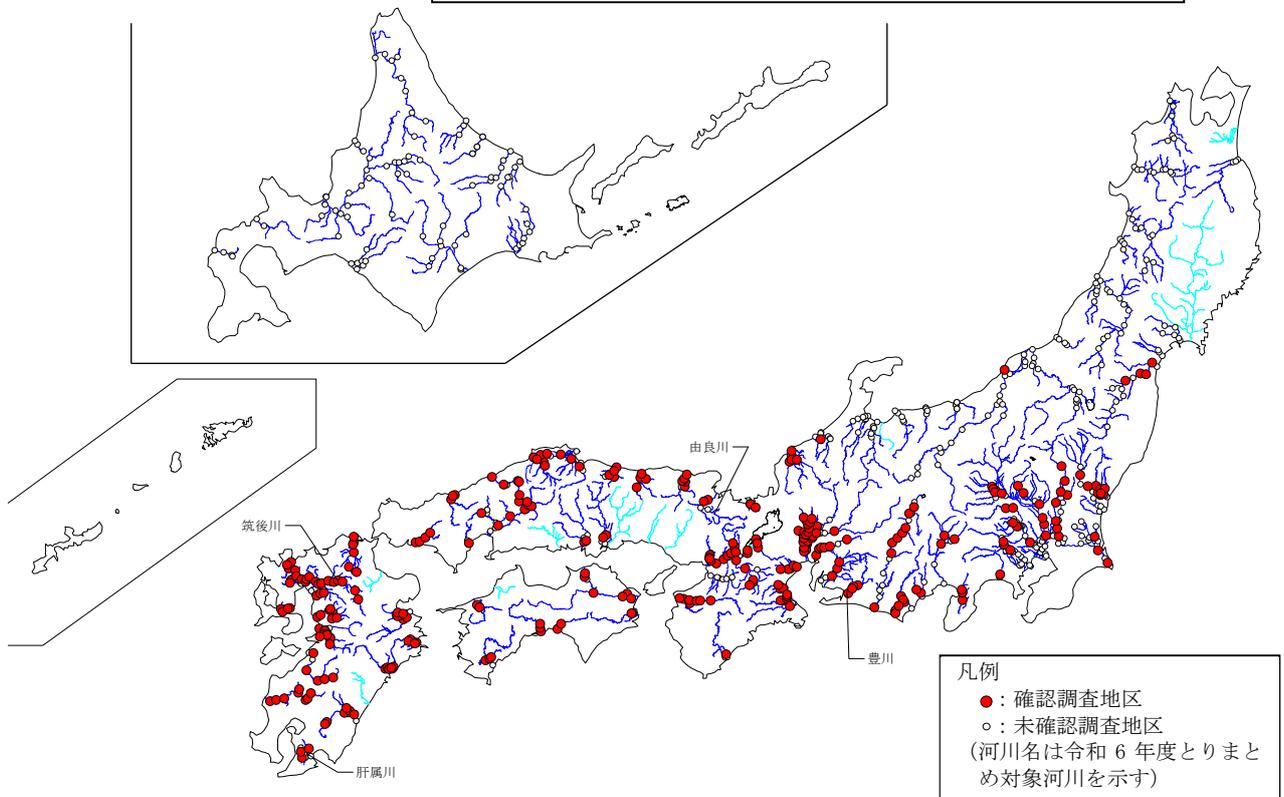
注 1) 〓は、調査未実施もしくは調査結果が河川環境データベースに未格納の河川を示す。
注 2) 1 巡目調査は調査対象河川数が少ないため図示を割愛する。

図 5-4 カヤネズミの確認された調査地区 (2 巡目調査、3 巡目調査) (1/2)

4巡目調査（平成18～27年度（2006～2015年度））



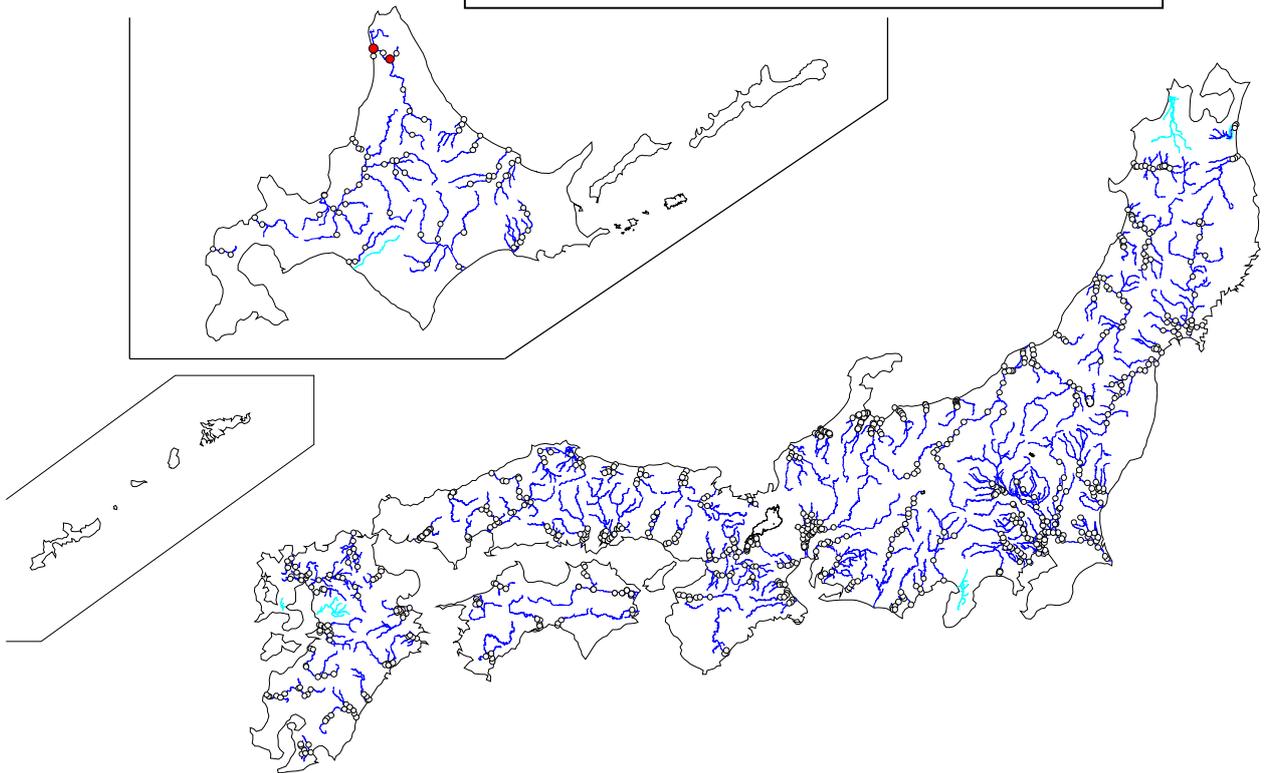
5巡目調査（平成28～令和6年度（2016～2024年度））



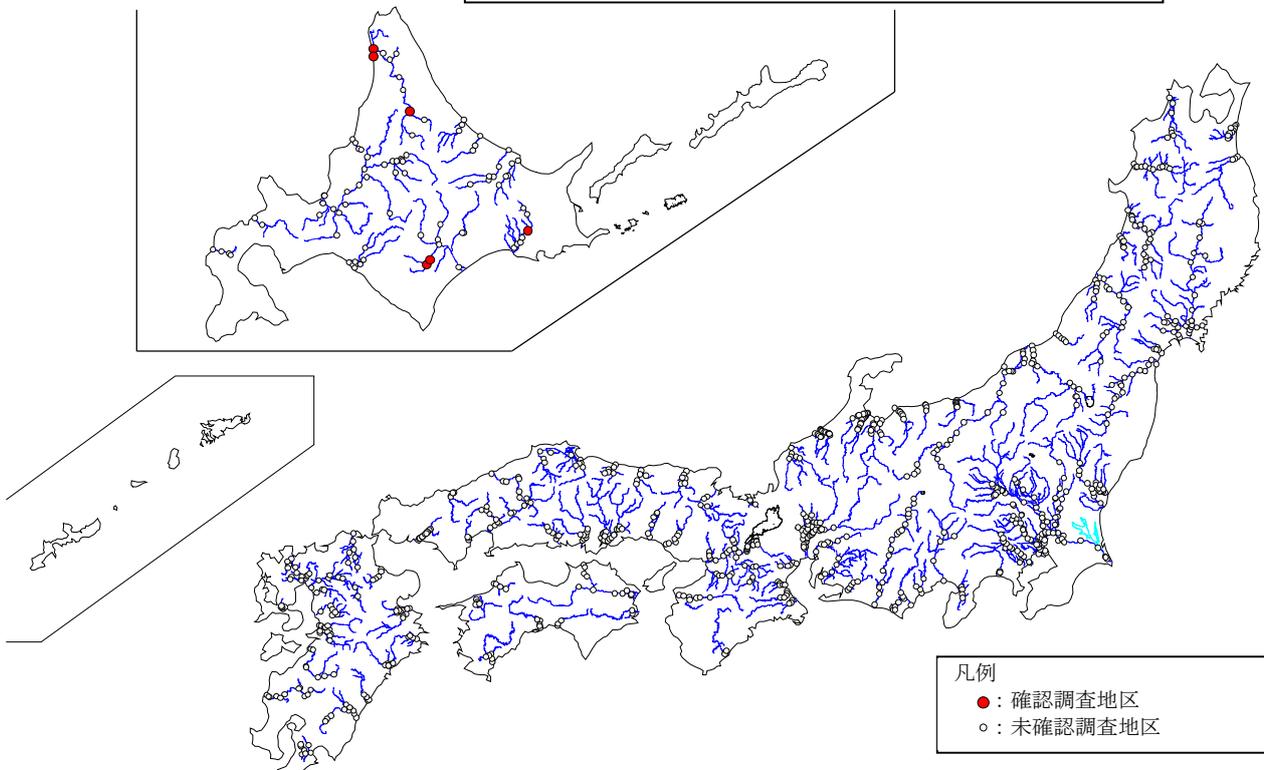
注1) 5巡目調査は実施中であり、—は調査未実施の河川を示す。

図5-4 カヤネズミの確認された調査地区（4巡目調査、5巡目調査）（2/2）

2 巡目調査 (平成 8～12 年度 (1996～2000 年度))



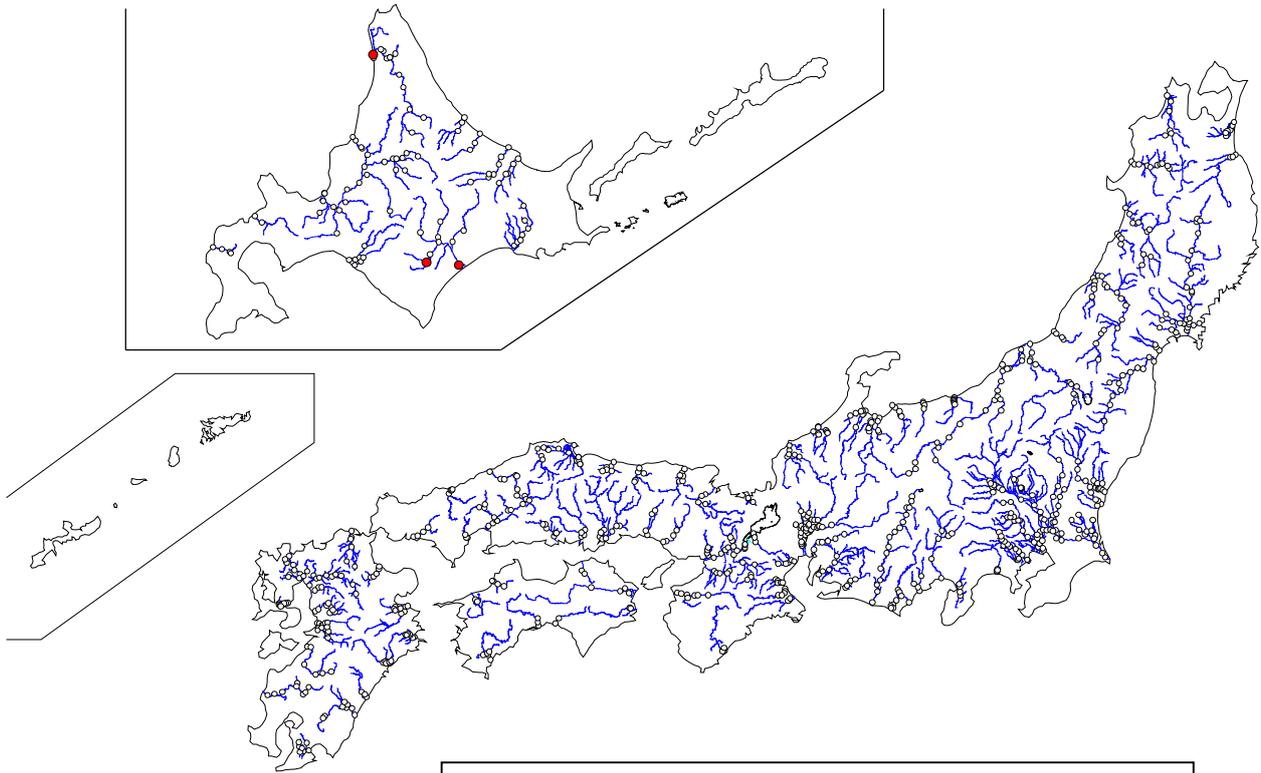
3 巡目調査 (平成 13～17 年度 (2001～2005 年度))



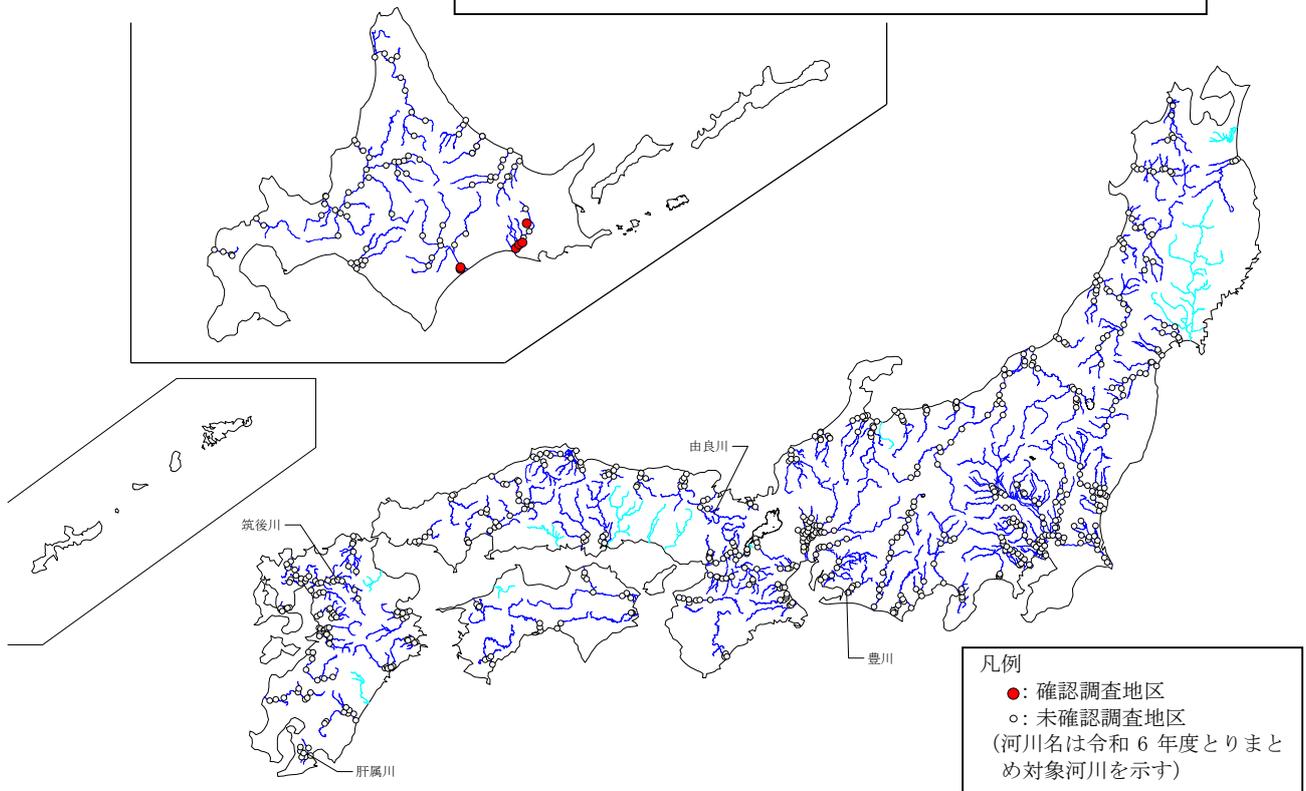
注 1) 〓は、調査未実施もしくは調査結果が河川環境データベースに未格納の河川を示す。
注 2) 1 巡目調査は調査対象河川数が少ないため図示を割愛する。

図 5-5 ヒメヤチネズミ(ミカドネズミ)の確認された調査地区
(2 巡目調査、3 巡目調査) (1/2)

4 巡目調査（平成 18～27 年度（2006～2015 年度））



5 巡目調査（平成 28～令和 6 年度（2016～2024 年度））

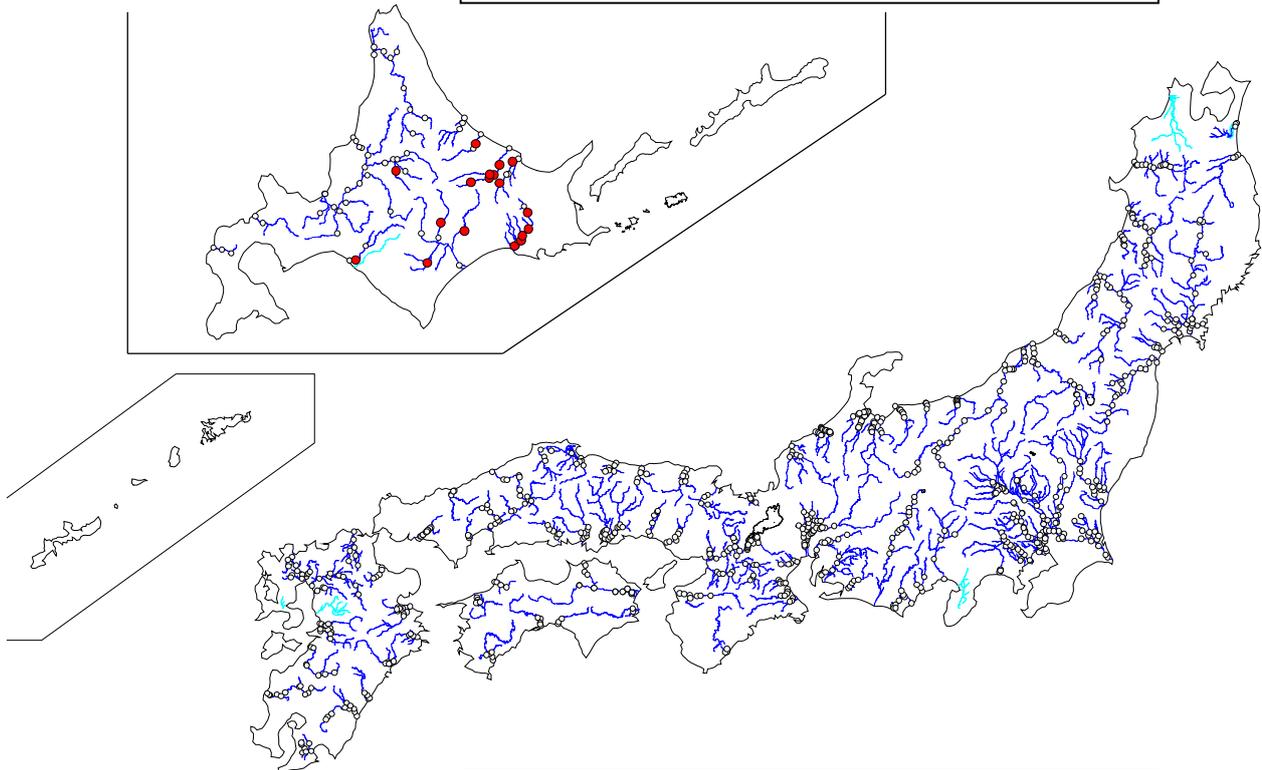


凡例
 ●：確認調査地区
 ○：未確認調査地区
 （河川名は令和 6 年度とりまとめ対象河川を示す）

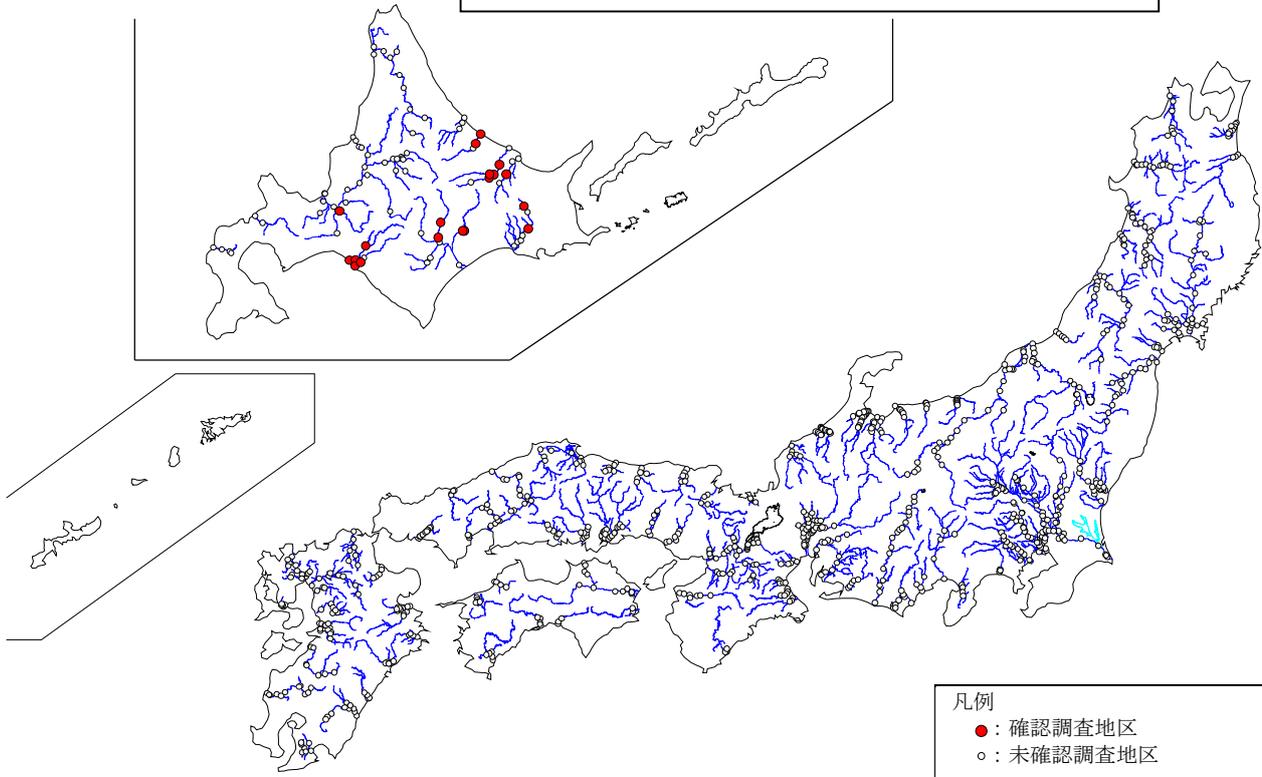
注 1) 5 巡目調査は実施中であり、— は調査未実施の河川を示す。

図 5-5 ヒメヤチネズミ(ミカドネズミ)の確認された調査地区
 (4 巡目調査、5 巡目調査) (2/2)

2巡目調査（平成8～12年度（1996～2000年度））



3巡目調査（平成13～17年度（2001～2005年度））

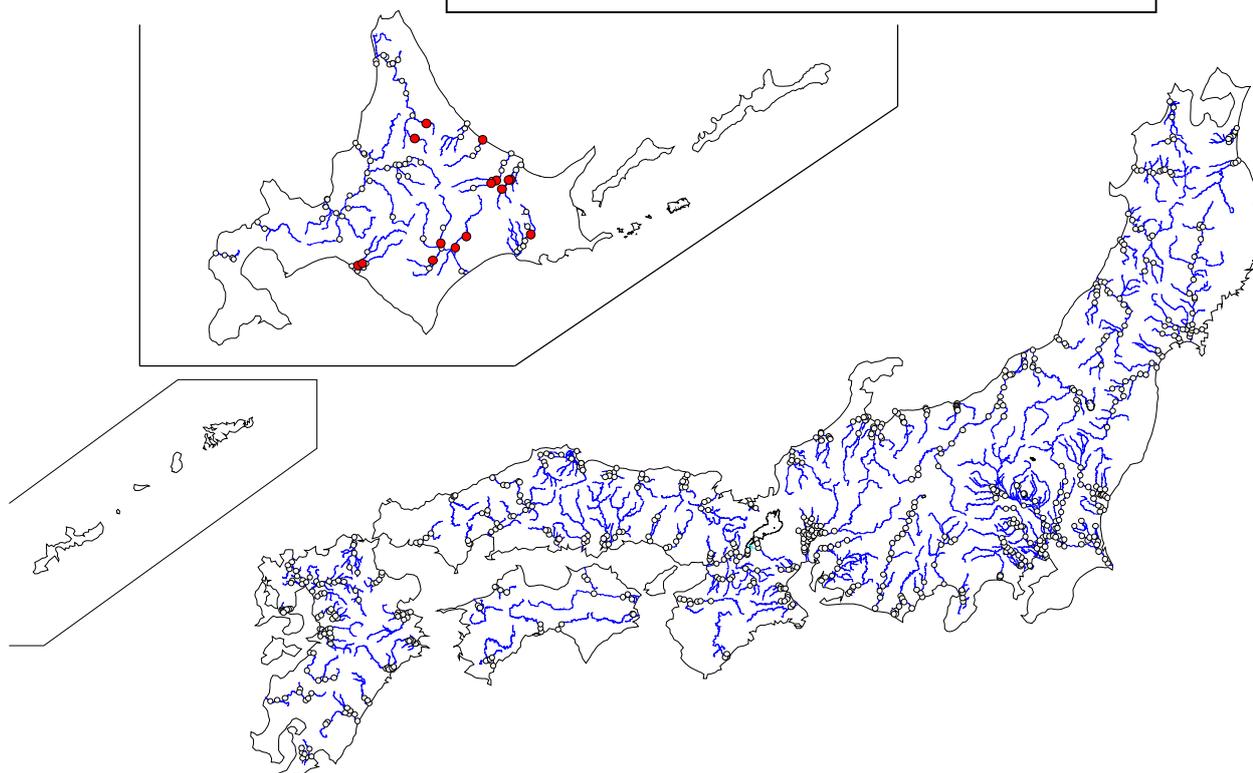


凡例
 ●：確認調査地区
 ○：未確認調査地区

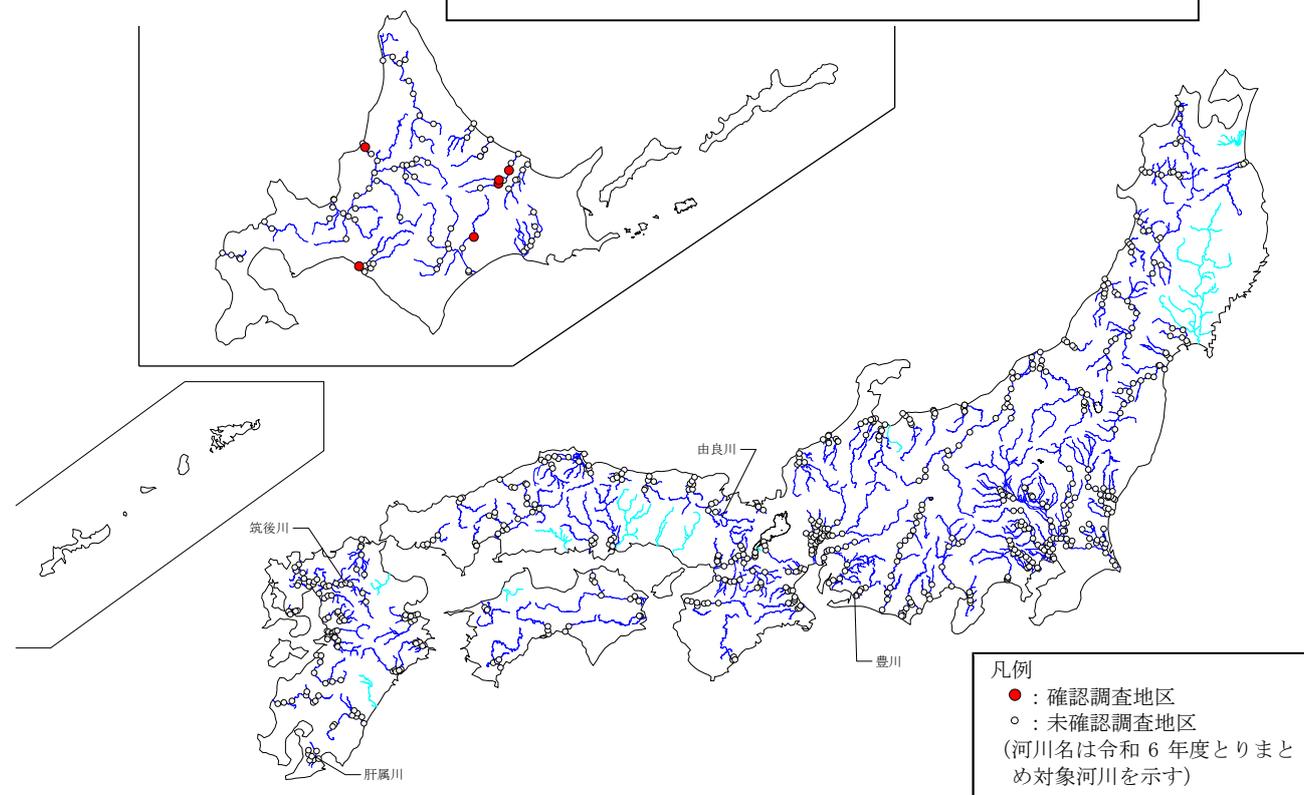
注1) 〓は、調査未実施もしくは調査結果が河川環境データベースに未格納の河川を示す。
 注2) 1巡目調査は調査対象河川数が少ないため図示を割愛する。

図5-6 ハントウアカネズミ(カラフトアカネズミ)の確認された調査地区
 (2巡目調査、3巡目調査) (1/2)

4 巡目調査（平成 18～27 年度（2006～2015 年度））



5 巡目調査（平成 28～令和 6 年度（2016～2024 年度））



凡例
 ●：確認調査地区
 ○：未確認調査地区
 (河川名は令和 6 年度とりまとめ対象河川を示す)

注 1) 5 巡目調査は実施中であり、— は調査未実施の河川を示す。

図 5-6 ハントウアカネズミ(カラフトアカネズミ)の確認された調査地区
 (4 巡目調査、5 巡目調査) (2/2)

● カジカガエルを自然分布域の3河川で確認

カジカガエルは本州、四国、九州に分布し、比較的川幅が広くて開けた溪流に生息し、流れの石の下に卵を産みます。このため、河川環境の変化によって、生息状況が影響を受けると考えられます。

今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）のうち4河川がカジカガエルの自然分布域内で、中部地方の豊川、九州地方の筑後川、肝属川の3河川で確認されました。このうち、九州地方の筑後川では1巡目調査から継続して確認されています。

分析対象とした河川数（自然分布域内の調査河川数）に占めるカジカガエルが確認された河川数の割合は、2巡目調査から増加傾向がみられました。

（資料掲載：5-19～5-20 ページ、5-51～5-52 ページ）

表 5-8 1～5巡目調査の確認河川数の比較

種類	1巡目調査 〈74河川〉 (66河川)	2巡目調査 〈118河川〉 (106河川)	3巡目調査 〈122河川〉 (109河川)	4巡目調査 〈122河川〉 (109河川)	5巡目調査 〈113河川〉 (100河川)
カジカガエル	25河川 〔37.9〕	40河川 〔37.7〕	50河川 〔45.9〕	60河川 〔55.0〕	62河川 〔62.0〕

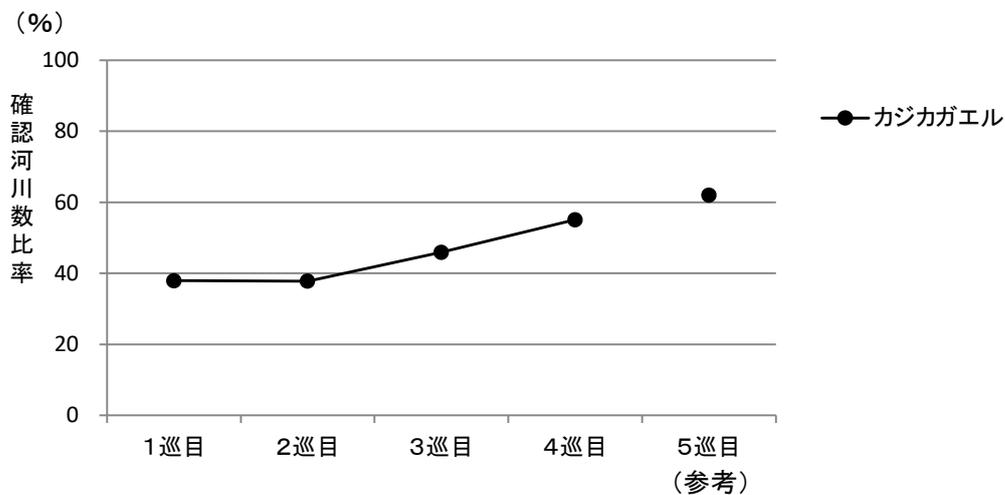


図 5-7 確認河川数比率の変化

- ※ 確認河川数の比較は、直轄管理区間のデータを対象とした。
- ※ 1～4巡目調査のデータは、調査実施全河川のうち、種名等についてスクリーニングされ、河川環境データベースに格納されている調査データを対象にした。
- ※ 〈 〉内は調査対象河川数を示す。
- ※ ()内は分析対象とした河川数（自然分布域内の調査河川数）を示す。
- ※ []内は分析対象河川数に対する確認河川数の割合（%）を示す。
- ※ 分析対象河川はカジカガエルの自然分布域内の河川を対象とした。
- ※ 5巡目調査は実施途中であり、掲載しているデータは平成 28～令和 6 年度(2016～2024 年度)の調査結果を示す。

カジカガエルは本州、四国、九州に分布し、比較的川幅が広くて開けた溪流と周辺の樹林に生息し、溪流中の石の下に卵を産みます^{注1)}。このため、河川環境の変化によって、生息状況が影響を受けると考えられます。

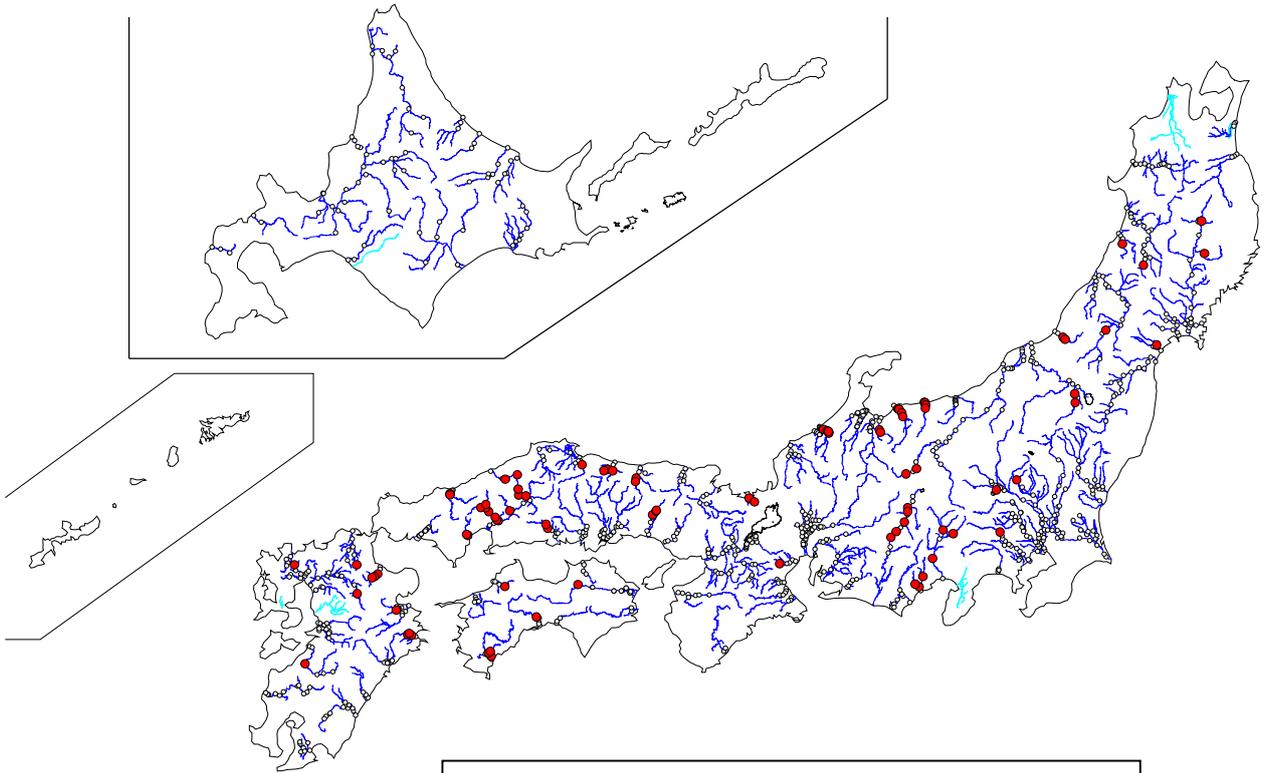
今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）では、カジカガエルの自然分布域は4河川でした。このうち中部地方の豊川、九州地方の筑後川、肝属川の3河川で確認されました。このうち、九州地方の筑後川では1巡目調査から継続して確認されています。

調査実施河川のうち分析対象とした河川数に占める確認河川数の割合は、2巡目調査から増加傾向がみられました。

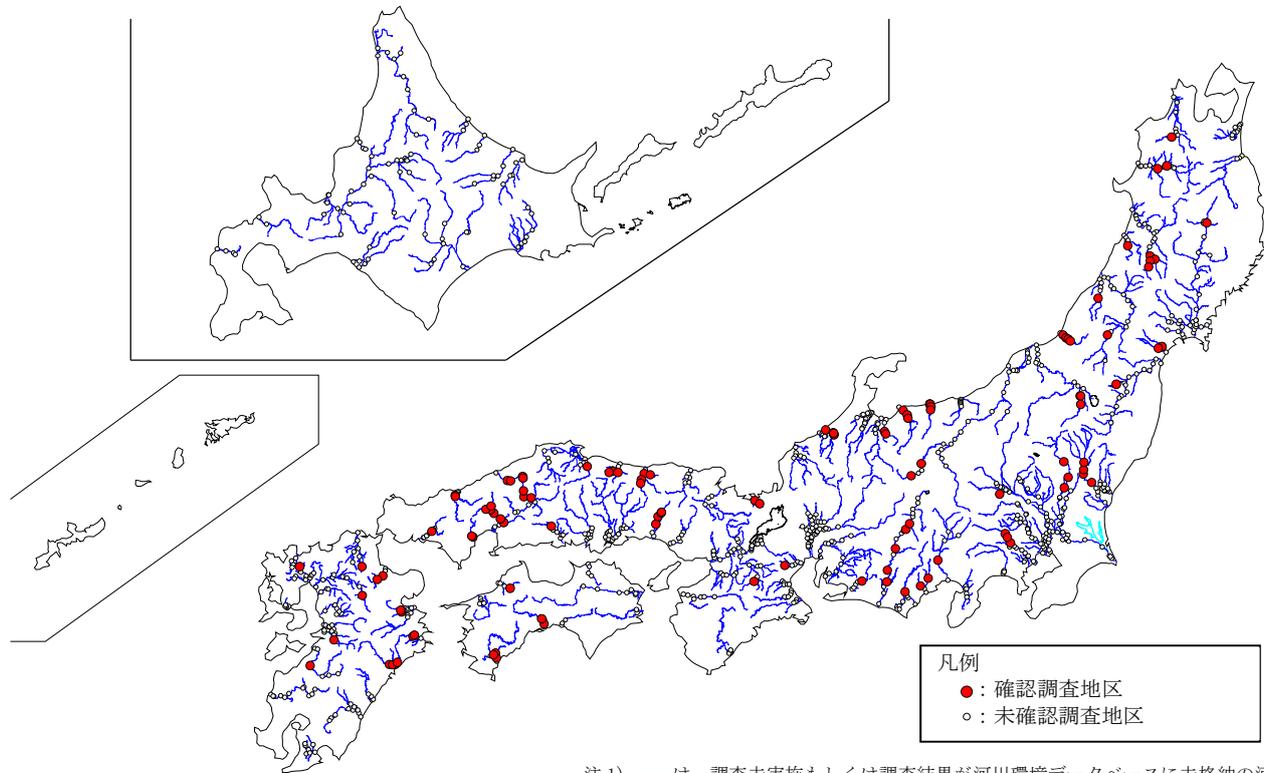
注1) 出典：日本カエル図鑑. 1999. 文一総合出版.



2巡目調査（平成8～12年度（1996～2000年度））



3巡目調査（平成13～17年度（2001～2005年度））



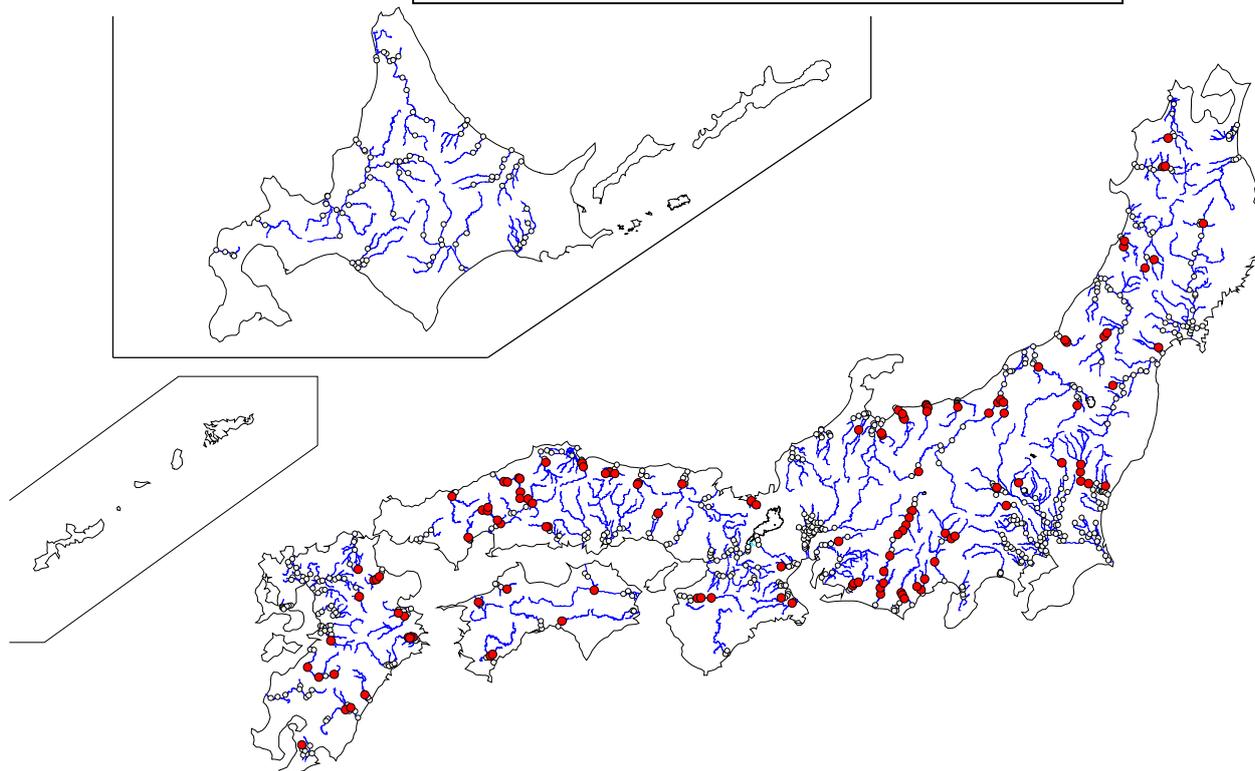
凡例

- ：確認調査地区
- ：未確認調査地区

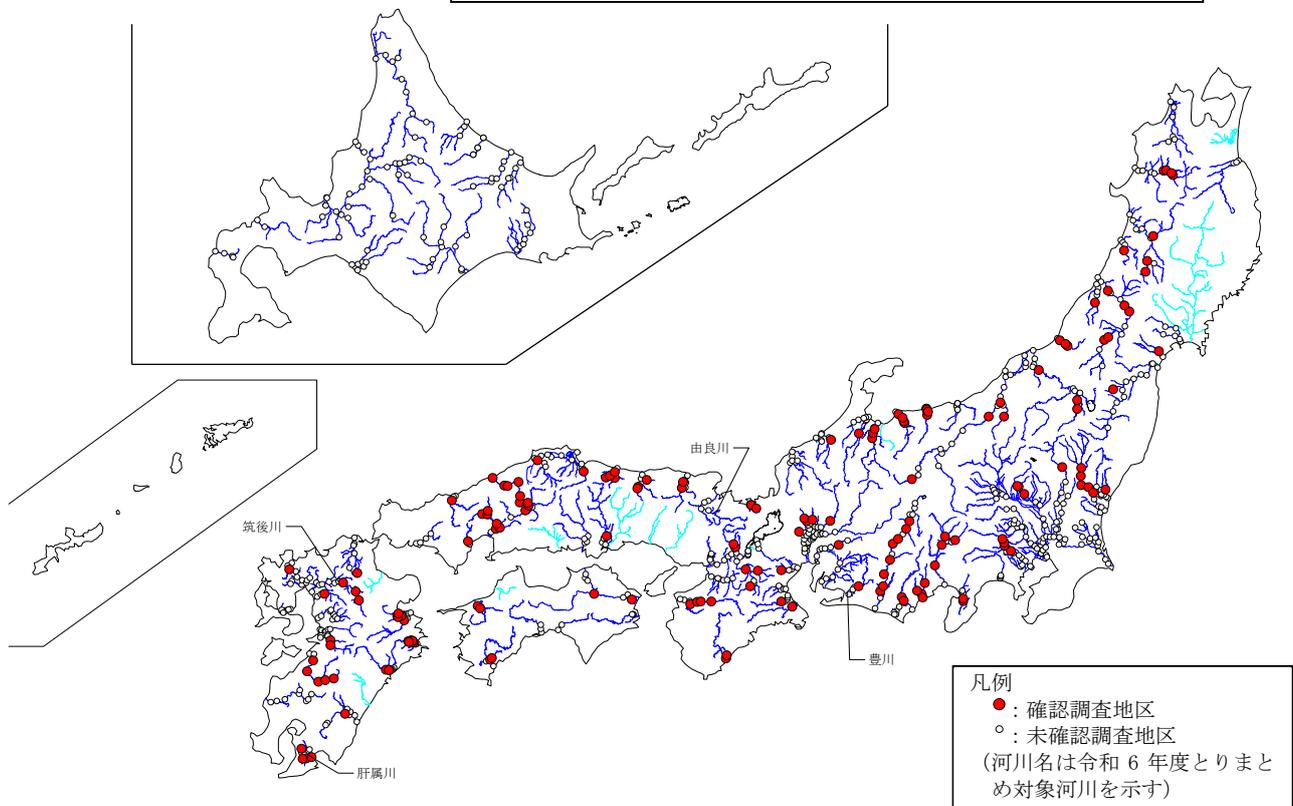
注1) 〓は、調査未実施もしくは調査結果が河川環境データベースに未格納の河川を示す。
注2) 1巡目調査は調査対象河川数が少ないため図示を割愛する。

図5-8 カジカガエルの確認された調査地区（2巡目調査、3巡目調査）（1/2）

4 巡目調査（平成 18～27 年度（2006～2015 年度））



5 巡目調査（平成 28～令和 6 年度（2016～2024 年度））



注 1) 5 巡目調査は実施中であり、— は調査未実施の河川を示す。

図 5-8 カジカガエルの確認された調査地区（4 巡目調査、5 巡目調査）（2/2）

【川らしいハビタット由来の種の確認状況】

(爬虫類調査)

● ニホンイシガメを自然分布域の3河川で確認

ニホンイシガメは関東・甲信越地方から西の本州、四国、九州に分布し、山間部や丘陵地、山のふもとにある河川や湖沼等に生息し、6～8月に地面に穴を掘って産卵します。このため、河川環境の変化によって、生息状況が影響を受けると考えられます。また、国外外来種のみししっぴアカミミガメとの競争や、アライグマの捕食による影響等が危惧されています。

今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）のうち4河川がニホンイシガメの自然分布域内で、このうち中部地方の豊川、近畿地方の由良川、九州地方の肝属川の3河川で確認されました。

分析対象とした河川数（自然分布域内の調査河川数）に占めるニホンイシガメが確認された河川数の割合は、2巡目から3巡目に増加、3巡目から4巡目はほぼ横ばいです。

(資料掲載：5-24～5-25 ページ、5-51～5-52 ページ)

表 5-9 1～5巡目調査の確認河川数の比較

種類	1巡目調査 〈74河川〉 (57河川)	2巡目調査 〈118河川〉 (95河川)	3巡目調査 〈122河川〉 (97河川)	4巡目調査 〈122河川〉 (97河川)	5巡目調査 〈113河川〉 (90河川)
ニホンイシガメ	23河川 〔40.4〕	37河川 〔38.9〕	50河川 〔51.5〕	49河川 〔50.5〕	43河川 〔47.8〕

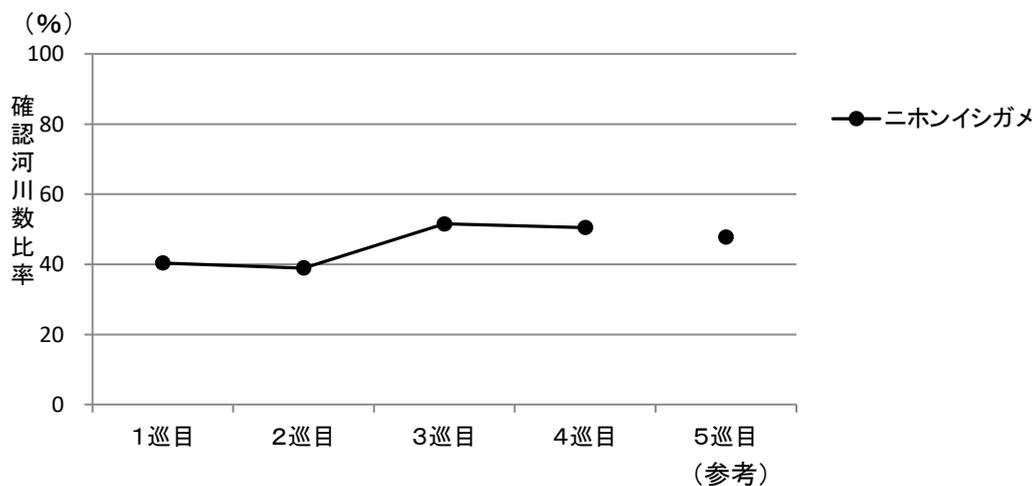


図 5-9 確認河川数比率の変化

- ※ 確認河川数の比較は、直轄管理区間のデータを対象とした。
- ※ 1～4巡目調査のデータは、調査実施全河川のうち、種名等についてスクリーニングされ、河川環境データベースに格納されている調査データを対象にした。
- ※ 〈 〉内は調査対象河川数を示す。
- ※ ()内は分析対象とした河川数（自然分布域内の調査河川数）を示す。
- ※ []内は分析対象河川数に対する確認河川数の割合 (%)を示す。
- ※ 確認河川数には、自然分布域外での確認は含まない。
- ※ 5巡目調査は実施途中であり、掲載しているデータは平成 28～令和 6 年度(2016～2024 年度)の調査結果を示す。

表 5-10 1～5 巡目調査の確認地区数の比較

種類	1 巡目調査 (545 地区) (399 地区)	2 巡目調査 (831 地区) (653 地区)	3 巡目調査 (874 地区) (670 地区)	4 巡目調査 (783 地区) (597 地区)	5 巡目調査 (708 地区) (555 地区)
ニホンイシガメ	61 地区 〔15.3〕	117 地区 〔17.9〕	122 地区 〔18.2〕	102 地区 〔17.1〕	95 地区 〔17.1〕

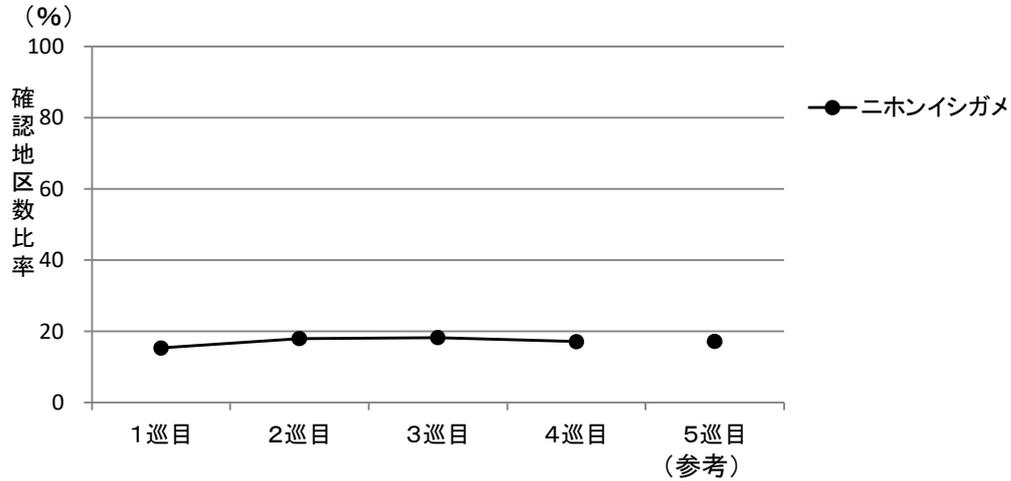


図 5-10 確認地区数比率の変化

- ※ 確認地区数の比較は、直轄管理区間のデータを対象とした。
- ※ 1～4 巡目調査のデータは、調査実施全地区のうち、種名等についてスクリーニングされ、河川環境データベースに格納されている調査データを対象にした。
- ※ 〈 〉内は調査対象地区数を示す。
- ※ ()内は分析対象とした地区数（自然分布域内の調査地区数）を示す。
- ※ []内は分析対象地区数に対する確認地区数の割合（%）を示す。
- ※ 分析対象地区は自然分布域内の調査実施河川を対象とした。
- ※ 確認地区数には、自然分布域外での確認は含まない。
- ※ 5 巡目調査は実施途中であり、掲載しているデータは平成 28～令和 6 年度(2016～2024 年度)の調査結果を示す。

ニホンイシガメは関東・甲信越地方から西の本州、四国、九州に分布し、山間部や丘陵地、山のふもとにある河川や湖沼等に生息し、6～8月に地面に穴を掘って産卵します^{注1)}。このため、河川環境の変化によって、生息状況が影響を受けると考えられます。また、国外外来種のミシシippアカミミガメとの競争による減少^{注1)}、アライグマによる捕食による影響等が危惧されています^{注2)}。

今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）のうち4河川がニホンイシガメの自然分布域内で、4河川のうち中部地方の豊川、近畿地方の由良川、九州地方の肝属川の3河川で確認されました。これら3河川全てで、1巡目調査から継続して確認されています。

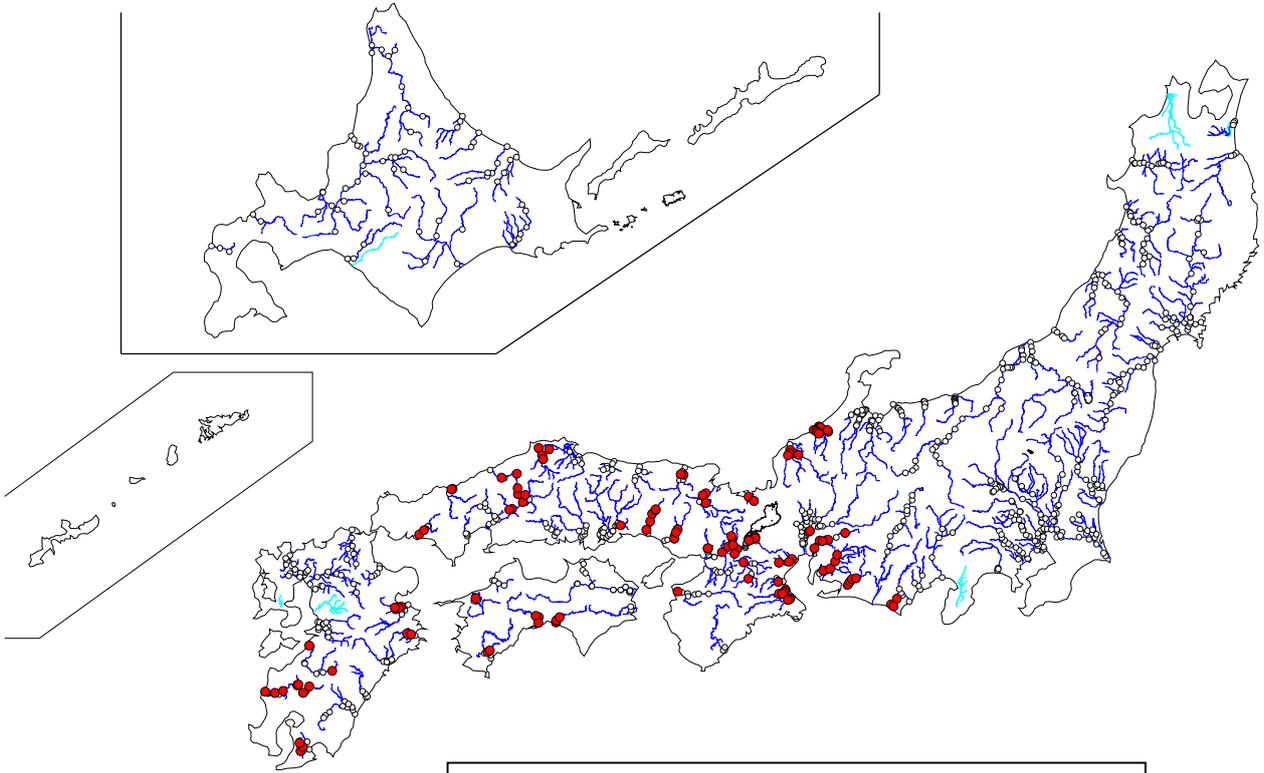
分析対象とした河川数（自然分布域内の調査河川数）に占めるニホンイシガメが確認された河川数の割合は、2巡目から3巡目に増加、3巡目から4巡目はほぼ横ばいです。また、確認された調査地区数の割合で見ると、ほぼ横ばいの傾向がみられました。

注1) 出典：野外観察のための日本産爬虫類図鑑．2016．緑書房．

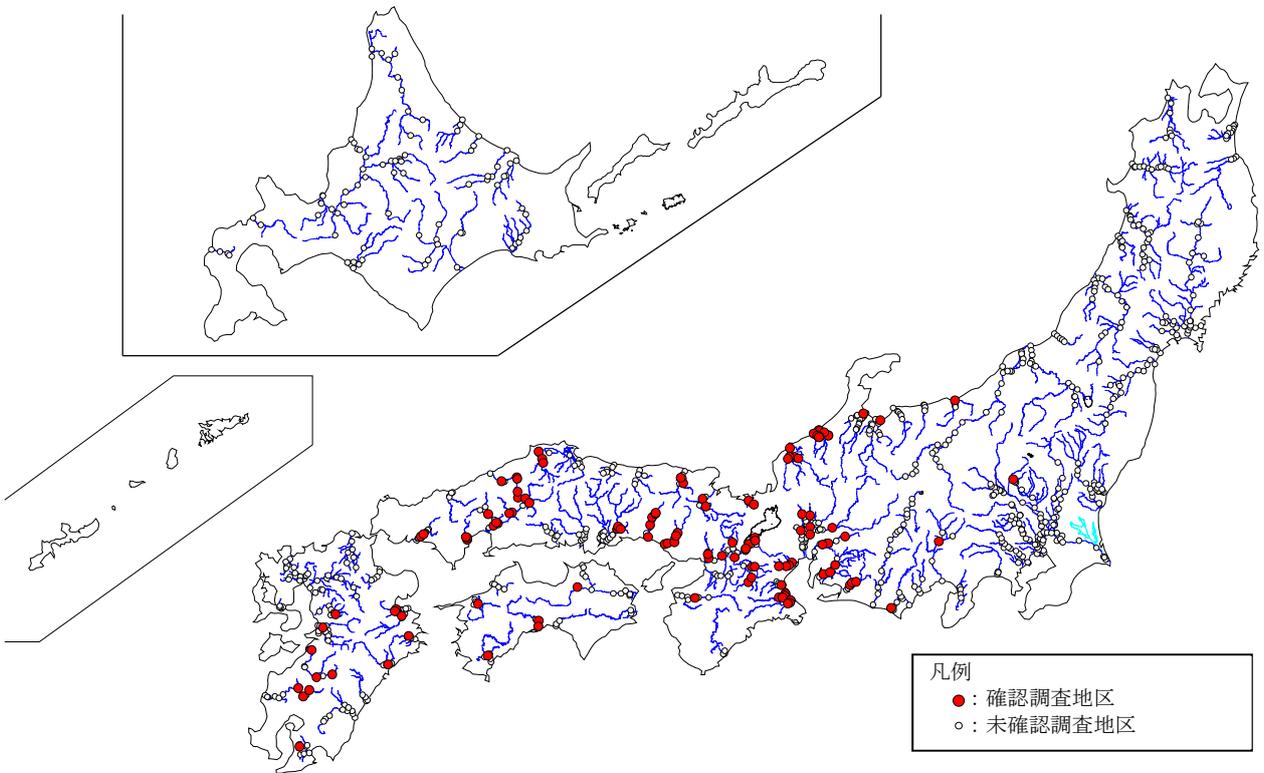
注2) 出典：レッドデータブック2014「爬虫類・両生類」．2014．環境省．



2 巡目調査（平成 8～12 年度（1996～2000 年度））



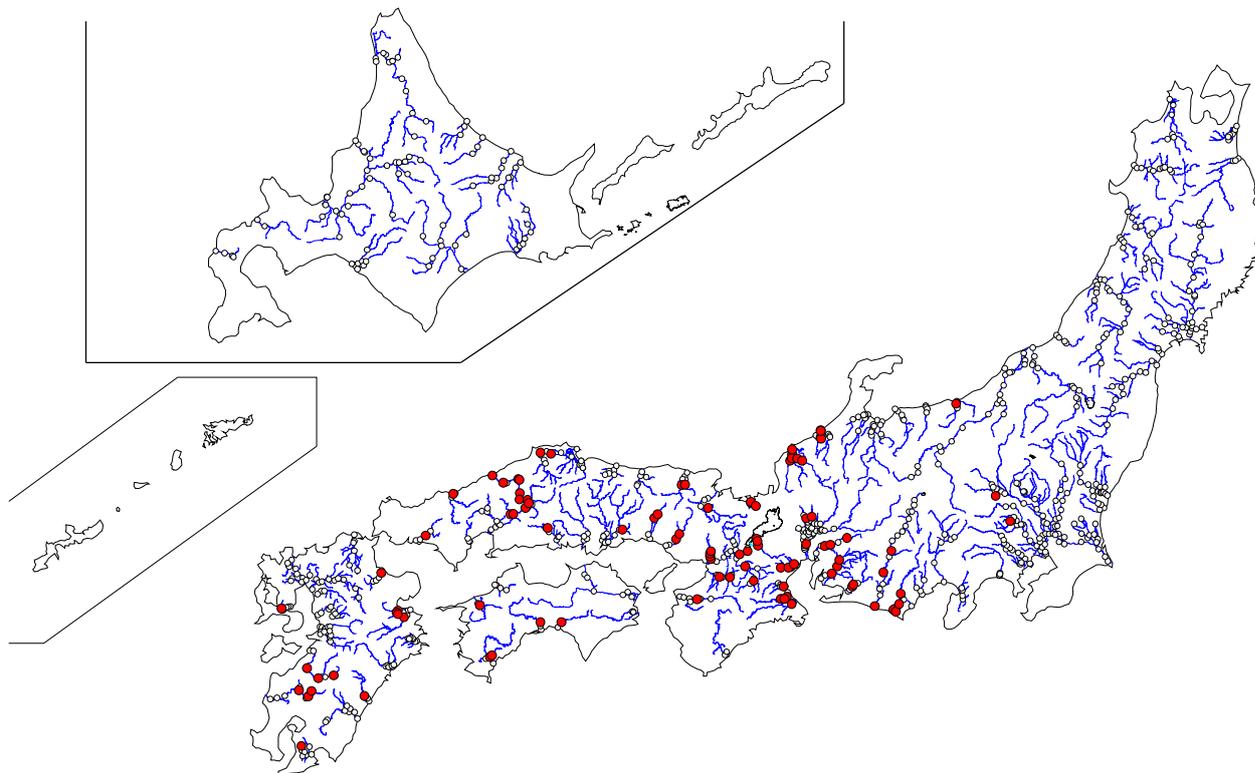
3 巡目調査（平成 13～17 年度（2001～2005 年度））



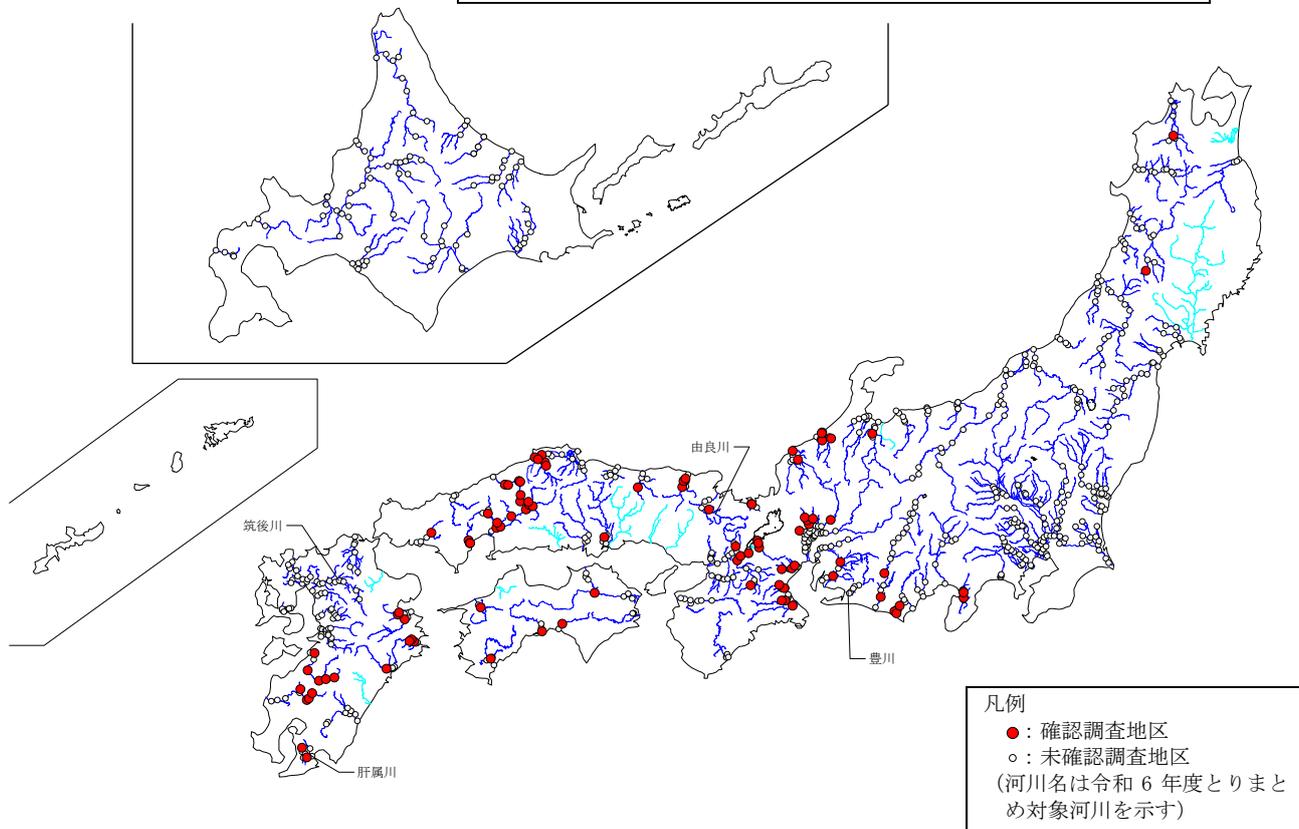
注 1) 〓は、調査未実施もしくは調査結果が河川環境データベースに未格納の河川を示す。
注 2) 1 巡目調査は調査対象河川数が少ないため図示を割愛する。

図 5-11 ニホンイシガメの確認された調査地区（2 巡目調査、3 巡目調査）（1/2）

4 巡目調査（平成 18～27 年度（2006～2015 年度））



5 巡目調査（平成 28～令和 6 年度（2016～2024 年度））



注 1) 5 巡目調査は実施中であり、— は調査未実施の河川を示す。

図 5-11 ニホンイシガメの確認された調査地区（4 巡目調査、5 巡目調査）（2/2）

● 豊川で外来性カメ類との競合または交雑が影響している可能性

ニホンイシガメは河川環境の変化によって、生息状況が影響を受けるとともに、国外外来種のミシシippアカミミガメとの競合や、クサガメとの交雑による影響等も危惧されています。そこで、ニホンイシガメの個体数の変化について、クサガメ、ミシシippアカミミガメ等、その他カメ類の個体数の変化と合わせて整理しました。

今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）のうちニホンイシガメの自然分布域内である4河川において、中部地方の豊川の1河川で、ニホンイシガメの個体数が減少傾向かつクサガメ、ミシシippアカミミガメが増加傾向にあり、外来性カメ類との競合または交雑が影響している可能性が示唆されました。

(資料掲載:5-28 ページ)

ニホンイシガメは、河川環境の変化によって、生息状況が影響を受けると考えられます。また、アライグマによる捕食による影響等が危惧されています。さらに、国外外来種のミシシippアカミミガメとの競合や、クサガメとの交雑による影響等も危惧されています。そこで、ニホンイシガメの個体数の変化について、トラップ調査結果による捕獲個体数を用いて、クサガメ、ミシシippアカミミガメ等、その他カメ類の個体数の変化と合わせて整理しました。

今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）のうちニホンイシガメの自然分布域内である4河川では、ニホンイシガメはトラップ調査において、1巡目から5巡目にかけて中部地方の豊川、近畿地方の由良川、九州地方の肝属川の3河川で確認されました。このうち中部地方の豊川、九州地方の肝属川の2河川で、個体数の減少傾向が確認されました。一方、ミシシippアカミミガメ、クサガメは、ニホンイシガメの自然分布域内である4河川のうち、中部地方の豊川の1河川で個体数の増加傾向が確認されました。

今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）において、ニホンイシガメの自然分布域内である4河川のうち、中部地方の豊川の1河川で、ニホンイシガメの個体数が減少傾向かつクサガメ、ミシシippアカミミガメが増加傾向にあり、外来性カメ類との競合または交雑が影響している可能性が示唆されました。また、九州地方の肝属川では外来性カメ類が確認されていませんが、ニホンイシガメは3巡目以降トラップ調査では確認されていません。なお、トラップ調査以外の方法（目撃法等）では、ニホンイシガメを3巡目以降も確認していますが、個体数は少なくなっている可能性があります。

今回の結果から、ニホンイシガメについて、ミシシippアカミミガメとの競合や、クサガメとの交雑による影響の可能性のある河川が見られました。今後とも、ニホンイシガメとその他カメ類との個体数の変化に注意することが必要です。

表 5-11 各河川における 1～5 巡目調査の確認個体数の比較

水系名	種類	1巡目	2巡目	3巡目	4巡目	5巡目
豊川	ニホンイシガメ	96	106	4	0	0
	クサガメ	1	1	0	0	6
	ミシシippアカミミガメ	1	2	1	0	64
	その他	0	0	0	0	3
由良川	ニホンイシガメ	0	1	0	1	2
	クサガメ	0	2	4	2	1
	ミシシippアカミミガメ	0	0	0	1	1
	その他	0	0	0	0	0
筑後川	ニホンイシガメ	0	0	0	0	0
	クサガメ	0	0	2	0	0
	ミシシippアカミミガメ	0	0	1	1	0
	その他	0	0	0	1	0
肝属川	ニホンイシガメ	3	3	0	0	0
	クサガメ	0	0	0	0	0
	ミシシippアカミミガメ	0	0	0	0	0
	その他	3	3	0	0	1

※1 個体数は、トラップ調査における捕獲個体数を示す。

※2 「その他」は、今回とりまとめではニホンスッポンを示す。

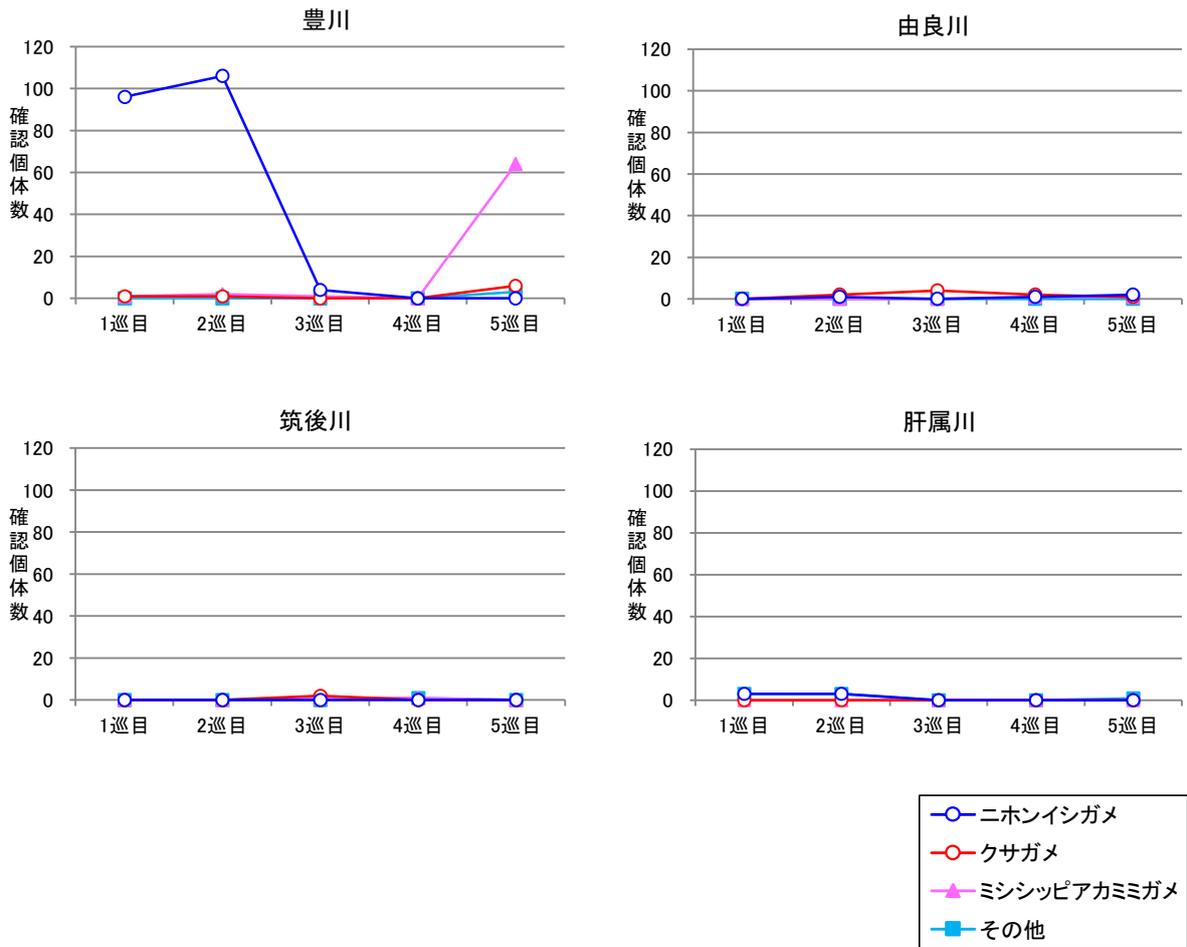


図 5-12 各河川における 1～5 巡目調査の確認個体数の比較

※1 個体数は、トラップ調査における捕獲個体数を示す。

※2 「その他」は、今回とりまとめではニホンスッポンを示す。

5.3 生物多様性

(1) 国外外来種の分布状況（生物多様性の攪乱）

ここでは、河川水辺の国勢調査結果を用いて、河川における生物多様性および特定外来生物の整理を行いました。

【生物多様性の攪乱：国外外来種の分布状況】

（両生類・爬虫類・哺乳類調査）

• アライグマを1河川で河川水辺の国勢調査としては初めて確認

外来生物法により特定外来生物として指定されているウシガエル、カミツキガメ、タイワンザル、クリハラリス、ヌートリア、アライグマ、ミンクと、条件付特定外来生物に指定されているミシシippアカミミガメの確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）では、ウシガエルは3河川、ミシシippアカミミガメは3河川、ヌートリアは2河川、アライグマは3河川で確認されました。このうち、アライグマは九州地方の筑後川で、河川水辺の国勢調査としては初めての確認となり、分布の拡大傾向がみられました。カミツキガメ、タイワンザル、クリハラリス、ミンクは確認されませんでした。

（資料掲載：5-35～5-44 ページ、5-51～5-54 ページ）

※特定外来生物とは、『特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（最終改正および施行令和7年6月）』により、輸入や飼養等が規制される生物（生きているものに限られ、個体だけではなく、卵、種子、器官なども含まれる）です。おおむね明治以降に国外から導入された国外外来種のうち、生態系、人の生命・身体及び農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがある生物が指定されています。

注) アカミミガメは、2023年6月1日から「条件付特定外来生物」に指定されました。

表 5-12 1～5 巡目調査の確認河川数の比較

種類	1 巡目調査 (74 河川)	2 巡目調査 (118 河川)	3 巡目調査 (122 河川)	4 巡目調査 (122 河川)	5 巡目調査 (113 河川)
ウシガエル	54 河川 〔73.0〕	88 河川 〔74.6〕	93 河川 〔76.2〕	95 河川 〔77.9〕	86 河川 〔76.1〕
ミシシippアカ ミミガメ	25 河川 〔33.8〕	53 河川 〔44.9〕	71 河川 〔58.2〕	96 河川 〔78.7〕	86 河川 〔76.1〕
カミツキガメ	1 河川 〔1.4〕	0 河川 〔0.0〕	0 河川 〔0.0〕	0 河川 〔0.0〕	1 河川 〔0.9〕
タイワンザル	0 河川 〔0.0〕	0 河川 〔0.0〕	0 河川 〔0.0〕	0 河川 〔0.0〕	0 河川 〔0.0〕
クリハラリス	0 河川 〔0.0〕	0 河川 〔0.0〕	0 河川 〔0.0〕	0 河川 〔0.0〕	0 河川 〔0.0〕
ヌートリア	12 河川 〔16.2〕	20 河川 〔16.9〕	22 河川 〔18.0〕	26 河川 〔21.3〕	27 河川 〔23.9〕
アライグマ	3 河川 〔4.1〕	7 河川 〔5.9〕	17 河川 〔13.9〕	43 河川 〔35.2〕	77 河川 〔68.1〕
ミンク	4 河川 〔5.4〕	4 河川 〔3.4〕	7 河川 〔5.7〕	7 河川 〔5.7〕	8 河川 〔7.1〕

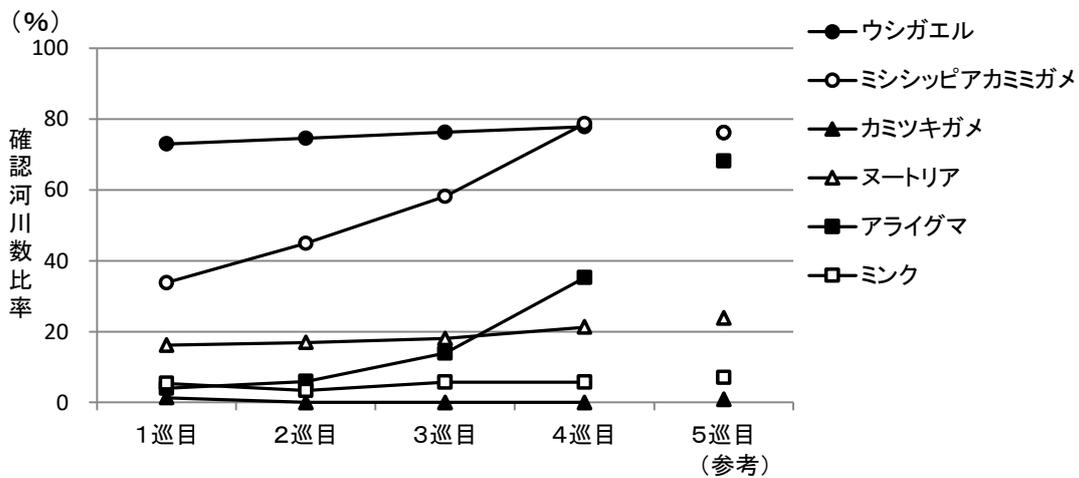


図 5-13 確認河川数比率の変化

- ※ 確認河川数の比較は、直轄管理区間のデータを対象とした。
- ※ 1～4 巡目調査のデータは、調査実施全河川のうち、種名等についてスクリーニングされ、河川環境データベースに格納されている調査データを対象にした。
- ※ () 内は調査実施河川数を示す。
- ※ [] 内は確認河川数の調査実施河川数に対する割合 (%) を示す。
- ※ 5 巡目調査は実施途中であり、掲載しているデータは平成 28～令和 6 年度(2016～2024 年度)の調査結果を示す。

表 5-13 1～5 巡目調査の確認地区数の比較

種類	1 巡目調査 (545 地区)	2 巡目調査 (831 地区)	3 巡目調査 (874 地区)	4 巡目調査 (783 地区)	5 巡目調査 (708 地区)
ウシガエル	212 地区 〔38.9〕	366 地区 〔44.0〕	393 地区 〔45.0〕	349 地区 〔44.6〕	283 地区 〔40.0〕
ミシシippアカミ ミガメ	47 地区 〔 8.6〕	118 地区 〔14.2〕	186 地区 〔21.3〕	257 地区 〔32.8〕	307 地区 〔43.4〕
カミツキガメ	1 地区 〔 0.2〕	0 地区 〔 0.0〕	0 地区 〔 0.0〕	0 地区 〔 0.0〕	1 地区 〔 0.1〕
タイワンザル	0 地区 〔 0.0〕				
クリハラリス	0 地区 〔 0.0〕				
ヌートリア	65 地区 〔11.9〕	106 地区 〔12.8〕	138 地区 〔15.8〕	133 地区 〔17.0〕	117 地区 〔16.5〕
アライグマ	4 地区 〔 0.7〕	14 地区 〔 1.7〕	45 地区 〔 5.1〕	130 地区 〔16.6〕	294 地区 〔41.5〕
ミンク	10 地区 〔 1.8〕	10 地区 〔 1.2〕	21 地区 〔 2.4〕	11 地区 〔 1.4〕	16 地区 〔 2.3〕

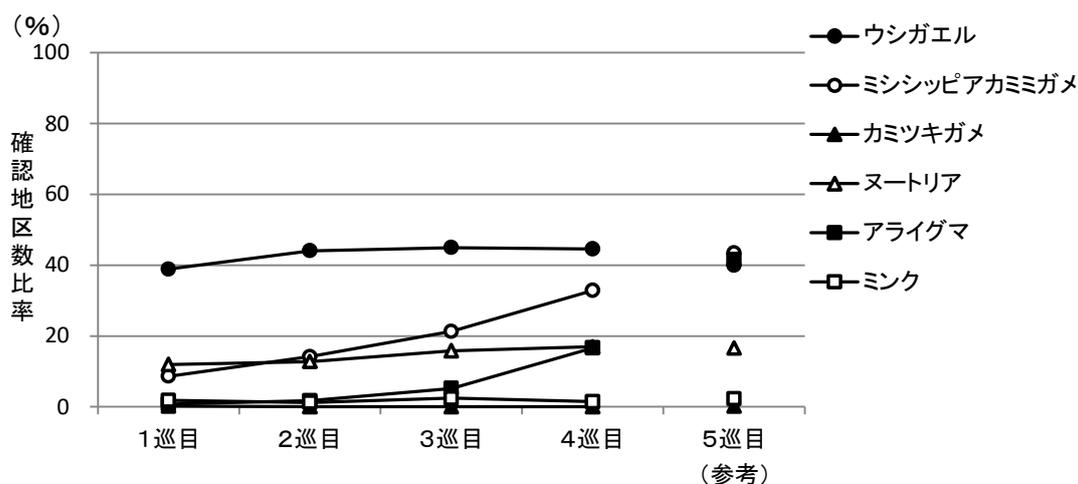


図 5-14 確認地区数比率の変化

- ※ 確認地区数の比較は、直轄管理区間のデータを対象とした。
- ※ 1～4 巡目調査のデータは、調査全地区のうち、種名等についてスクリーニングされ、河川環境データベースに格納されている調査データを対象にした。
- ※ () 内は調査実施地区数を示す。
- ※ [] 内は確認地区数の調査実施地区数に対する割合 (%) を示す。
- ※ 5 巡目調査は実施途中であり、掲載しているデータは平成 28～令和 6 年度(2016～2024 年度)の調査結果を示す。

ここでは、外来生物法により特定外来生物として指定されているウシガエル、カミツキガメ、台湾ザル、クリハラリス、ヌートリア、アライグマ、ミンクの7種と、条件付特定外来生物に指定されているミシシippアカミミガメの確認状況を整理しました。

ウシガエルは、1918年、ニューオリンズから輸入されたのが最初^{注1)}で、食肉の輸出生産のために養殖されました^{注2)}。第二次世界大戦後の一時期に外貨を得る重要な手段となるように導入されましたが、その後、養殖が廃れ放置されました。本種は平成18年2月に特定外来生物に指定されました。2巡目調査以降で確認河川数が多いことから、本種は各地で定着していると考えられます。本種は、増殖力が高く、大型に成長し、他のカエル類を捕食する^{注3)}ことから在来カエル類等の減少の原因となることが懸念されています。今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）において、ウシガエルは3河川で確認されました。確認河川数の割合、確認地区数の割合は、5巡目の途中ではありますが、ほぼ横ばいの傾向がみられました。

ミシシippアカミミガメは、北米原産で1950年代後半から、いわゆる「ミドリガメ」として販売・飼育され、1960年代後半から、野外で野生化した個体が見つかるようになりました^{注1)}。現在では北海道、本州、四国、九州のほかに、沖縄や小笠原父島からも生息が確認されています^{注6)}。河川や池沼、水田などに広く生息し、在来種のニホンイシガメと生息環境が競合^{注7)}すると考えられており、ミシシippアカミミガメが在来種の生息に影響を与えることが懸念されています。今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）において、3河川で確認されました。また、中部地方の豊川では1巡目から、近畿地方の由良川、九州地方の筑後川では2巡目調査から継続して確認されています。5巡目の途中ではありますが、1巡目から4巡目調査まで確認河川数の割合が徐々に増加しており、分布の侵入・拡大傾向がみられました。

カミツキガメは、大型の水生ガメで、北米の冷帯から南米北部の熱帯までを原産地^{注1)}とします。1960年代から子ガメがペットとして輸入され、野外に放逐されるようになり、野生化した個体が沖縄を含む日本各地の都市部や郊外の池、水田、湖沼、河川等で確認されています^{注1)}。本種は広食性であり、魚類や両生類等を捕食することから、在来の生態系への影響も懸念されています^{注2)}。今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）では確認されませんでした。河川水辺の国勢調査では、これまでの調査では1巡目調査において九州地方の1河川で、5巡目調査において関東地方の1河川で確認されました。

台湾ザルは、台湾原産であり、動物園や観光施設の飼育個体による逃亡や放獣などの原因による野生化が始まり、下北半島、伊豆大島、和歌山県北部（大池地区）での生息が確認されています^{注1)}。古くは、第二次世界大戦中（1940年頃）に伊豆大島の動物園から逃亡し、元来、サルのない大島に、今では広く全島に生息しています^{注2)}。本種は、一部の地域で日本産のニホンザルと雑種が形成され、遺伝的攪乱が今後も進行する可能性があり、注視が必要です^{注1)}。今回のとりまとめを含むこれまでの河川水辺の国勢調査では、確認されませんでした。

クリハラリスは、台湾原産あるいは大陸原産であり、戦前から各地で飼育されていたようですが、正確な記録はなく、1935年に伊豆大島で飼育個体が逃げたのが最初の記録となっています^{注1)}。その後、観光地や都市公園に導入されました。国内では本州、九州などの幾つかの地域で定着しています。本種が杉皮の剥離などの問題を引き起こしている地域もあります^{注1,4)}。今回のとりまとめを含むこれまでの河川水辺の国勢調査では、確認されませんでした。

ヌートリアは、南米原産の大型のネズミ類で、1939～49年、軍用の毛皮獣として導入され、各地で養殖されました。しかし終戦後、養殖場の閉鎖によって野外に放逐され、野生化しました^{注2)}。本種は、水陸の植物を主食とし水辺の植物に対する影響が大きいとともにドブガイ等の捕食も確認されており、タナゴ類の繁殖への影響が懸念されています^{注3,4)}。また、土盛りの堤

防や畔に横穴状のトンネルを掘り巣穴として利用するため兵庫県ではため池の堤防が崩れた例が報告されています^{注5)}。今回とりまとめを行った4河川(一級河川の直轄管理区間)において、ヌートリアは2河川で確認されました。これらのうち、近畿地方の由良川では、1巡目から継続して確認されています。確認河川数の割合、確認地区数の割合は、5巡目の途中ではありますが、若干の増加傾向がみられました。

アライグマは、北米原産でペットとして飼われていた個体が野生化し、農作物への被害が報告されている種です。また、本種は雑食性であり、鳥類の卵や雛等を捕食することから、在来の生態系への影響も懸念されています。日本で最初の侵入は1962年、愛知県の動物園で飼育個体の逃亡によって発生しました^{注1)}。続いて1979年には北海道でも飼育個体の逃亡からアライグマが定着し、その後も日本各地で侵入が確認されています^{注1)}。特に北海道では、農業被害が深刻化し、駆除による捕獲頭数は増加傾向にあり、生息数の増加が懸念されています^{注1,4)}。今回とりまとめを行った4河川(一級河川の直轄管理区間)において、アライグマは3河川で確認され、九州地方の筑後川では河川水辺の国勢調査として初めて確認されました。確認河川数・地区数の割合は、5巡目の途中ではありますが、1巡目調査から増加しており、分布の拡大傾向がみられました(5巡目以降、特に中国・四国・九州地方で分布拡大)。そのため、これらの河川では従来の生態系に何らかの影響を与えている可能性もあります。また、アライグマ属のカニクイアライグマは中南米が原産で移入の経緯については不明な点が多いですが、アライグマと同様にペットとして輸入された可能性もあります^{注1,4)}。国内でのカニクイアライグマの定着は確認されていませんが、今後とも注視が必要です。

ミンクは、北米原産で、毛皮の材料とするため1928年に北海道に導入されました^{注6)}。養殖されていたものが逸出し、野外に定着したと考えられます。養殖魚への食害など水産業への被害^{注6)}や、餌資源の奪い合いによる在来のイタチ科への悪影響等^{注4)}も問題となっています。今回とりまとめを行った4河川(一級河川の直轄管理区間)では確認されませんでした。

注1) 出典：外来種ハンドブック。2002。地人書館。

注2) 出典：川の生物図典。1996。山海堂。

注3) 出典：日本の帰化生物。1993。保育社。

注4) 出典：日本動物大百科2哺乳類II。1996。平凡社。

注5) 出典：野生鳥獣被害防止マニュアル-アライグマ、ヌートリア、キョン、マングース、タイワンリス(特定外来生物編)-。2010。農林水産省。

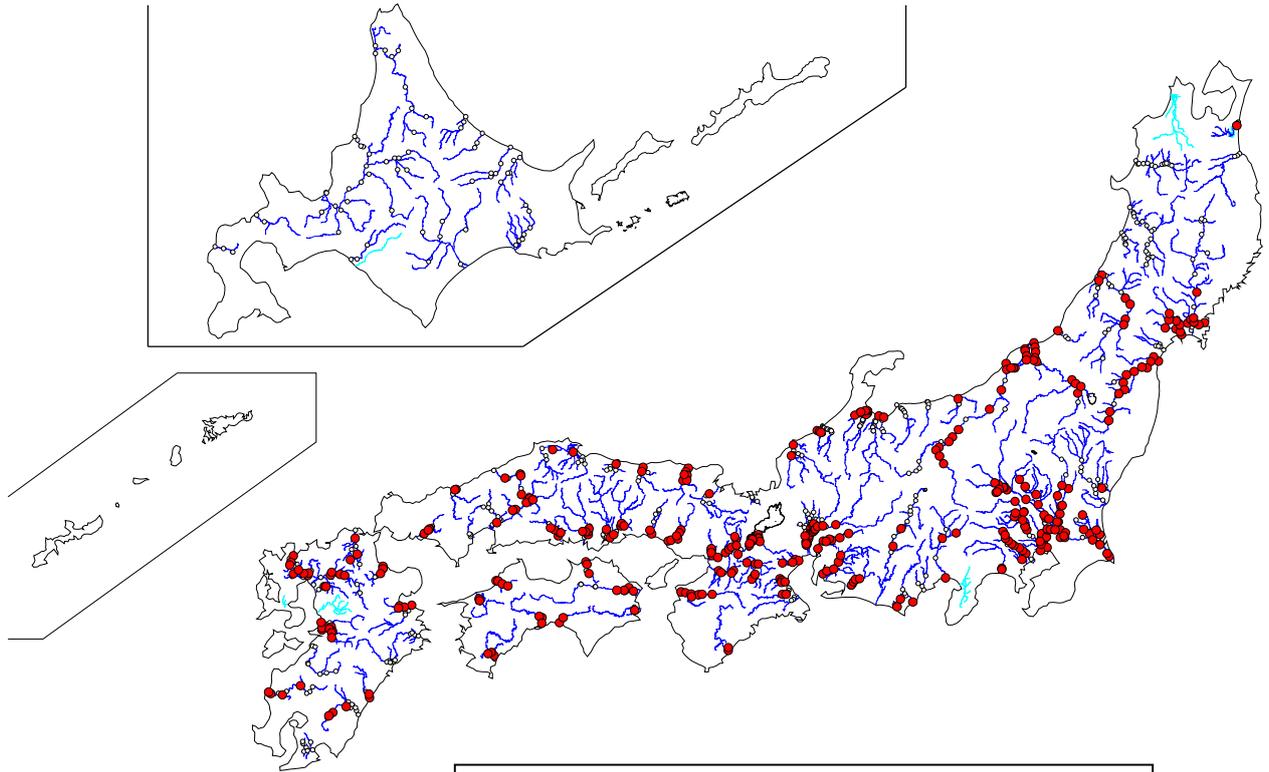
注6) 出典：北海道ブルーリスト。2010。北海道。

注7) 出典：新 日本両生爬虫類図鑑。2021。サンライズ出版。

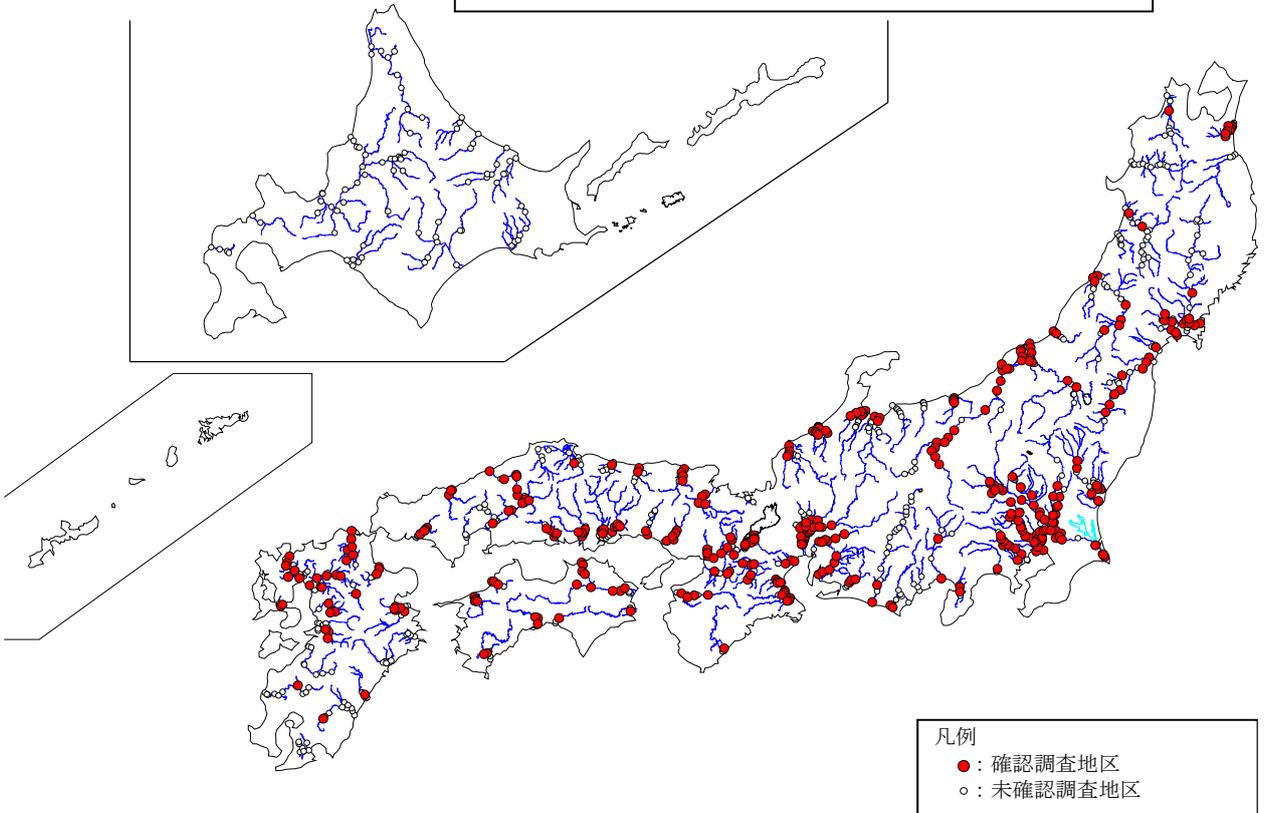


注) ノートリアは今回とりまとめを行った4河川では写真撮影なし。

2 巡目調査（平成 8～12 年度（1996～2000 年度））



3 巡目調査（平成 13～17 年度（2001～2005 年度））

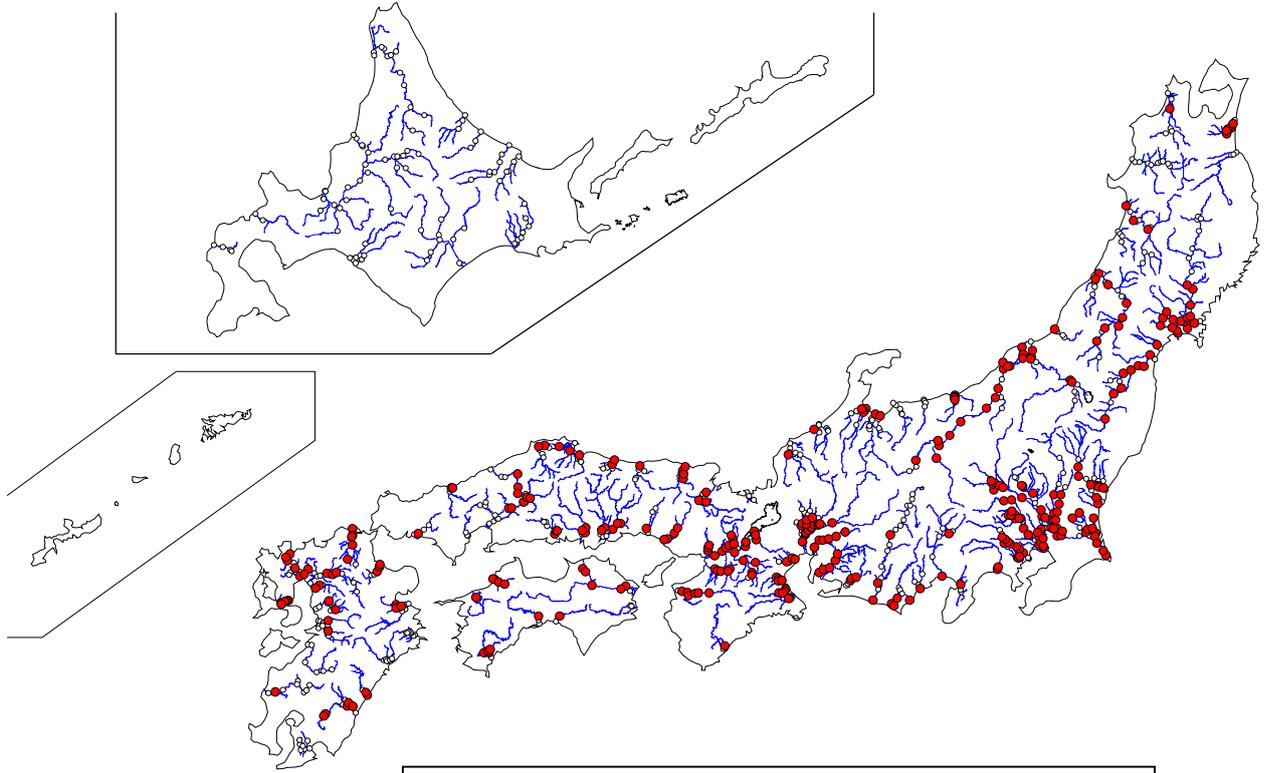


凡例
●：確認調査地区
○：未確認調査地区

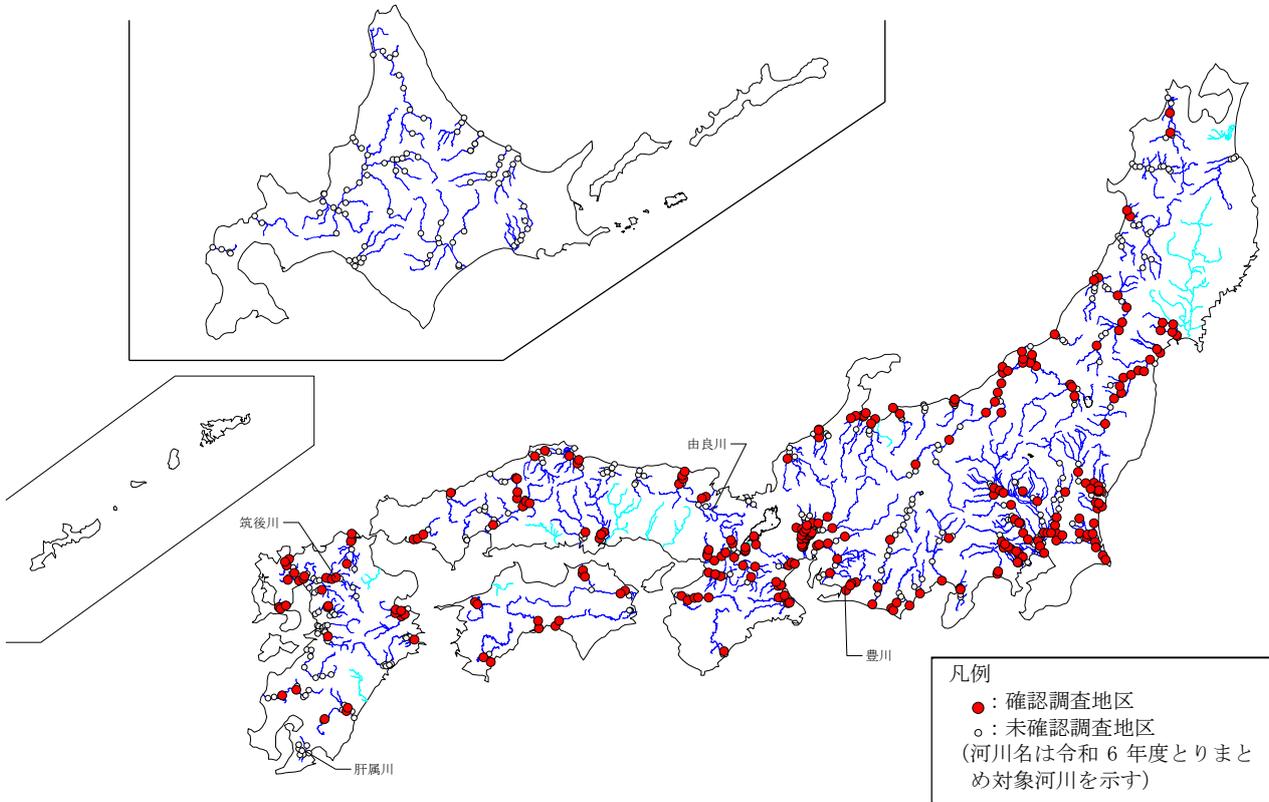
注 1) 〓は、調査未実施もしくは調査結果が河川環境データベースに未格納の河川を示す。
注 2) 1 巡目調査は調査対象河川数が少ないため図示を割愛する。

図 5-15 ウシガエルの確認された調査地区（2 巡目調査、3 巡目調査）（1/2）

4 巡目調査（平成 18～27 年度（2006～2015 年度））



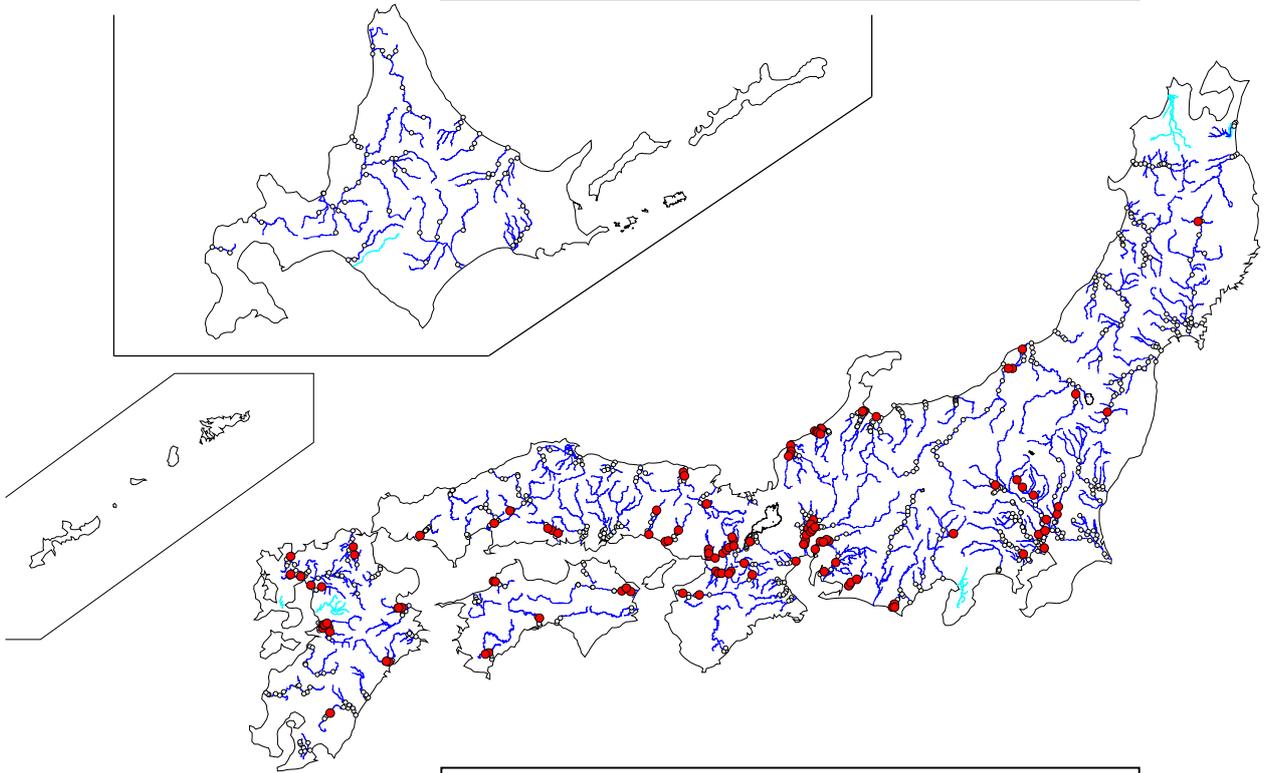
5 巡目調査（平成 28～令和 6 年度（2016～2024 年度））



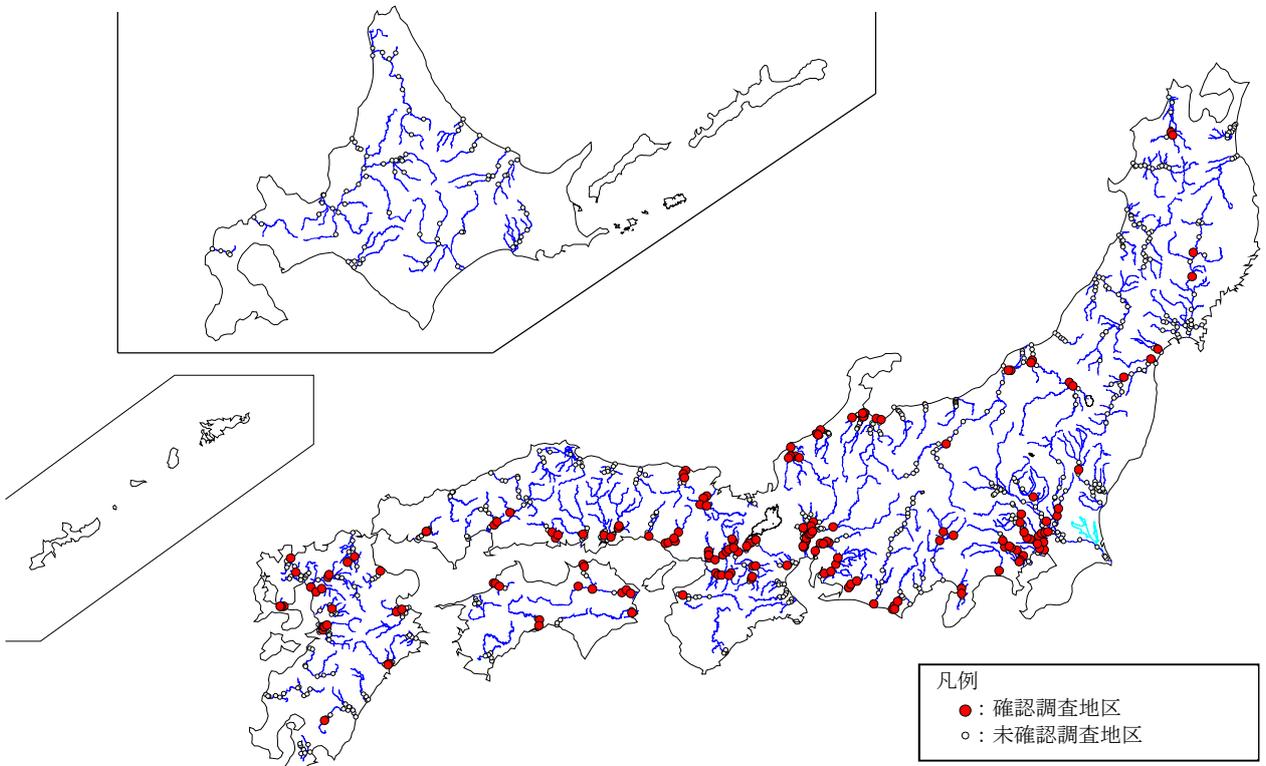
注 1) 5 巡目調査は実施中であり、— は調査未実施の河川を示す。

図 5-15 ウシガエルの確認された調査地区（4 巡目調査、5 巡目調査）（2/2）

2巡目調査（平成8～12年度（1996～2000年度））



3巡目調査（平成13～17年度（2001～2005年度））

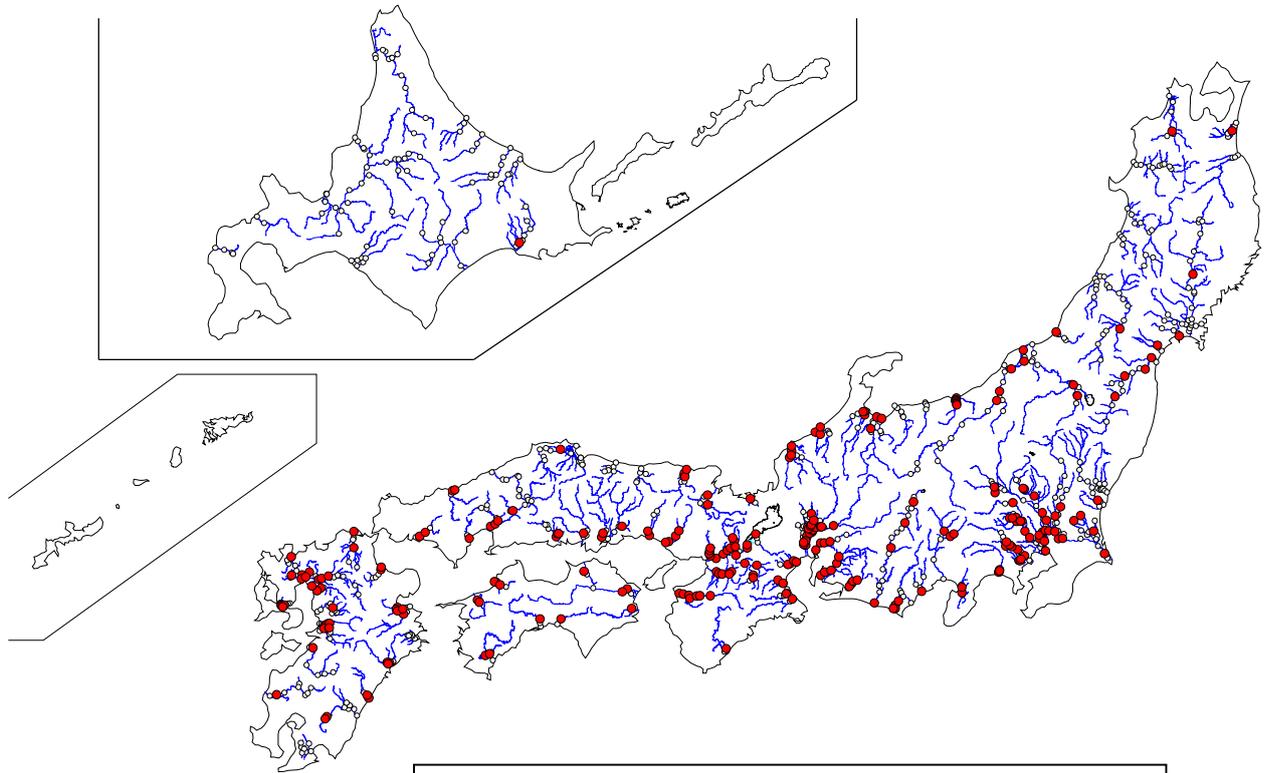


凡例
 ●：確認調査地区
 ○：未確認調査地区

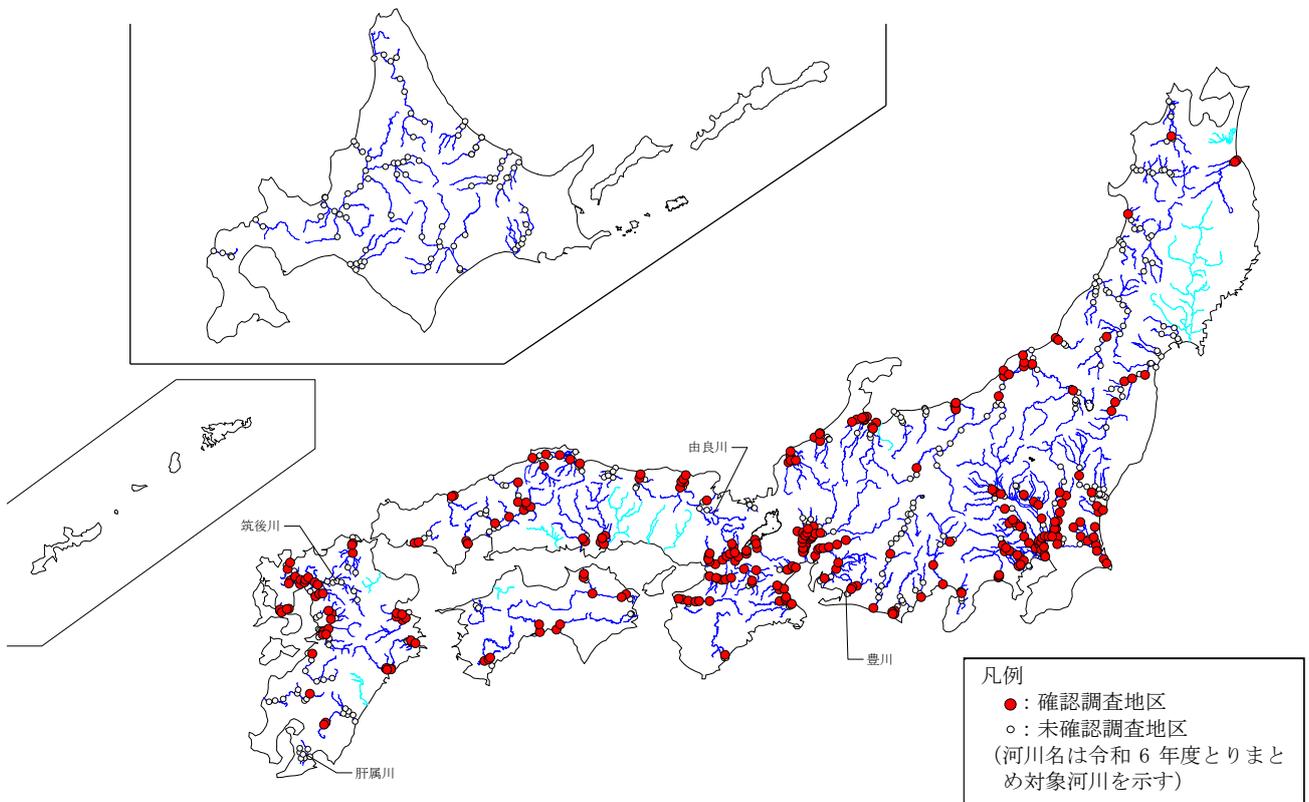
注1) 〓は、調査未実施もしくは調査結果が河川環境データベースに未格納の河川を示す。
 注2) 1巡目調査は調査対象河川数が少ないため図示を割愛する。

図 5-16 ミシシippアカミミガメの確認された調査地区（2巡目調査、3巡目調査）（1/2）

4 巡目調査（平成 18～27 年度（2006～2015 年度））



5 巡目調査（平成 28～令和 6 年度（2016～2024 年度））

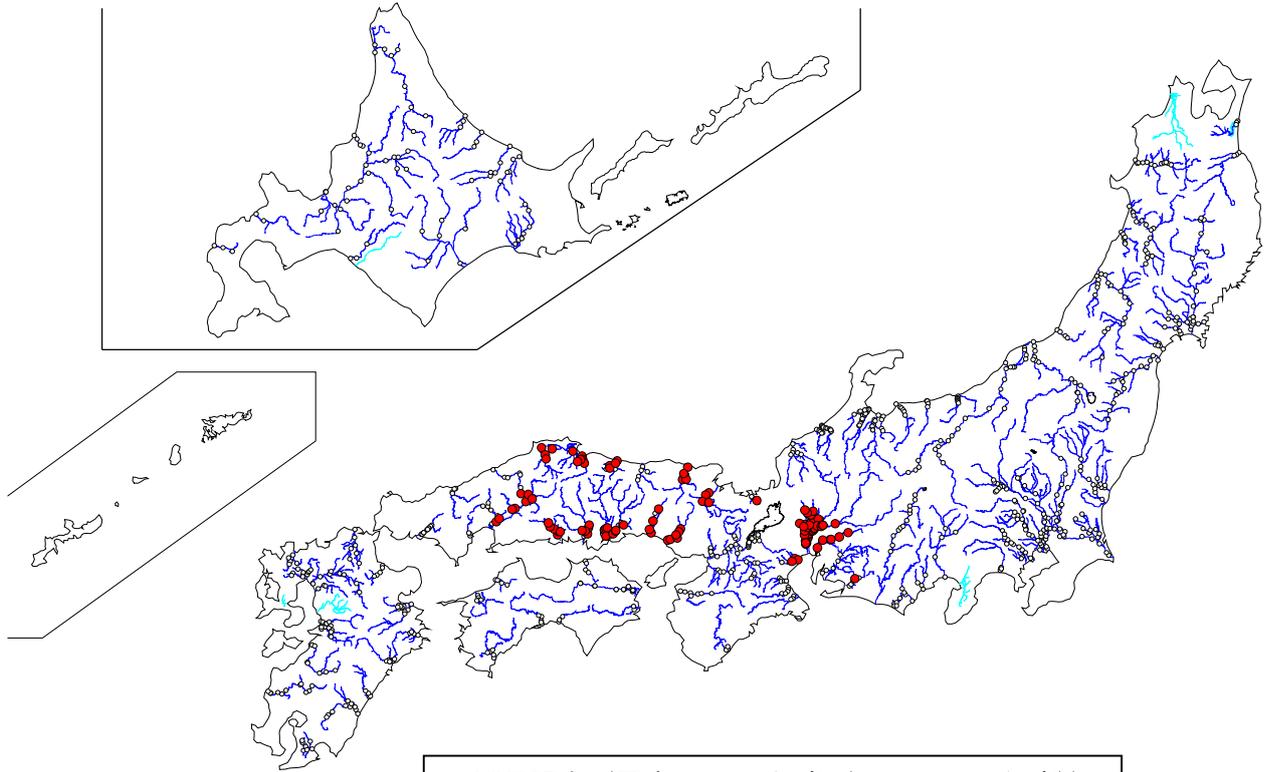


- 凡例
- ：確認調査地区
 - ：未確認調査地区
- （河川名は令和 6 年度とりまとめ対象河川を示す）

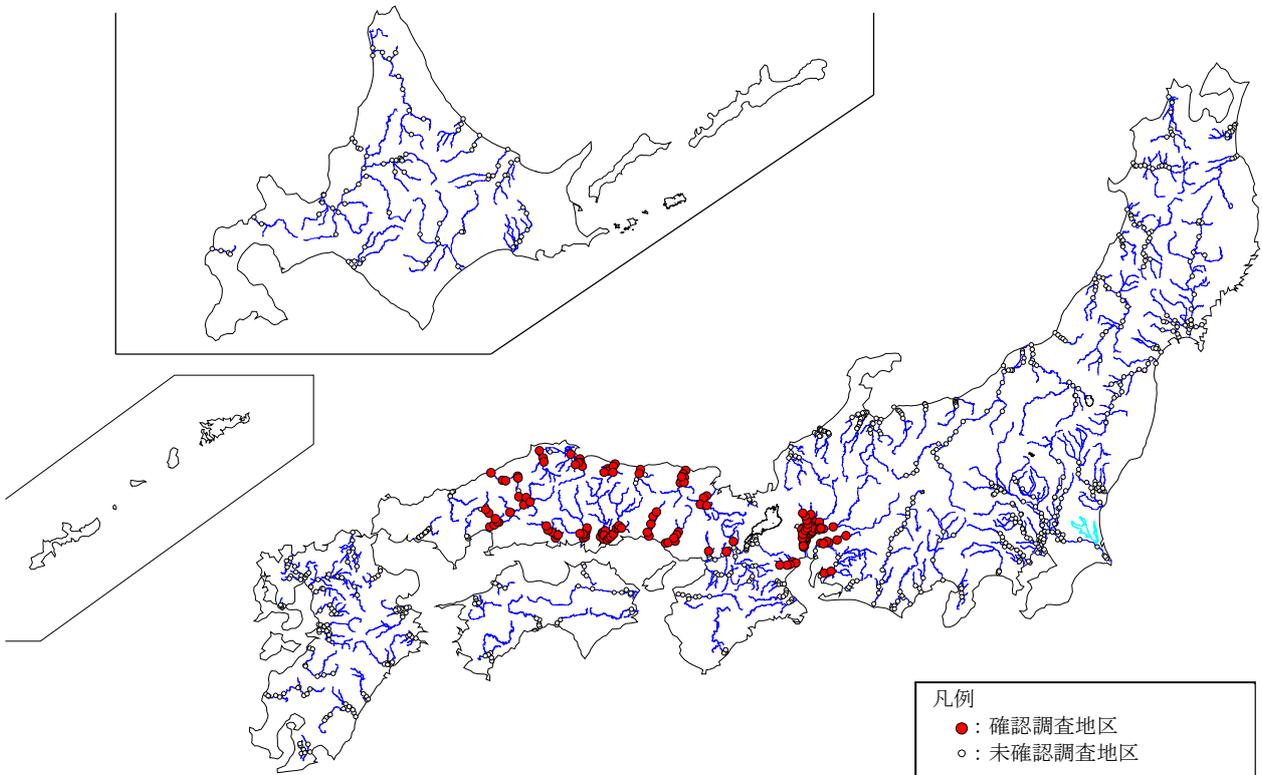
注 1) 5 巡目調査は実施中であり、— は調査未実施の河川を示す。

図 5-16 ミシシippアカミミガメの確認された調査地区（4 巡目調査、5 巡目調査）（2/2）

2 巡目調査 (平成 8～12 年度 (1996～2000 年度))



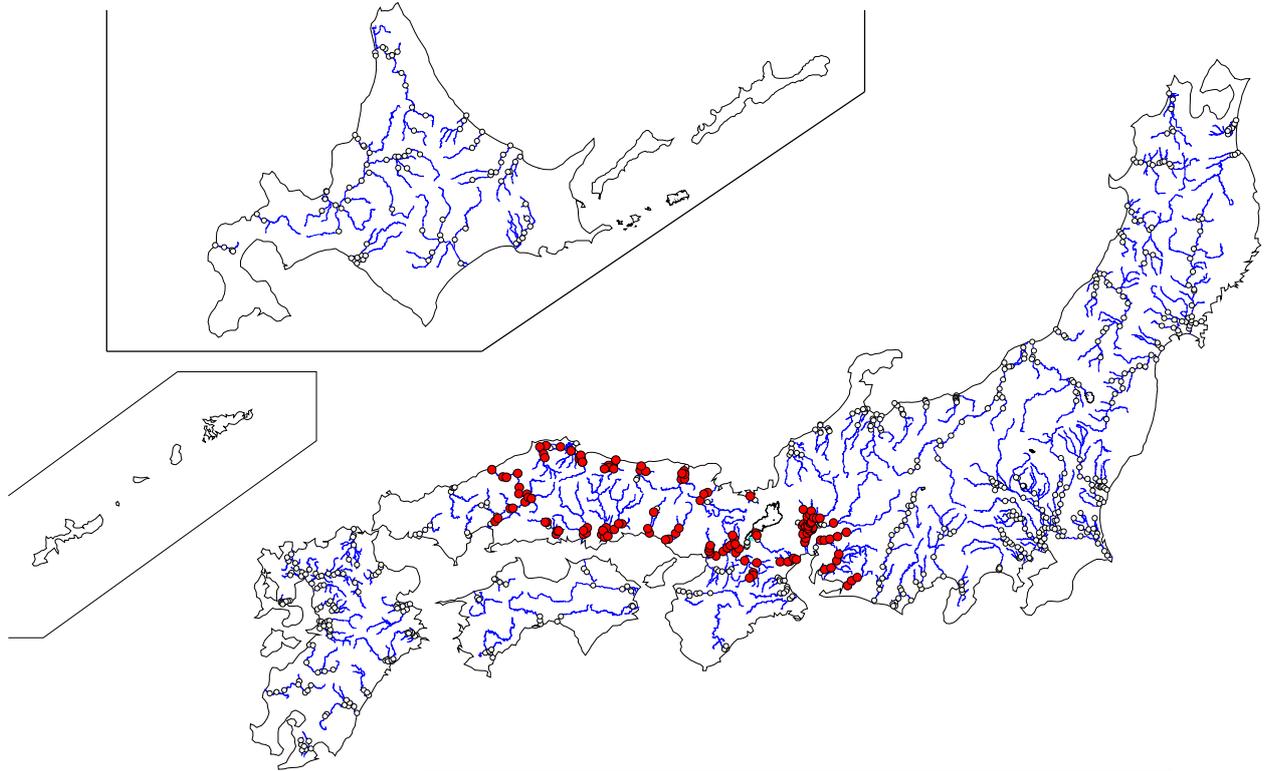
3 巡目調査 (平成 13～17 年度 (2001～2005 年度))



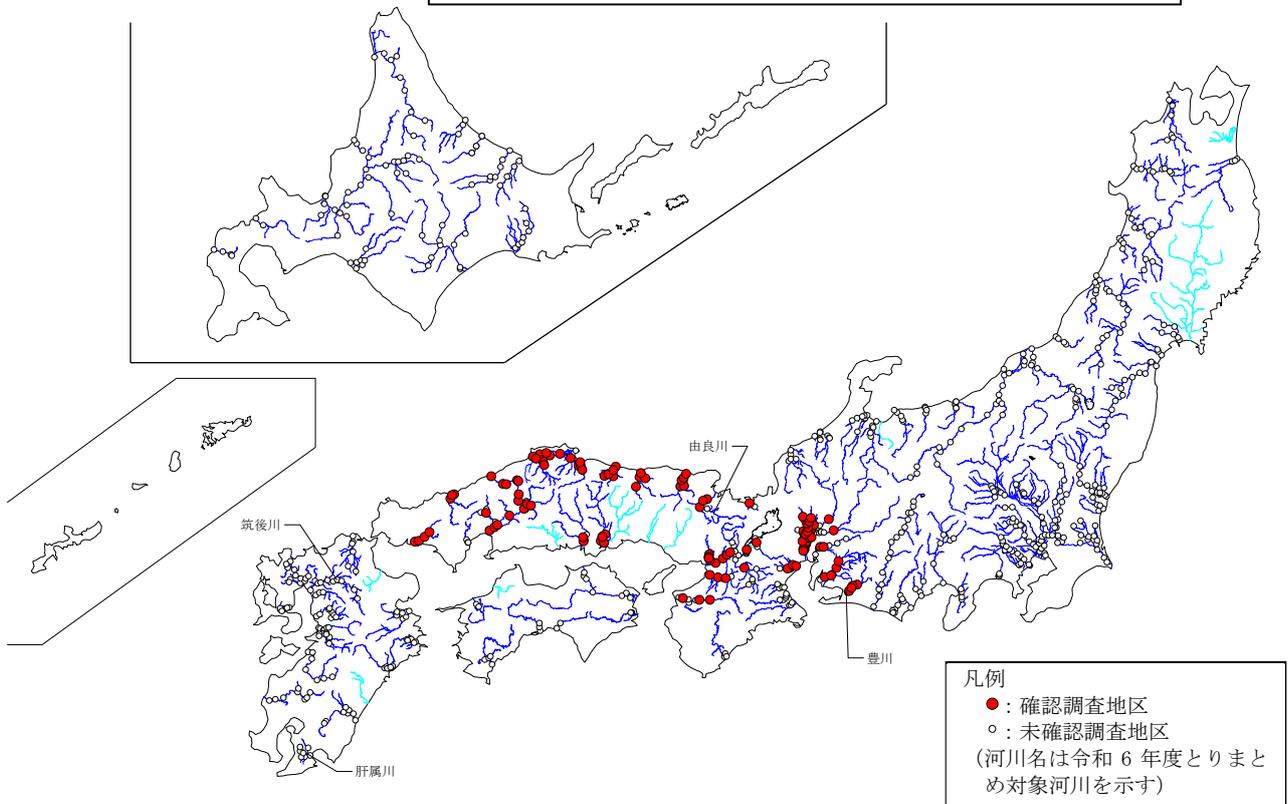
注 1) 青線は、調査未実施もしくは調査結果が河川環境データベースに未格納の河川を示す。
注 2) 1 巡目調査は調査対象河川数が少ないため図示を割愛する。

図 5-17 ノートリアの確認された調査地区 (2 巡目調査、3 巡目調査) (1/2)

4 巡目調査（平成 18～27 年度（2006～2015 年度））



5 巡目調査（平成 28～令和 6 年度（2016～2024 年度））

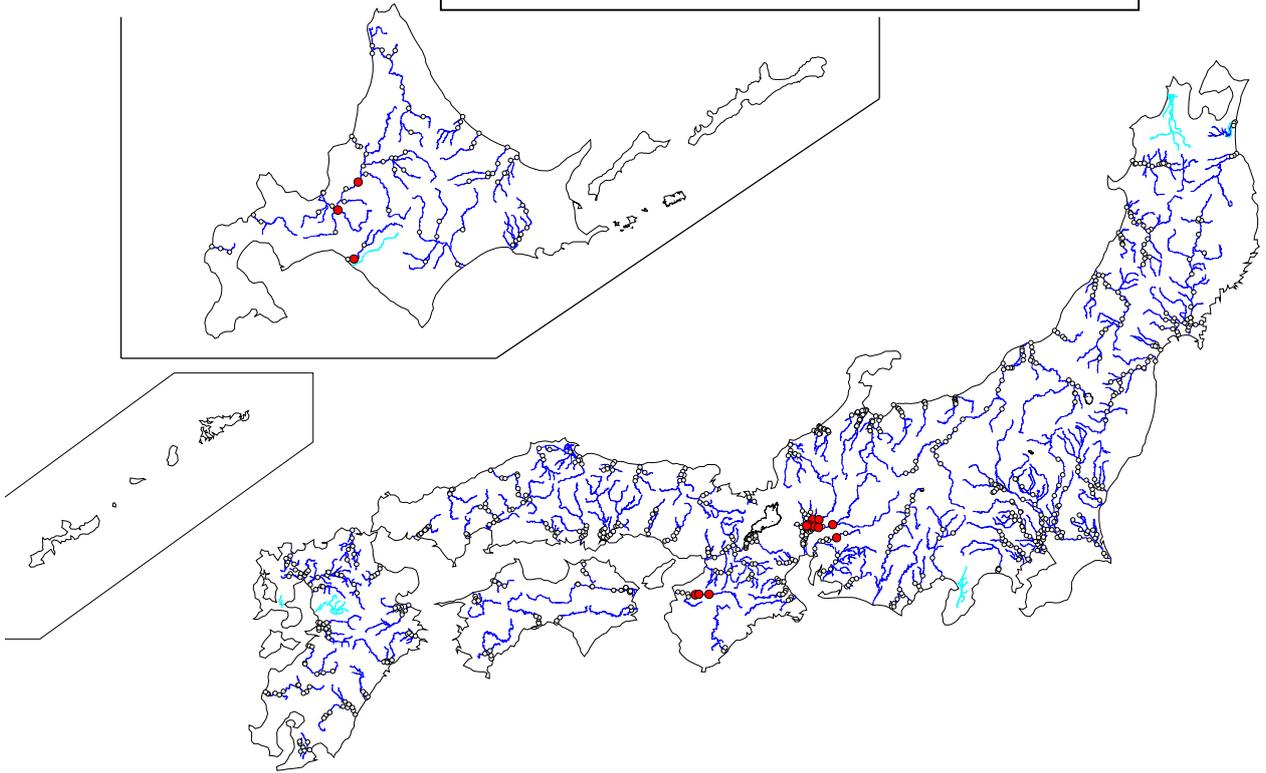


凡例
 ●：確認調査地区
 ○：未確認調査地区
 (河川名は令和 6 年度とりまとめ対象河川を示す)

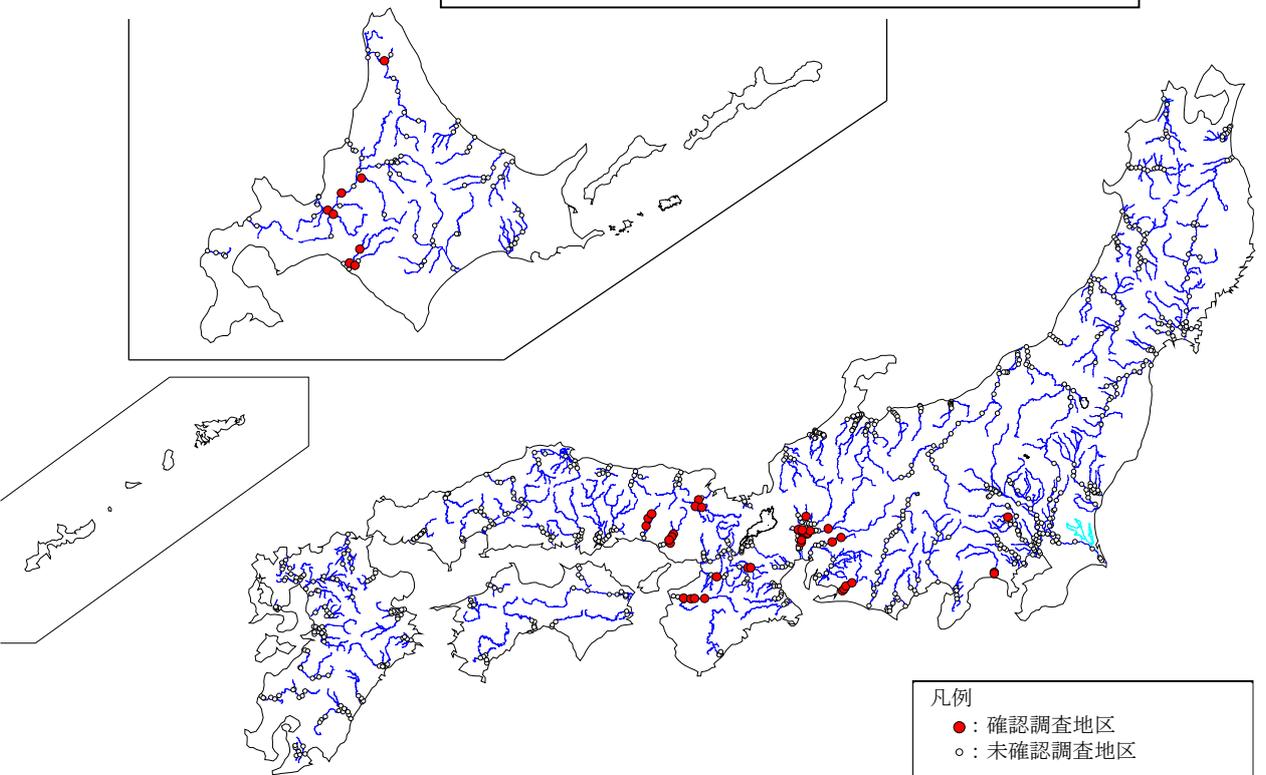
注 1) 5 巡目調査は実施中であり、— は調査未実施の河川を示す。

図 5-17 ノートリアの確認された調査地区（4 巡目調査、5 巡目調査）（2/2）

2 巡目調査 (平成 8～12 年度 (1996～2000 年度))



3 巡目調査 (平成 13～17 年度 (2001～2005 年度))

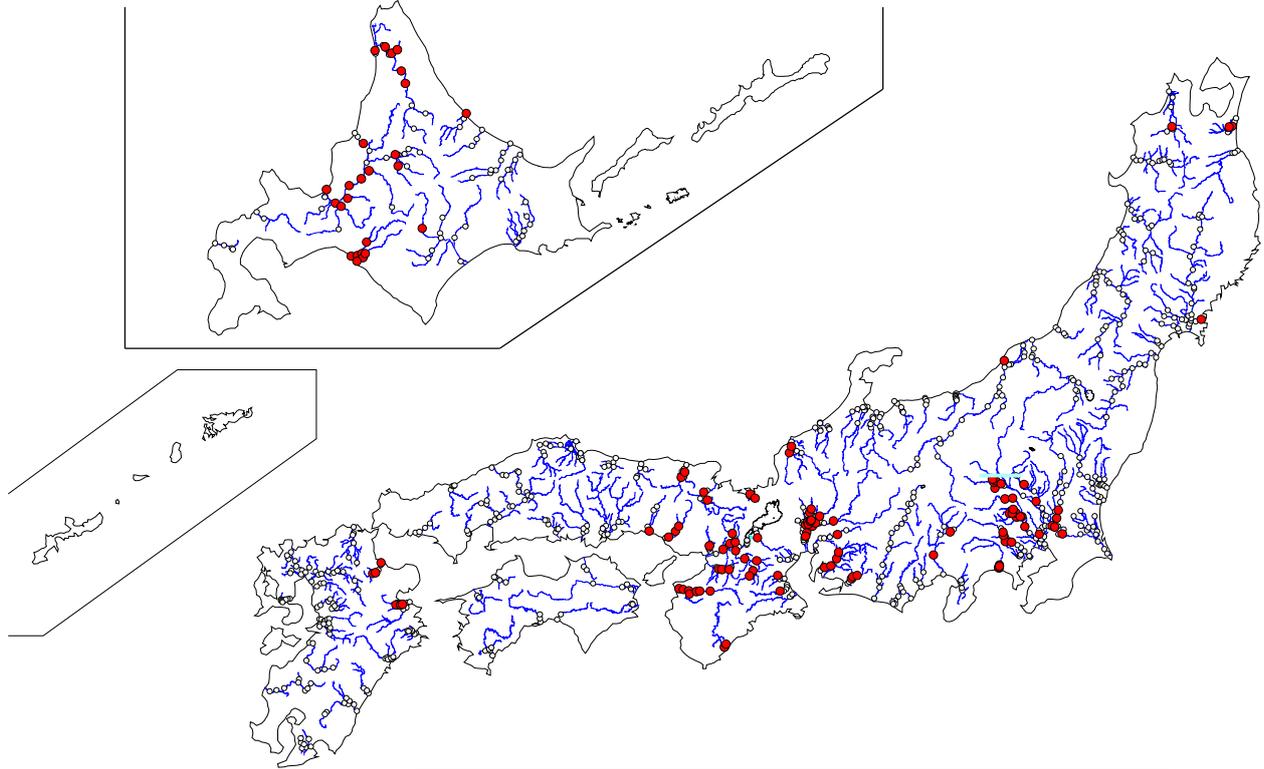


凡例
 ● : 確認調査地区
 ○ : 未確認調査地区

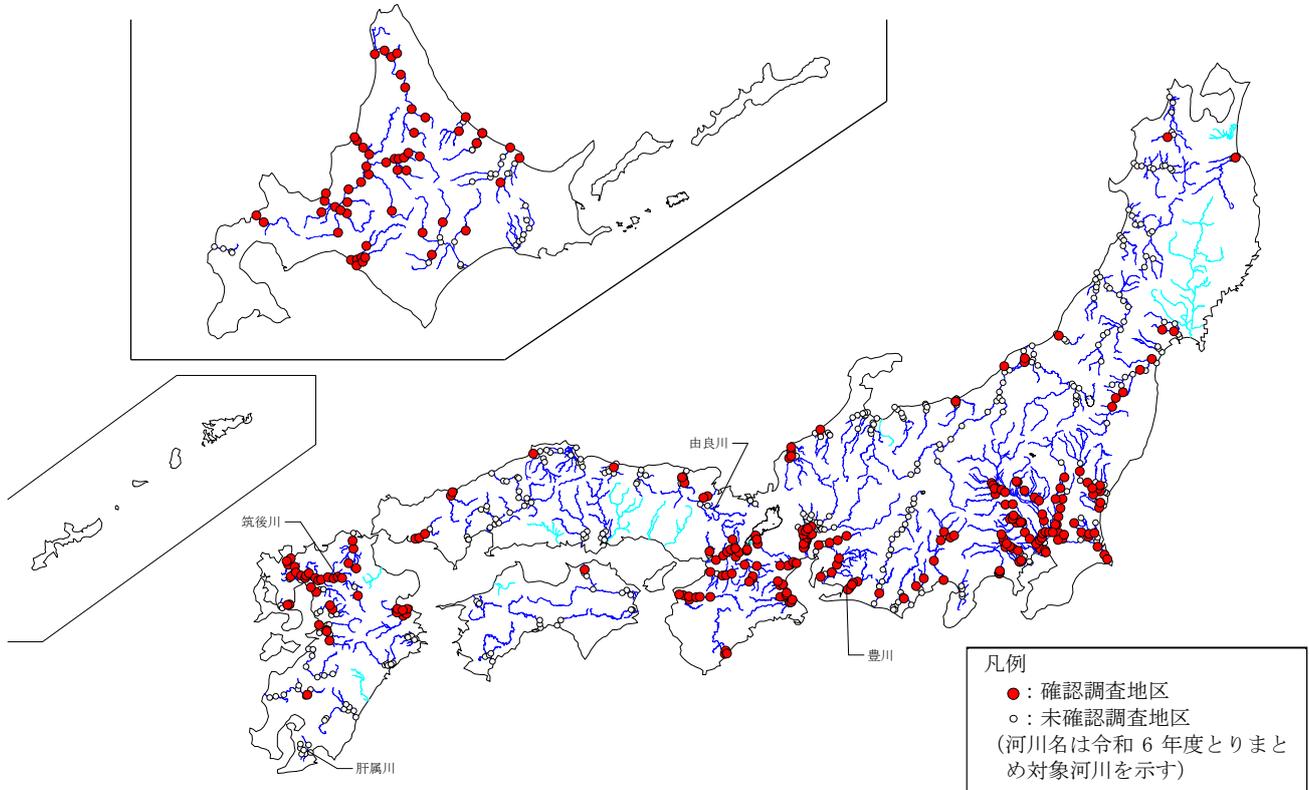
注1) 〃は、調査未実施もしくは調査結果が河川環境データベースに未格納の河川を示す。
 注2) 1巡目調査は調査対象河川数が少ないため図示を割愛する。

図 5-18 アライグマの確認された調査地区 (2 巡目調査、3 巡目調査) (1/2)

4 巡目調査（平成 18～27 年度（2006～2015 年度））



5 巡目調査（平成 28～令和 6 年度（2016～2024 年度））

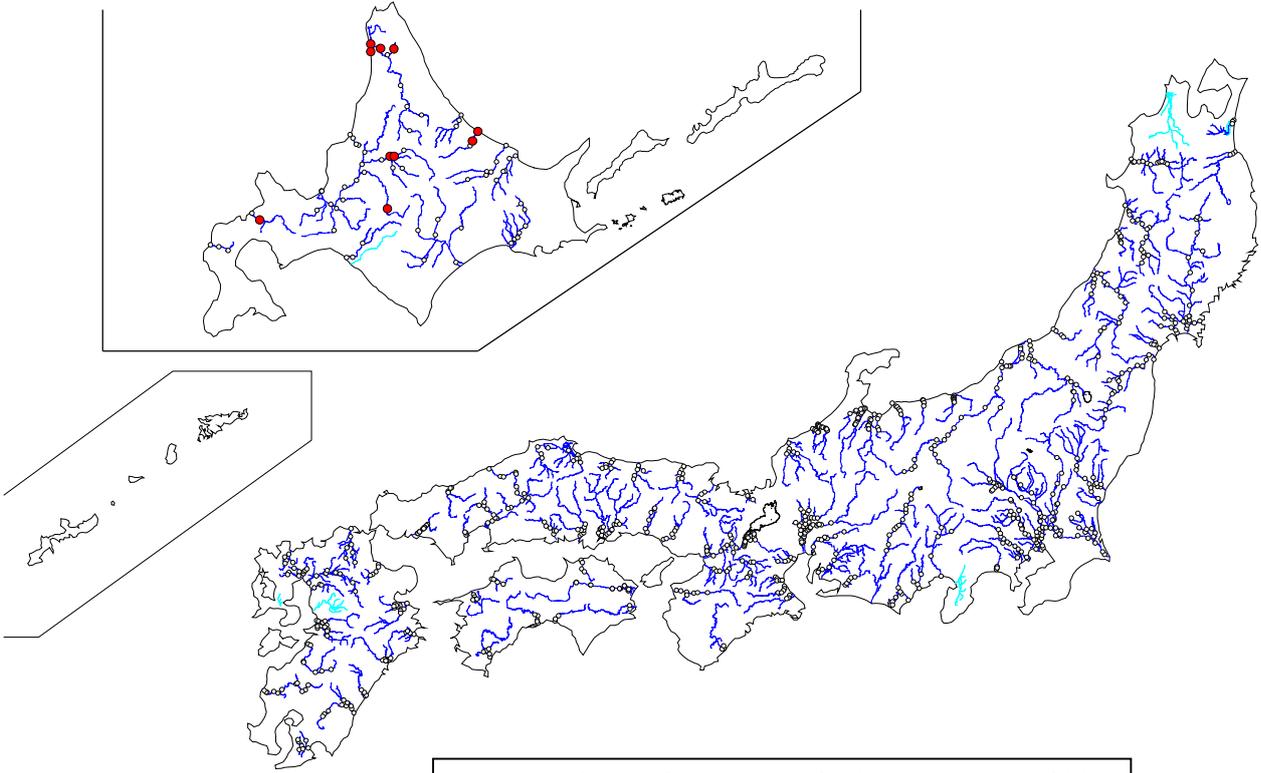


凡例
 ●：確認調査地区
 ○：未確認調査地区
 (河川名は令和 6 年度とりまとめ対象河川を示す)

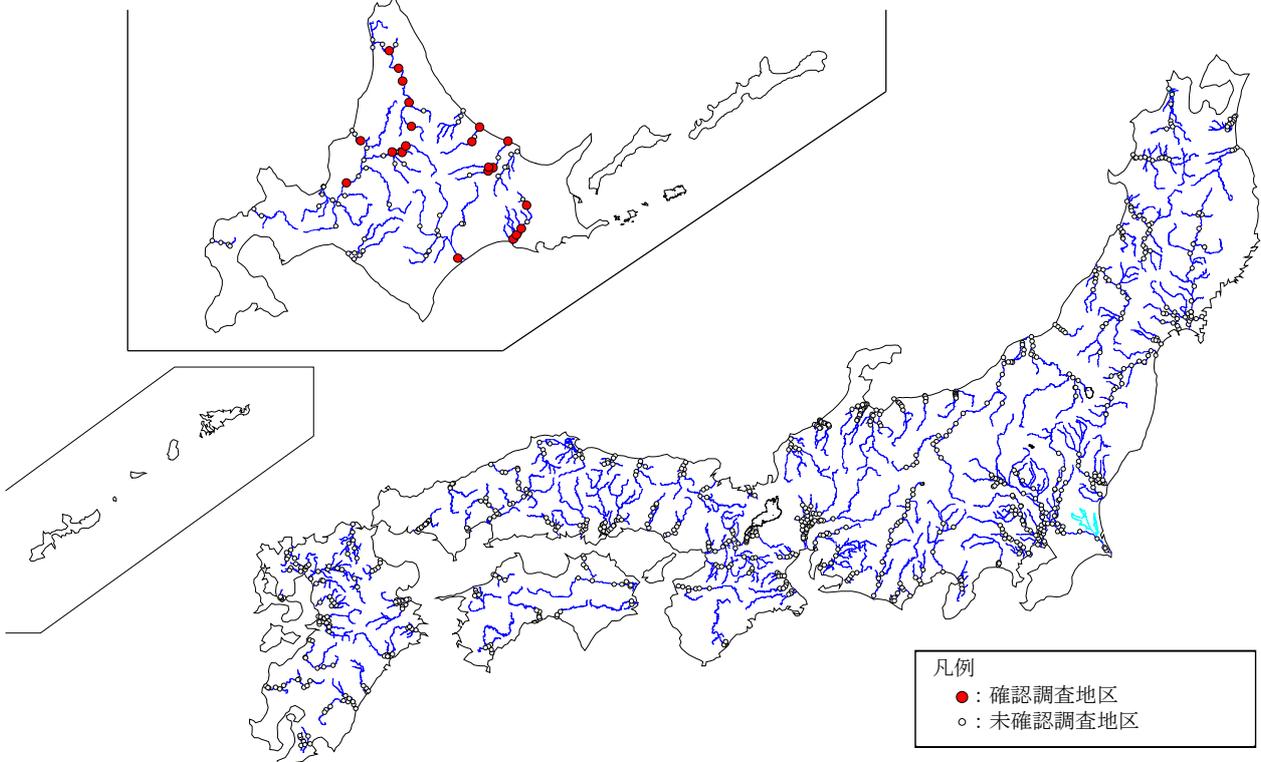
注 1) 5 巡目調査は実施中であり、— は調査未実施の河川を示す。

図 5-18 アライグマの確認された調査地区（4 巡目調査、5 巡目調査）（2/2）

2 巡目調査（平成 8～12 年度（1996～2000 年度））



3 巡目調査（平成 13～17 年度（2001～2005 年度））

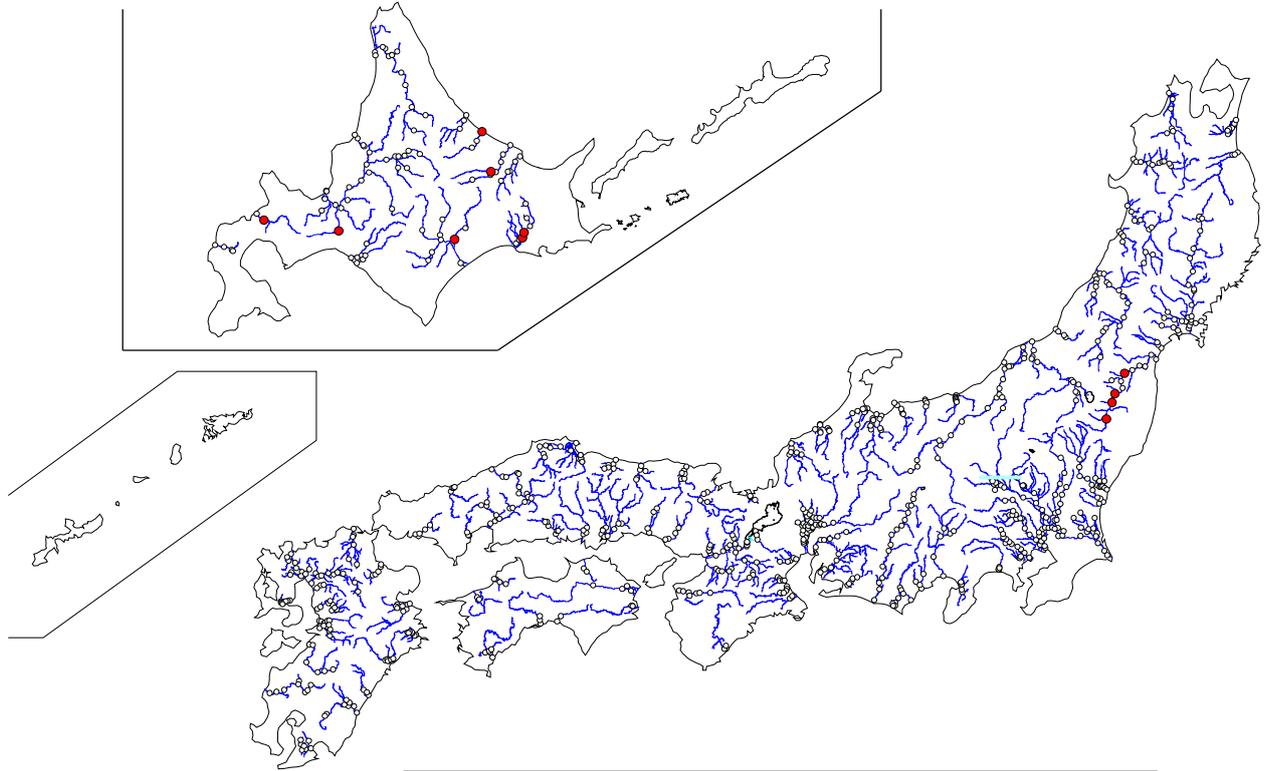


凡例
 ●：確認調査地区
 ○：未確認調査地区

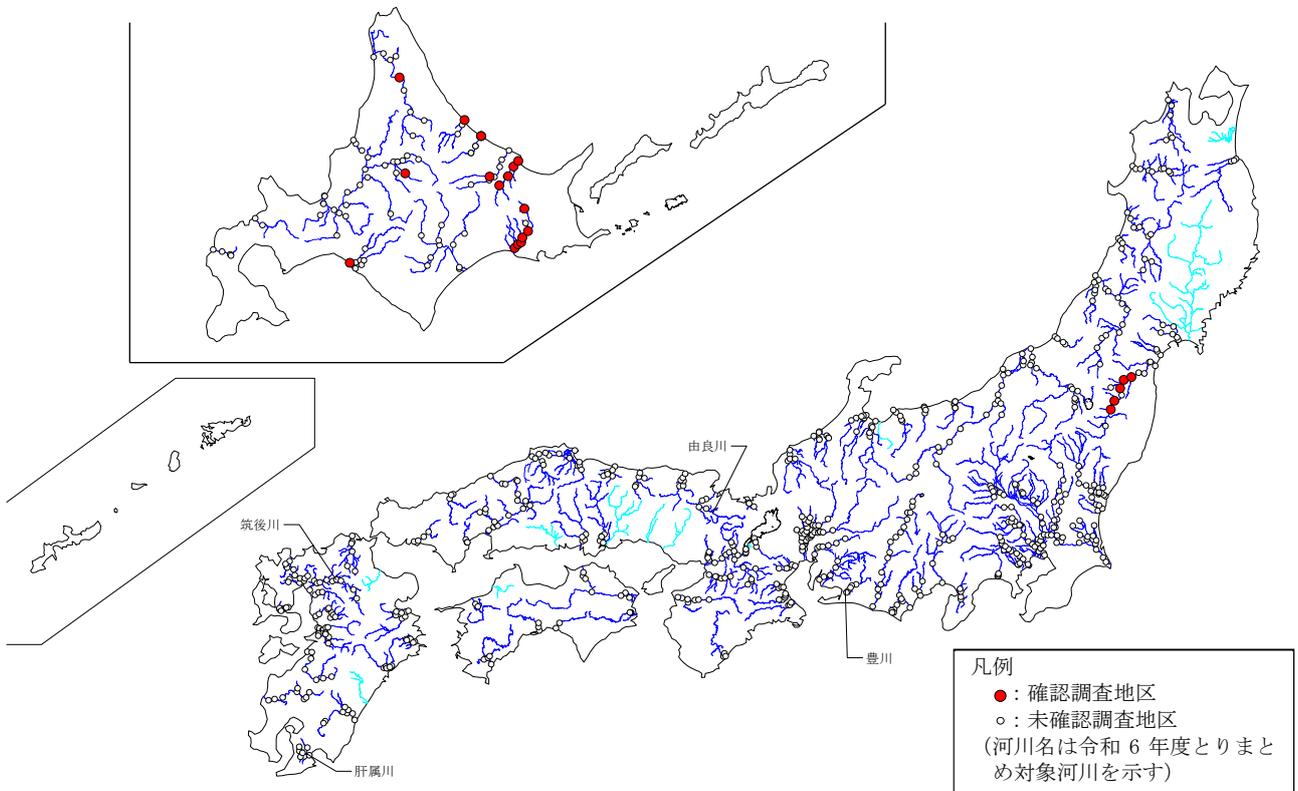
注1) 〓は、調査未実施もしくは調査結果が河川環境データベースに未格納の河川を示す。
 注2) 1 巡目調査は調査対象河川数が少ないため図示を割愛する。

図 5-19 ミンクの確認された調査地区（2 巡目調査、3 巡目調査）（1/2）

4 巡目調査（平成 18～27 年度（2006～2015 年度））



5 巡目調査（平成 28～令和 6 年度（2016～2024 年度））



凡例
 ●：確認調査地区
 ○：未確認調査地区
 （河川名は令和 6 年度とりまとめ対象河川を示す）

注 1) 5 巡目調査は実施中であり、— は調査未実施の河川を示す。

図 5-19 ミンクの確認された調査地区（4 巡目調査、5 巡目調査）（2/2）

(2) 国外外来種の分布状況（拡大傾向にある新たな国外外来種）

ここでは、近年特定外来生物に指定された種の拡大傾向の考察を目的として「オオサンショウウオ以外のオオサンショウウオ属、およびオオサンショウウオ属内の種間の交雑個体」の整理を行いました。なお、3巡目以前の調査については調査時期・調査手法等が異なることから、4巡目以降のデータを使用して考察を行いました。

【拡大傾向にある新たな国外外来種：国外外来種の分布状況】

（両生類調査）

● オオサンショウウオとチュウゴクオオサンショウウオの交雑個体は1河川で確認

近年特定外来生物に追加された「オオサンショウウオ以外のオオサンショウウオ属、およびオオサンショウウオ属内の種間の交雑個体」の分布拡大の傾向を把握するため、4巡目以降の河川水辺の国勢調査（河川版、ダム湖版）でのオオサンショウウオ属の確認状況の変遷について整理しました。

オオサンショウウオ属はこれまでに近畿地方、中国地方の河川およびダムで確認されており、河川では淀川水系（淀川）、揖保川などの5河川、ダムでは菅沼ダム、苫田ダムなどの6ダムで確認されています。そのうち、特定外来生物に該当する個体として、「オオサンショウウオとチュウゴクオオサンショウウオの交雑個体」が近畿地方の淀川水系（木津川）の1河川のみで確認されています。

（資料掲載：5-46 ページ、5-53～5-54 ページ）

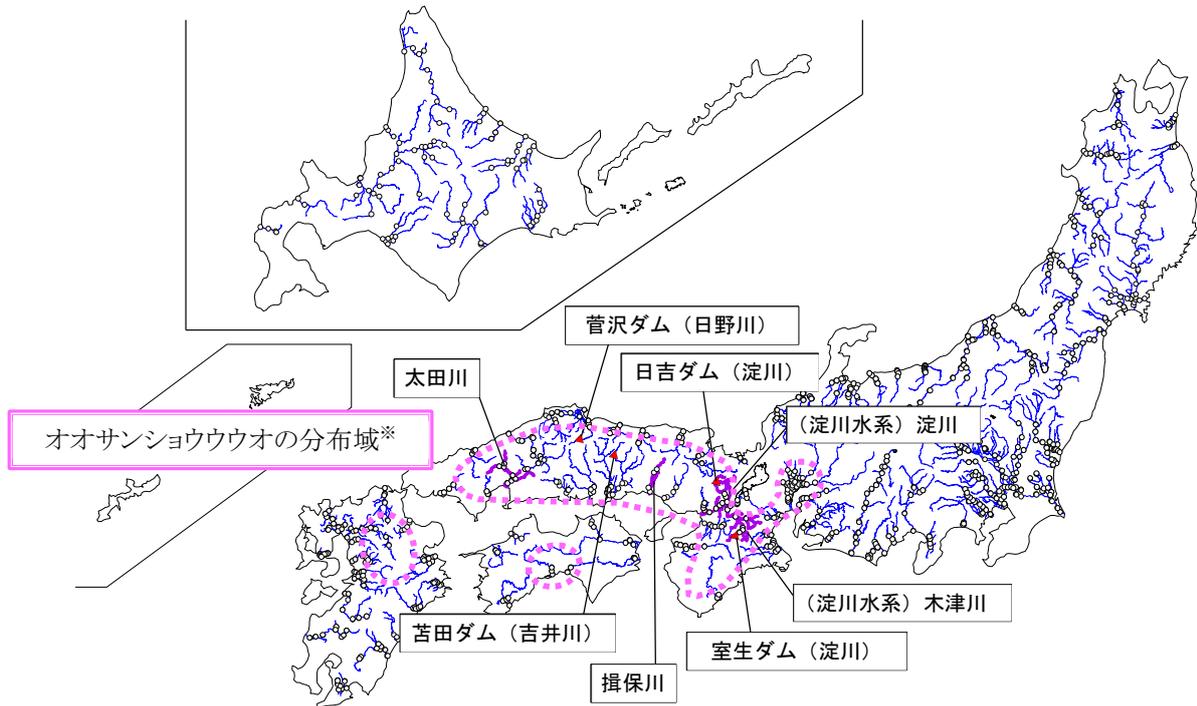
※特定外来生物とは、『特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（最終改正および施行令和7年6月）』により、輸入や飼養等が規制される生物（生きているものに限られ、個体だけではなく、卵、種子、器官なども含まれる）です。おおむね明治以降に国外から導入された国外外来種のうち、生態系、人の生命・身体及び農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがある生物が指定されています。

注) オオサンショウウオ以外のオオサンショウウオ属及びオオサンショウウオ属内の種間の交雑個体は、2024年7月1日から「特定外来生物」に指定されました。

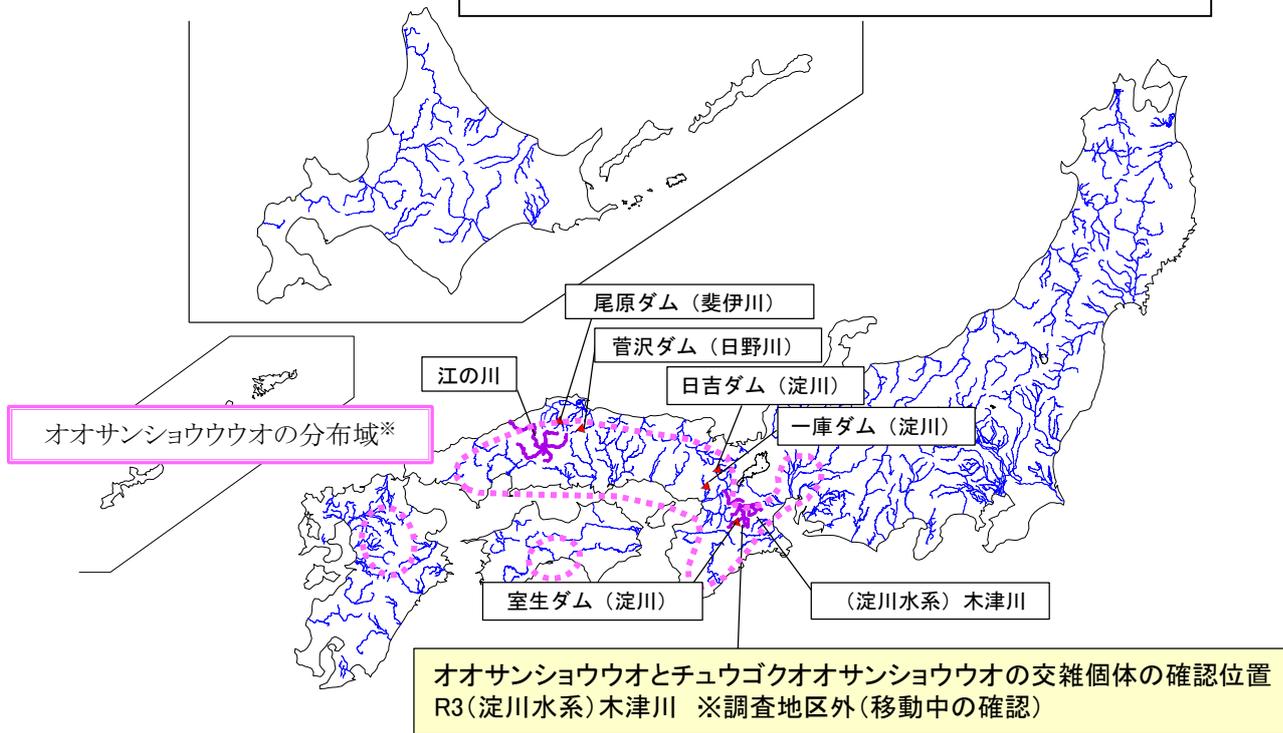
表 5-14 河川水辺の国勢調査におけるオオサンショウウオおよび交雑個体の確認状況

巡目	調査数		オオサンショウウオ		オオサンショウウオとチュウゴクオオサンショウウオの交雑個体	
	河川	ダム	河川	ダム	河川	ダム
4巡目調査	122	111	4	4	0	0
5巡目調査 (調査進行中)	113	110	2	5	1 (淀川水系 木津川)	0

4巡目調査（平成18～27年度（2006～2015年度））



5巡目調査（平成28～令和6年度（2016～2024年度））



※分布域は「日本オオサンショウウオの会 HP」(<https://www.giantsalamander.net/untitled-chtb>)を参照とした。
分布域のうち、和歌山県の個体群は人為移入由来と考えられている。また、四国地方の個体群については、遺伝的特徴から人為移入の可能性がある。

図5-20 これまでにオオサンショウウオおよび交雑個体が確認されたダム・河川
(4巡目調査、5巡目調査)

ここでは、外来生物法により特定外来生物として指定されているオオサンショウウオ以外のオオサンショウウオ属、およびオオサンショウウオ属内の種間の交雑個体の確認状況を整理しました。

チュウゴクオオサンショウウオは、1972年に中国から食用として大量に輸入されたことが知られています^{注1)}。その後、産業には利用されなくなり、逃げ出して野生化したと考えられます^{注1)}。現在では、京都市鴨川水系および上桂川、三重県名張市、奈良県宇陀市でチュウゴクオオサンショウウオとオオサンショウウオの交雑個体が確認されており、交雑個体さらに第2世代（交雑個体同士や戻し交雑個体）も増加している報告があります^{注1)}。

オオサンショウウオ以外のオオサンショウウオ属、およびオオサンショウウオ属内の種間の交雑個体は、令和6年7月に特定外来生物に指定されました。これまでの河川水辺の国勢調査では、チュウゴクオオサンショウウオは確認されていません。またオオサンショウウオとチュウゴクオオサンショウウオの交雑個体は、4巡目調査以降に近畿地方の淀川水系（木津川）の1河川のみで確認されていることから、本種は各地で定着していないと考えられます。ただし、外来オオサンショウウオ属が問題視され、DNA調査による個体判別が積極的に行われるようになったのは近年になってからであり、過去にオオサンショウウオとされた個体については、DNA調査等による個体判別は必ずしもできていないと考えられることから、確認記録にオオサンショウウオ以外のオオサンショウウオ属および交雑個体が含まれている可能性があります。

特定外来生物に指定されたことで、今後も生息状況に留意が必要と考えられます。

注1) 出典：最新 日本の外来生物. 2019. 平凡社.

5.4 注目すべき種の分布状況

近年、ペットショップなどで購入した国外外来種が逃げ出したり、野外へ遺棄されるなどして、本来は日本に生息しない種が野外に生息し、農作物被害や生態系に深刻な影響を与えるケースがみられます。

ここでは、以上のような、国外外来種の中で主にペット由来と考えられる種の、河川水辺の国勢調査での確認状況について整理しました。

【飼育（ペット）由来の国外外来種】

（両生類・爬虫類・哺乳類調査）

- 対象の4種については今回確認されなかった

国外外来種の中でペット由来と考えられる種のうち、4種（キバラガメ、アナウサギ、シマリス（チョウセンシマリス）、ゴールデンハムスター）を対象として、確認状況を整理しました。

これらのうち、キバラガメ、アナウサギ、チョウセンシマリスについては生態系被害防止外来種リスト^{※1}に選定されています。

今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）において、キバラガメ、アナウサギ、シマリス（チョウセンシマリス）、ゴールデンハムスターは確認されませんでした。

（資料掲載：5-53～5-56 ページ）

※1：生態系被害防止外来種リスト（我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト）とは、我が国の生物多様性を保全するため、様々な主体の参画のもとで外来種対策の一層の進展を図ることを目的とし、環境省及び農林水産省が「生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼす又はそのおそれがある生物」を生態的特性及び社会的状況も踏まえて選定した外来種リストです。

注)アカミミガメは、2023年6月1日から「条件付特定外来生物」に指定されました。

表 5-15 1～5 巡目調査の確認河川数の比較

種類	1 巡目調査 (74 河川)	2 巡目調査 (118 河川)	3 巡目調査 (122 河川)	4 巡目調査 (122 河川)	5 巡目調査 (113 河川)
キバラガメ	0 河川 〔 0.0〕	0 河川 〔 0.0〕	1 河川 〔 0.8〕	0 河川 〔 0.0〕	0 河川 〔 0.0〕
アナウサギ	0 河川 〔 0.0〕	2 河川 〔 1.7〕	5 河川 〔 4.1〕	0 河川 〔 0.0〕	0 河川 〔 0.0〕
シマリス(チョウセンシマリス)	0 河川 〔 0.0〕	0 河川 〔 0.0〕	0 河川 〔 0.0〕	0 河川 〔 0.0〕	0 河川 〔 0.0〕
ゴールデンハムスター	0 河川 〔 0.0〕	1 河川 〔 0.8〕	0 河川 〔 0.0〕	0 河川 〔 0.0〕	0 河川 〔 0.0〕

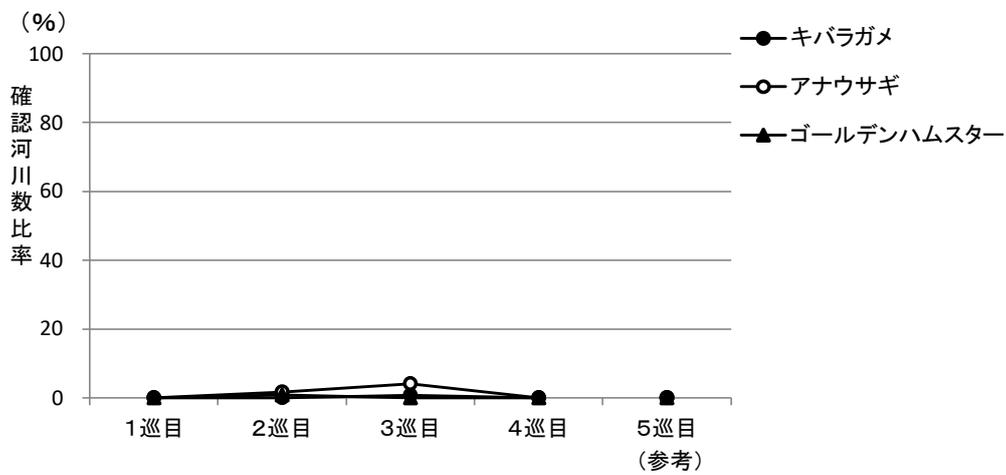


図 5-21 確認河川数比率の変化

- ※ 確認河川数の比較は、直轄管理区間のデータを対象とした。
- ※ 1～4 巡目調査のデータは、調査実施全河川のうち、種名等についてスクリーニングされ、河川環境データベースに格納されている調査データを対象にした。
- ※ () 内は調査実施河川数を示す。
- ※ [] 内は確認河川数の調査実施河川数に対する割合 (%) を示す。
- ※ 5 巡目調査は実施途中であり、掲載しているデータは平成 28～令和 6 年度(2016～2024 年度)の調査結果を示す。

キバラガメは北米原産で、条件付特定外来生物のミシシippアカミミガメと同じアカミミガメ属に属し、腹甲が黄色く、ペットショップなどで販売されています^{注1)}。在来種のニホンイシガメと生息環境が競合すると考えられており、キバラガメが在来種の生息に影響を与えることが憂慮されています。今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）では確認されませんでした。3巡目調査に関東地方の荒川1河川で確認されました。

アナウサギは、原産地がイベリア半島とアフリカ北西部ですが、世界各地に移入され野生化しています^{注2)}。日本ではカイウサギとして知られ、簡易な施設で飼育できるので、幼稚園や学校などでよく飼育されます。本種は、植食性で植物に対する影響が懸念されています^{注3)}。今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）では確認されませんでした。過去の河川水辺の国勢調査では、2巡目調査で2河川、3巡目調査で5河川において確認されました。

シマリス（チョウセンシマリス）は、ペットとして輸入された個体が各地で逃げ出し野生化して、日本産のエゾシマリスとの交雑や置き換わりが懸念されています^{注2)}。これまでの河川水辺の国勢調査では確認されていません。

ゴールデンハムスターは、人によく馴れて飼いやすいため、ペットショップでもよく販売されています^{注4)}。今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）では確認されませんでした。過去の河川水辺の国勢調査では、2巡目調査の1河川で確認されました。

今回とりまとめを行った4河川（一級河川の直轄管理区間）において、国外外来種の中でペット由来と考えられる種は確認されませんでした。国外外来種は野外に放たれた場合、農作物被害や生態系に深刻な影響を与える等、様々な問題を及ぼす恐れがあり、ペットについても取扱いに注意することが必要です。

注1) 出典：標準原色図鑑全集 19 動物 I . 1968. 保育社.

注2) 出典：外来種ハンドブック . 2002. 地人書館.

注3) 出典：日本の哺乳類[改訂版] . 2008. 東海大学出版会.

注4) 出典：日本動物大百科 2 哺乳類 II. 1996. 平凡社.

表 5-16 分析対象種の確認状況の経年比較 (5/6)

No.	地整	項目 和名 河川名 / 巡目	飼育(ペット)由来の国外外来種															調査実施年度							
			アナウサギ					シマリス (チョウセンシマリス)					ゴールデンハムスター					1	2	3	4	5			
			1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5								
1	北海道	天塩川	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	H10	H15	H25	R5	
2	北海道	渚滑川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H7	H12	H17	H22	R2	
3	北海道	湧別川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H10	H15	H19	H29	
4	北海道	霧多川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H9	H14	H20	H30	
5	北海道	網走川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H11	H16	H21	R1	
6	北海道	留萌川	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	H8	H13	H24	R4	
7	北海道	石狩川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H11	H15	H22	R2	
8	北海道	尻別川	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	H8	H13	H18	H29	
9	北海道	後志利別川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H7	H12	H17	H22	R2	
10	北海道	鶴川	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	H9	H14	H24	R4	
11	北海道	沙流川	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	H6	-	H16	H25	R5	
12	北海道	釧路川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H9	H14	H22	R2	
13	北海道	十勝川	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	H8	H13	H20	H30	
14	東北	岩木川	-	-	x	x	x	x	-	-	x	x	x	x	-	-	x	x	x	-	-	H14	H25	R3	
15	東北	高瀬川	x	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	H7	H12	H17	H27	-	
16	東北	馬淵川	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	H9	H14	H22	R2	
17	東北	北上川	x	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	H7	H12	H17/18	H27	-	
18	東北	鳴瀬川	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	H9	H14	H22	R2	
19	東北	名取川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H11	H16	H25	R3	
20	東北	阿武隈川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H10	H15	H25	R5	
21	東北	米代川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H10	H15	H20	H30	
22	東北	雄物川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H11	H16	H25	R4	
23	東北	子吉川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H11	H16	H24	R4	
24	東北	最上川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H8	H13	H18	H28	
25	東北	赤川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H3	H8	H13	H18	H28	
26	関東	久慈川	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	H7	H13	H18	H28	
27	関東	那珂川	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	H7	H15	H23	R2	
28	関東	(利根川水系)利根川本川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H12	H17	H25	R5	
29	関東	(利根川水系)常陸利根川	-	x	-	x	x	-	x	-	x	x	-	x	-	x	-	x	x	-	H7	-	H25	R5	
30	関東	(利根川水系)中川・綾瀬川	-	x	●	x	x	-	x	x	x	x	-	●	x	x	x	x	-	-	H8	H14	H25	R5	
31	関東	(利根川水系)江戸川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H11	H16	H25	R5	
32	関東	(利根川水系)渡良瀬川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H9	H15	H25	R5	
33	関東	(利根川水系)鬼怒川	x	x	●	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H11	H16	H25	R5	
34	関東	(利根川水系)小貝川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H10	H15	H25	R5	
35	関東	(利根川水系)烏川・神流川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H8	H14	H25	R5	
36	関東	荒川	x	x	●	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H12	H17	H24	R4	
37	関東	多摩川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H8	H14	H20	H30	
38	関東	鶴見川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H9	H16	H24	R4	
39	関東	相模川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H10	H16	H28	R3	
40	関東	富士川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H11	H15	H25	R5	
41	北陸	荒川	x	●	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H11	H16	H25	R5	
42	北陸	阿賀野川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H7	H12	H17	H22	H30	
43	北陸	信濃川	-	●	●	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H8	H13	H21	R1	
44	北陸	関川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H10	H15	H24	R4	
45	北陸	姫川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H9	H14	H19	H29	
46	北陸	黒部川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H9	H14	H24	R3	
47	北陸	常願寺川	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	x	-	-	H7	H12	H17	H27	-
48	北陸	神通川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H11	H16	H25	R5	
49	北陸	庄川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H8	H13	H20	H30	
50	北陸	小矢野川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H10	H15	H24	R4	
51	北陸	手取川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H10	H15	H25	R3	
52	北陸	梯川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H7	H12	H17	H24	R3	
53	中部	狩野川	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	-	H5	-	H14	H25	R5
54	中部	安倍川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H9	H14	H19	H29	
55	中部	大井川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H8	H13	H18	H28	
56	中部	菊川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H7	H12	H17	H22	R2	
57	中部	天竜川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5/H6	H11	H16	H21	R1	
58	中部	豊川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H7	H12	H17	H26	R6	
59	中部	矢作川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H8	H13	H18	H28	
60	中部	庄内川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H11	H16	H21	R1	
61	中部	(木曾川水系)木曾川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6/H7	H10	H14	H25	R5	
62	中部	(木曾川水系)長良川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H10	H14	H25	R5	
63	中部	(木曾川水系)揖斐川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H10	H14	H25	R5	
64	中部	鈴鹿川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H11	H16	H21	R1	
65	中部	雲出川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H8	H13	H18	H28	
66	中部	穂田川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H9	H13	H19	H29	
67	中部	宮川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H10	H15	H25	R5	
68	近畿	由良川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H7	H11	H16	H26	R6	
69	近畿	(淀川水系)瀬田川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H8	H13	H23	R3	
70	近畿	(淀川水系)草津川	x	x	x	-	-	x	x	x	-	-	x	x	x	-	-	-	-	H6	H11	H15	-	-	
71	近畿	(淀川水系)猪名川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H10	H15	H23	R3	
72	近畿	(淀川水系)木津川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H8	H13	H23	R3	
73	近畿	(淀川水系)野洲川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H9	H15	H23	R3	
74	近畿	(淀川水系)淀川	x	x	●	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H8	H13	H23	R3	
75	近畿	大和川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H10	H14	H20	H30	
76	近畿	丹山川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H10	H15	H26	R4	
77	近畿	加古川	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	x	-	-	H7	H12	H17	H27	-
78	近畿	揖保川	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	x	-	-	H7	H12	H17	H27	-
79	近畿	紀の川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H6	H11	H16	H27	R4	
80	近畿	(新宮川水系)熊野川	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	H5	H10	H15	H25	R5	
81	近畿	九頭竜川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H8	H13	H21	R1	
82	近畿	北川	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	-	x	x	x	x	x	-	-	H9	H14	H19	H29	

凡例 ◎●: 確認 (うち◎は今年度の確認)、x: 未確認、-: 1~4 巡目調査は河川環境データベースに調査データが未格納、5 巡目調査は調査未実施 (薄字の河川は本年度とりまとめ対象外の河川である。)

</

